

---

**俺にかまわず先に行け！！！！俺？追いかけるわけねえだろ**

仲鈍要

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺にかまわず先に行け！！・・・俺？追いかけるわけねえだろ

### 【Nコード】

N5712X

### 【作者名】

仲鈍要

### 【あらすじ】

俺の名前は斉藤隆盛、これといって特に目立つこともない普通の人間だ。幼馴染には完璧超人がいるが、そいつには常日頃殺意を抱いている。

そんな幼馴染と一緒に帰っているといきなり地面が光り出した。俺は咄嗟にその場から飛退き、幼馴染の背中を押し、光の渦の中心へと追いやった。そして次の瞬間には幼馴染の姿は消えていた。よっしゃ！これでこいつにかき乱されることのない人生を送れるぜ！！そう思っていたのだが、何故俺の真下に光の渦が現れる？

これは俺と一緒に異世界に飛ばされた者たちと送るちよっとおかしくて平穩な物語。

## いつ召喚されるか果てしなく未定のプロローグ（前書き）

あいかわらずの駄文以下の物ですが、ほんの少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## いつ召喚されるか果てしなく未定のプロローグ

体育館の裏、俺は彼女に呼び出されていた。

「ごめんなさい、隆盛君、わたし好きな人が出来ちゃったの」

俺、斉藤隆盛（さいとう りゅうせい）だれだ！？もりたかって読んだの！！（は人生で3度目の恋人に振られる経験をしたのだった。しかもその全部が1カ月以内今回は3日で振られた。

「相手、誰なのか聞いてもいいかな？」

3度目となればショックはあるが、三度目となればある程度の耐性はある、俺は動揺を隠しながらも冷静を装い尋ねる。

「隆盛君の幼馴染の・・・」

「また・・・かよ」

俺の元恋人は恥ずかしそうに頬を赤らめながら相手の名前を言おうとうするが途中まで聞けばもう十分だ。

俺の恋人を奪った相手・・・今回も含め3回すべて同じ相手だ。あいつは俺にとっては最低なやつだが、彼女にとっては大切な人だ。それにその幼馴染を、いくら一方的に振ってきたとはいえこちらから告白した身だ、好きだった人の前で一方的に貶すのはあまりしたくない。

「でも、分かってるの？」

おそらくすべて承知の上なのだろう、だけど俺は尋ねる。

「分かっているわ、でも私はあの人が好きなの！！！」

「そう・・・じゃあ俺は加奈ちゃんの幸せを願うよ。」

俺は元恋人の加奈に涙を浮かべながらも精一杯作った笑顔を向ける。

「ありがとう！！！」

加奈も俺にとびっきりの笑顔を向け、去っていく。だけどこの笑顔は俺に向けられたものではことを理解している。

「・・・あいつ死なねえかな」

加奈が去っていったのを確認した後に俺は露骨に嫌悪した顔でそう呟く。対象はもちろん俺の彼女を（おそらく）寝とった幼馴染だ。NTRされた奴の嫉妬？それでもいいさ、この悔しさは誰にもわからない。むしろ最近耐性ではなくNTR属性がついてきた気がする。

「ハアツ、あいついつか絶対泣かしてやる」

さて、ここで突然だが俺の自己紹介をしておこうか。

俺の名前は斉藤隆盛、さいとうりゅうせいだ。間違ってもさいとうもりたかじゃない。2回目だが俺にとっては重要なので言わせてもらった。

私立、島ヶ先高校に通うごく普通の生徒だ、強いて違う所があるとすれば副生徒会長つてところくらいかな

成績も悪くはないがすごく良いというわけではない、運動も同様。好きなタイプは髪色は何色でもいいがロング これだけは外せない。

それと背はちつちやめで童顔が良い。胸はもちろん控え目が好きだ。それと冒頭のシーンで女性に振られていたことからわかるようにノーマルだ。女性に振られたからといって男色に目覚めたり2次元の世界に目覚めたりはしていない・・・かろうじて。一時ラ + にガチではまったがなんとか戻ってこれた。

さて、次にここにはおらず名前すら出てこないくせに存在だけはやたらと主張されている俺の幼馴染について軽く紹介しようか。

こいつを一言で表すならば漫画やゲームでよくいるような完璧超人、これに尽きる。容姿、学力、運動神経、性格どれをとっても完璧だ。天は2物を与えずとかほざいた奴に俺は顔面パンチを食らわせた後にその顔面にひざ蹴りを食らわせてやりたい。

そしてその容姿ゆえに学校内にファンクラブができている、いや学校内だけでなく他校にだってできていると噂を聞くぐらいだ。

学校では常に人に囲まれており、生徒会長として存分にその魅力を発揮している。そのせいで幼馴染兼副生徒会長という近い立場にある俺に嫉妬を向けてくる少数ながら者がいるがそれは果てしないかほどに筋違いだ。

――なぜそんな完璧超人の近くにいながらも俺に嫉妬が向けられていないのか？

その理由を一つずつ説明していこう。

まず第一に完璧生徒会長様は同性愛者だ。誰だ！？アーツとかいったやつ。何を勘違いしているか知らないが生徒会長は女だ。

つまり俺は過去2回、現在終了で1回女に女を寝とられた。

第二に生徒会長様はその同性愛の趣味を公言していらっしやる、さらにハーレムを作り上げるとか堂々と言っているくせに生徒会長に

寄（酔）っていく女生徒は多い。

男子生徒？あるのは玉砕だけだよ。それでも性格もいいし、容姿もいいから玉砕する物は後を絶たないし、恨みを買うこともない。ただし、彼女を寝とられたやつ（俺）にはひたすらに恨みを買っているがな。

第三にその同性愛の関係も非常にオープンでいらっしやる。どれくらいオープンかというと放課後に生徒会室からしか行けない一室（鍵付き+なぜか防音設備まである）で生徒会長と女生徒（日替わり）でその部屋にはいり放課後はお楽しみでしたな状態だ。

しかもいやなことに俺以外の生徒会メンバーが女なので、俺以外の全員でその部屋に行くことがよくある。

生徒会の仕事は俺の仕事。いくら声が聞こえないとはいえ隣の部屋でそんなことをされていると思うと気が散るので、少し離れたところにある放送室に入れさせてもらい仕事をやっている。

仕事しろといったところで聞き入れてくれるはずもないし、なぜか俺が悪いことにされるので俺は抵抗を諦め黙々と放送室で作業を進める。

俺はよく耐えていると思う、この理不尽な仕打ちに。それとこれは完全に蛇足だがなぜか俺が友人とあの子可愛いねーなどとそんな話で友人（男）と話していると早くて一日遅くとも一週間後には幼馴染のハーレムメンバーの一人になっている。

絶対に悪意を持ってやっているのだろうが、証拠もなく抗議したところで相手にされないもしくははからかわれるだけなので俺はそろそろ愛を捨てようかと真剣に悩んでいる。

そろそろ本気で愛など要らぬ！！って叫べそうだ。流石に付き合って三日後に振られるのはショックが大きい。



「ああ、父さん母さんごめんなさい。俺はあなたたちに孫の顔を見せてあげられそうにないです。」

涙を堪え空を見上げる。滲んで見えた。空の青さと雲の白さだけは分かった。天気は俺の心模様とは裏腹に快晴だ。

・・・いつまでそうしていただろうか？空はすでにオレンジ色に染まり、逢魔が時を迎えた。涙はすでに乾いていた。心の中に広がるオアシスもすでに乾いていた。

「帰ろうか。」

俺は生徒会室に置きっぱなしの鞆を取りに行くために校舎へと向かった。

カツンカツンと歩くたびに廊下と上履きから発せられる音が響く。生徒会室の前まで来ると俺はいったん止まり、扉に手をかける。ガツガツ。と開こうとするが途中で止まる。どうやら鍵が閉められているようだ。

俺はポケットの中から鍵を取り出し、鍵を開け、生徒会室へとはいる。

「おさま」

隣の部屋からは防音のはずなのに艶っぽい声が漏れている。心の中で舌打ちし、死ねと口で呟く。

「鍵置いておきますんで戸締りお願いします」

俺は行為に夢中で聞こえていないであろう幼馴染にその声をかけ、  
鍵を机の上に置き、生徒会室から立ち去る。

俺は家に帰ると、制服も脱がずにベッドにダイブした。ベッドにダ  
イブするとすぐに眠気が襲ってきた。

「りゅうせいーはんよー」

俺を呼ぶ声が聞こえ、目を覚ました・・・枕はかなり濡れていた。

もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル(前書き)

バイト行ってき

## もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル

俺の視界は真っ黒に染まった、いやこれは比喻表現であり、実際にはちゃんと目の前の光景は映っている。

俺は”それ”を認識した瞬間に体が硬直し、次に自然と体が震えだした。強敵（と書いて友と読む）にであったりや、歓喜に体が震えているからではない。

それは恐怖、もはや自分の安全地帯は無いのかと思う諦めにも似た恐怖、そして自分の個人空間プライベートを浸蝕されたかの如くの不快感。

——ふざけるな！！何故貴様がそこにいる！！！！

心の中でいくら叫んでもそれが実際に声になることはない、実際に声に出してしまえば家族から奇異の目で見られるに違いない。

故に俺は体の震えを必死に隠しながら、叫びたい衝動を抑える。

「いつ食べてもおばさまの料理はおいしいです」

「あらいやだわ、そらちゃん、こんなおばさん褒めたった何も出ないわよ。」

「本当のことを言っただけですよ」

「私、そらちゃんみたいな子が欲しかったわ。隆盛みたいな子じゃなくてそらちゃんみたいな子が」

——何故貴様が俺の家にいる！！空！！！！！！

俺の心の平穏を乱すどころか、唯一残されたオアシスすらも枯らし

尽くすかのごとく（俺にとって）理不尽な存在、そして俺の幼馴染  
神宮司 空がそこにいた。

「あら、隆盛君が起きたみたいですよ」

空は俺を勝ち誇ったような目で見てきた、ああ、無様だろうさ。つきあって三日目で同性に彼女を寝とられた男は惨めだろうさ。

俺は目の前からこの悪魔を消し去りたいという衝動を抑えながら食卓の席に着く。

「珍しいですね、生徒会長が家に来るなんて」

顔に笑顔を張り付け、どこか距離を置いているような言葉使いで俺は空に話しかける。実際距離をおきたい。だれかこの幼馴染をどこか遠いところへ連れて行ってくれ。

そして俺に彼女とイチャつける日々をくれ・・・いやもう彼女なんていなくてもいいかもな。

「ええ、ちよつと隆盛君とお話ししたいことがあって、それに最近  
は隆盛君お話できなかつたから来てみようって」

ふざけんな、てめえのお話は完全なる愚痴じゃねえかよ。ここが学校であれば何か口実をつけて回避したいところだがここで回避しようとしたら母親+妹の旭日から説教喰らうこと間違いなし。

ちなみに妹はさっきからずっと空に対して熱い視線を送っています、だれかこの発情レズ娘をどうにかしてください。

「でもその前に旭日の相手をして上げてもらってもいいですか？  
こいつは空のことが本当に大好きですから」

俺がそう言つと旭日は顔を真っ赤にして空を潤んだ瞳で見つめる。母はあらあら若いわねえなどと分かつているのか分かつていないのかよくわからないことを言っている。分かつているのだとしたら尊敬をせざるを得ない。

妹を時間稼ぎに使うのは我ながらうまい時間稼ぎだと思った、こいつがうまく時間を潰してくれば俺への被害が少なくなる、むしろ時間を潰し過ぎてそのまま帰ってくれるかもしれない。

俺の言葉に空は少し悩んだようなくさをしてから、構わないわよ。と返事をした。

俺は心の中でガツポーズをした、今まではなんとなく気に食わない妹だったが今だけは感謝してやろう。しっぽりとやっけてくれ。

夕飯も食べおわり、空は旭日と一緒に旭日の部屋へと消えていった。幸いにも俺の部屋とは離れているので気にすることなく自分の部屋でゆっくりすることができる。

学校から宿題は出ていない、特にすることもない。俺は携帯を取り出し某呟きサイトを開き、呟く。

親友に彼女寝とられたなう、その親友が家にいるなう。

親友というのは嘘だが、まあいいだろう。

数十秒後、ドンマイ等と慰める声とザマアwwwなどという心ない声が書かれていた。

続いて実はこれ3回目、しかも全部親友に寝とられた。

そう呟くと、今度は本気で憐れむような声と親友死ね、爆発しろという声が書かれていた。

特にこれ以上呟くこともないのでパソコンを立ち上げ、2chに親友に彼女とられたけどなんか質問ある?というスレタイでスレを立てた。

part3まで続いた。

「本当にいい加減にしてほしいわー、私は男なんかに興味ないんだってのに」

・・・どうしてこうなった、俺は今空と一緒に外を歩いている。空は旭日との情事に大してノリノリだったようで、相当な時間に及んだ。

俺はこれで助かった!!!と大喜びしたのだが家の母ババアがそらちゃんを送っていきなさい、とふざけたことをぬかし、現在に至る。

そして愚痴をひたすらに聞かされ続けている。さっきまでの空?あんなん外面だ、こつちが本性。

「ハイハイ、ソラサマノミリヨクはスバラシイデスカラネー」

ひたすらに棒読みで空の愚痴に相槌を打つ。

「そついえば、ほら私があんたから取った子いるじゃん?加奈ちゃん。あの子いい子ね。今日学校で張り切っちゃったわ」

こいつの話をもとに聞いてはいけない、聞いてしまえば俺の心が持たない。

「ワアーソレハヨカツタデスネ」

俺は棒読みで返しているが空は何も言っていない、愚痴に夢中なのだ、それと俺の心を騷るのに。

「それでさ、流石にこれで3回目だし私もちよつとは悪いと思ってるわけよ。だから私のラヴァーズの中から誰か紹介してあげようか？」

「・・・ボクニハトテモモツタイナイオハナシデス」

激しく心が揺さぶられたがなんとか耐えた。だが平静を装うために間ができてしまった。

「一回ぐらいだったら私が相手して上げようか？女の子にしてあげることと同じでよければだけど」

「ボクニハトテモモツタイナイオハナシデスノデツツシンデエンリヨサセテイタダキマス（訳：ふざけんなレス野郎）」

先ほどまでの動揺はどこへ消えたのか一瞬で平静に戻れた。天敵に無防備な姿をさらせるわけがない、今度は背中から冷や汗が流れた。それにこの話は確実に冗談だとわかっている、その証拠に空の顔は笑っていないやがる。俺がこれに飛びついたら間違いなくネタにされる。

「ソラサマハトテモオウツクシイオカタデスノデワタクシノヨウナモノトハナスヨリモモツトスバラシイカタトハナシテイタホウガヨロシイトオモイマスヨ（訳：さつさとどこかへ行ってくれ。俺の平穩をぶち壊すな、つーか俺に関わらないでくれ）」



さつきから一人称が安定しない？気にするな。

「ははは、そろそろ真剣に私の愚痴を聞いてくれてもいいと思うのだが、ん？」

俺が棒読みで返しているとなついに空が切れた。今までは許してくれていたのに理不尽だ。空は俺の顎を右手で掴み、そのまま俺を持ち上げる。

片手でしかも大の男を持ち上げるって女の子としてどうよ？というか男でもできねーよ。だが、空なら仕方がない。

ここで下手に抵抗しても余計に痛い目を見るだけなのであごの痛みに目をつむりながら、抵抗を諦める。

「せっかく美少女が誘っているというのに中々つれないじゃないか。なあ幼馴染よ」

俺にとっては幼馴染と書いて天敵と読むんだよそう言ってやりたいが顎を掴まれており喋ることができない。仮に喋れたとしても喋らないが

「つい最近幼馴染に彼女を取られて女性不信に陥りそうなんですよ」

流石に片手で大の男を持ち上げ続けるのは辛いのか地面に下ろされあごも解放されたのでそう返した。

「ならばこの優しくて美しいこの私が幼馴染の女性不信を癒やしてやろうではないか、幸いにも私は女だしな」

空が大げさに手を広げながらそう言った。

「お前が男で、今と同じように人の彼女寝とっていたら女性不信どころか人間不信に陥ってたわ。」

そもそも女性不信の原因はお前だ。お前がいなくなれば俺の女性不信も治るだろうよ。

俺は神に祈るも空がいきなり目の前から消え去ることもなく、何事もなく俺は空を送り届け、家に帰った後に今日の学校のことを思い出し、再び枕を濡らした。

もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル（後書き）

・・・べ、別に幼馴染とフラグ立っているわけじゃないんだからね  
！！！！

いざというときのための逃げ道なんだから・・・

空「私の隆盛を取るなんてことさせないんだからな！！」  
で主人公の彼女を寝とるなんて妄想できた人は幸せ

・・・いつになったら召喚されるの？

翌日、学校教室にて

「今あいつらデリケートな時期だろうから、気は進まないけどこのままじゃ俺の心も持たないしな」

俺はいつもより遅めに学校に登校し、とあるクラスメイトを探していた。

捜している人物は、松林雄吾まつばやし ゆうごが現筆頭のオタク半引きこもりのようなイメージしかもてない、世間からは犯罪者と思われていないようなグループ（つまりロリコンでオタク）の5人グループだ。

つい一週間ほど前までは6人グループで、雄吾がグループの筆頭ではなかったのだが元筆頭だった言成とかいうやつが奴がトラックに轢かれて死んだ。おかしなことにそのトラックは無人でありながら狭い道路を直進、狙い澄ましたかのごとく言成の近くで暴走を始め轢いたそうだ。

「すまない雄吾君ちよつといいかい？」

「オウフ、いきなり雄吾氏に話しかけるとは何ようでござるか。デユフフ」

う、うぜえ、何なんだこいつ？俺は戸惑いを隠せない、俺は確かに松林雄吾に話しかけたはずだった。だが返してきたのは鈴木政一すずき まさいちだった

なぜ、こいつの親は一をかすとよませずいちにしたのだろうか？普通通かすに思うのだが。



うのですな」

俺のその返答に4人は狂喜乱舞した。だが最後の一人、古川流ふるかわながるだけは冷静だった。

いや、その表情は冷静だとか冷めているだとかそんなものではない、完全なる無表情だった。

「お前ら・・・いやこれは言わない方がいいな。」

この事実に気づくのは俺だけでいい。そんなことを言いたげなとても悲しい声で小さくそう呟いた。

「今は授業中じゃないから別に騒ぐのは構わないがハメは外し過ぎるなよ」

暴走する4人に対し俺は警告だけはしておく。しまったな、こいつらに静かにしてもらわないと話が進まない。何か方法は無い？俺は目で流に尋ねた。

だが流は首を横に振るだけだった。

「おはようございます」

暴走する4人を生温かく見守っていると教室の入り口から俺の天敵の声が聞こえてきた、

「ちょっと、あんたたちうっさいわよ！！お姉さまの可憐な声が好きとりづらいじゃない！！！！」

クラスの女子（性格には他クラスの女子もかなり多い）が奇声をあげ続ける4人に制裁を加える。

「ヒギヤツ!?!」

「ウボフ!?!」

「アア、モットオ!?!」

「我々の業界では御褒美です!?!」

「ちょっとつらやましいな」

「お前さすがにそれは引くぞ」

女子軍団に集団暴行を恍惚な表情で受ける4人から少し離れたところで俺は流とはなす。

「それで結局何の用だったんだ?」

「ああ、さっき言っていた通り彼女を幼馴染に寝とられてな、お前らと同じ道を行ってみようかと」

「なら普通の深夜アニメでも見ていたほうがいいぞ。」

「それは既にチェック済みだ、2人目の彼女を寝とられた時からな」

「乙」

俺と流は授業のチャイムが鳴るまで目の前の光景をぼーっと眺めていた。

だが、目の前の光景のおかげで女って怖いなということを実際に認識することができた、現実に対する未練が減った気がする。

「隆盛君少しいい?」

昼休み、今日は一人になりたいからという理由で拘束を破り、屋上で弁当を食べるか、拘束を破らずにトイレへと行きたいところだが、ほかの生徒の手ながら鞆から弁当を取り出すさなか俺は、空に声てんてきをかけられた。

「何の用ですか?生徒会長」

全ての感情を押し殺し、笑顔を受けべる。できることならばこいつを無視して屋上かトイレへと行きたいところだが、ほかの生徒の手前そんなことはできない。

もしこいつを無視したとなれば、おそらく学校中の女子から私刑しんちにあうだろう。

「生徒会の仕事のことなんだけど、」

「ああ、それでしたら大丈夫ですよ、大体は終わらせておきましたし残っている仕事も今日中に終わる予定なので明日最終確認をしてくだされば結構ですので生徒会長はいつも通りのお仕事たぶらかしをお願いします」

お前が仕事をやんねえから俺がやってんだよ、しかも書記とかほかの子も全員女子でお前に骨抜きにされてるから全部俺の仕事になつてんだよ。

お前はもう仕事するな、邪魔だから生徒会室の奥の部屋に閉じこもってよろしくやってろ。

実際に声にだしている建前とは裏腹に心の中では毒づく。



「それも悪いし私もやっていくわ、今日中に終わらせましょう」

「いえいえ、仕事といっても最後の仕上げだけですし、期日もまだありますので明日で結構ですよ」

お前に関わらなくてもいいの時間を邪魔するな、心の声だ。

「いつもやってもらって悪いしそれくらい気にしないわよ」

「そんな、お姉さま今日は私をかわいがってくれるって」

空が仕事をしようとするが俺はそれを拒否し、それを空が拒否する。その状況がしばらく続くだろうな、どうやって諦めさせようかと考えていたところ、俺たちを囲む生徒のうちの一人の女子生徒が泣き崩れた。

おそらく、空に今日可愛がってやるとでも言われていたのだろう。  
・  
・  
・ チャンスだ。俺は顔がにやけそうになるのを必死に耐え、空に何かを言われる前に先手を打つ。

「何か約束事があったのですか？ではそちらを優先してあげてください。今日中にどうしてもというわけでもありませんので約束事を優先してあげてください」

俺は心の中で勝ち誇る。勝った！！！俺は空に勝ったのだ！！！！！少しでも気を緩めれば顔がだらしなく緩んでしまうだろう。今だつて必死に抑えようとしながらも口元が少し緩んでしまう。

「……そうね、じゃあ明日書類を渡してくれる？」

「分かりました、今日中には終わらせておきますので明日最終確認をお願いします」

そこで俺は話を打ち切り、机に出した弁当を手に持ち教室の外へ向かう。

気分が良い、空に勝つということはこうも俺に爽快感を与えてくれるというのか、今なら空だって飛べるような気がする。

俺は足取り軽く階段を上ってゆき、この先生徒進入禁止と書かれたプレートを無視して屋上の扉を開けた。

空が青い、新鮮な空気に肺が満たされる。ああ、今日はなんて素晴らしい日なのだろう。

・・・いつになったら召喚されるの？（後書き）

隆盛に花を持たせてみた。見返すには程遠いがこれで十二分に満足している隆盛はすでに空に負けているのではないか？だとかそんなことを言っではいけません

後2話位で召喚させたい(前書き)

そのせいであまりふざけられなかったです、申し訳ありません。

## 後2話位で召喚させたい

「ほほう、隆盛氏の趣味に会いそうなものをこれかな」

放課後、俺は雄吾と教室の隅でこっそりと話していた。

雄吾の手には一つのCDケースがある。残念ながらその中身を確認することはできないが見られたら色々とまずいので好都合だ。

俺が何をしているかって？いやさ、仮想世界の女の子って裏切らないじゃん？裏切られても最終的にはハッピーエンドじゃん？

・・・え？バットエンドも結構あるって？いや俺やるのそういう類じゃないから。信頼と実績の萌えゲーだから。

「じゃ、生徒会がんばって」

「ああ、助かるよ。これで俺はしばらく耐えられそうだよ」

雄吾からCDケースを受け取り、すぐさま鞆の中にしまい教室を出る。目指す先は生徒会室・・・に書類を取りに行き、近くにある放送室を借りてそこで仕事だ。

この物語に登場する人物はみな18歳以上です、年齢については明言されていないので何があるうとも18歳以上という言い訳を続けます。ツッコミはいらんないよ

雄吾からCD・・・いや正確にはDVDを受け取ると俺は生徒会室に急ぐ。理由は空も生徒会室にいるからだ。

仕事は全て俺に投げ、奥の部屋でしっぽりとやっている空。生徒会室の奥の部屋でやっているのだおなじ部屋というわけではないが、生徒会室に入るということが非常に気まずいのだ。

わずかに漏れる喘ぎ声。もしその声の主が俺を振った元カノだった場合俺の心はずたずたに引き裂かれる。

故に俺は生徒会室に急ぐ、奴らの情事が始まる前に行けば、俺は何を気にすることもなく書類を取り、放送室へと向かうことができる。逆に既に始まっていれば俺は非常に気まずい中生徒会室に入らねばならない。

・・・いつそ始まっていたらサボりたいところだが、既に昼休みに明日完成させた書類を渡すことを言ってしまったている。

もしこれを破れば恐ろしいことが待ち受けているに違いない。

前に一度破ったことがあるがその時は俺の部屋の家宅捜査を受けた。もちろん抵抗したが、空の側近に俺の妹が空に賛同しやがったせいで俺は椅子に縛られ、物色されていく俺の部屋プライベートルームを見ることになった。俺だって思春期の青年なんだ、当然その類は持っている。だがそれは物質ではなく電子的にだ。つまりは中身はPC。

当然パスワードはかけてある・・・が破られた、そこからは正に公開処刑だった。

ー！ー！いつそ殺せ！！！そう叫びたかったが口にはガムテープを張られ、んーっんーっ！！！とくぐもった声しか出ない。目の前が滲む、俺は泣いた。

さらに追い打ちをかけるかのように、入っているデータの名前を一つ一つ読み上げ、感想を述べて行った。俺の心はもはや修復不可能なレベルにまで追い込まれた。

あんな悲劇はもう二度と起こさないし起こさせない！！！！

その決意・・・もとい服従を受け入れた俺は走る。少しでも俺の心の平穏を保つために。

結果？・・・聞くだけ野暮なものだよ。無駄だったよ。初々しい初めての娘だったら間に合ったかもしれないけど今日のお相手は生徒会の一人だったんだ。

間に合うわけがなかったんだ。俺は気まずい思いをしながら生徒会室に入り必要なものだけとるとすぐに生徒会室を後にした。

「オオウ、これは隆盛氏奇遇ですな、隆盛氏はもはや我らの同志、誰もいない放送室なんかよりも我らコンピューター同好会へ来ぬでござらぬか？」

「え、遠慮しておくよ」

コンピューター同好会・・・通称魔窟、ここには政一みたいな奴が集まると聞く。正直俺にはこいつだけでお腹いっぱいだ。

「ぬあくに安心したまえ、私らは君の邪魔をするわけではない、それとも副生徒会長殿は噂を信じ、そのもの自体を見ずに毛嫌いな性質かね？」

政一の言葉に若干引きながら答えると後ろから正にラスボスといった重厚感あふれるテノールボイスで話しかけられた。

俺の後ろのいる者の正体それは隣のクラスの通称魔王とよばれる身長190cmオーバー顔もかなりの老け顔で声にも迫力があり、さらには何かしらの武道をやっているという学校内において最強に最

も近いと言われている男、若槻わかつき力哉りきや

さらに不良は問答無用でたたきのめし、困った人は見捨てられないお人よしとかなりいい奴。俺も何度か彼女寝とられ時に相談しようかと思っただが、あまりの漢らしさに薔薇の道に行ってしまうしうだつたのでやめた。

実際に彼女に振られたことを相談したやつが道を踏み外し薔薇の道をいったと聞いたことがある。ちなみに好きな教科は家庭科、趣味は裁縫だそうだが、初見の人は絶対に嘘だと思っただろうが本当のことだまあ、こいつ自体は非常にいい奴なのだが、こいつには非常に困った趣味がある。

こいつの趣味は裁縫なのだが・・・それは服を作れるレベルだ。さらにこいつが作るものはやたらとフリフリがついたりだとか、そんなかわいい女の子が着るような類のものが多い。

ここからが問題だ、いや上記でもちよつと問題がありそうだが、今から語る問題の前ではその程度は塵芥程度の問題が。

さあ、ここまで語っておきながら僕は一度たりとも着る対象のことについては触れていない。勘のいい人はここですでお気づきだろう。

着るのだ・・・作った本人が。学校で、部活中に。後はもう何も語るまい。

さて、今日の彼の服装は・・・冥土メイドか。なかなか恐ろしいものを見た。

そしてさっきのあなたの台詞俺のこの目で見た正当な評価だよ。お前らは問題は起こしてないけど、その存在は色々問題だということとを自覚してくれ。

「いや、いきなり部外者の俺が行くのもあれかなって思っただけ。それに今からこれまとめないといけなから静かなところの方がいい



し」

俺は魔王の迫力にビビりつつも、手に持つ書類を見せる。

「なんだ、ならば私が手伝ってやろう、ぬぁに気にするな。たった今から私は貴様と友になったのだ。友とは助け合うもの、そうであるろう?」

「あ、うん、そうだね」

「よし、ならば貴様のいう静かな所へ連れて行ってもらおうか。政一よ私は今日部活に出れぬと皆に伝えておけ」

「魔王殿が来ぬとは寂しいでござるが、拙者らは魔王殿の優しいところにも救われているでござる。隆盛氏も我らと同じように救ってあげてほしいでござる」

政一はそう言って、ダッシュで逃げて行った。あいつは本心から言っているのだろうが行動は真逆だ、おれにこいつを押しつけやがった。

いくら性格が良い奴でもメイド服きた190cmのやたらガタイのいい奴とはいたくないよな。

そう思いながら、魔王に引きずられる俺だった。

「今日は助かったよ、ありがとう。」

完成した書類を揃えながら魔王に礼をいう。僕の目に映るのはメイ

ド服姿の魔王だ。彼女にこんな恰好をしてもらって尽くしてもらいたいなどと妄想するが、なぜか涙が出てきた。

「気にするな、私が好きでやったことだ」

魔王は素敵なダンディーボイスでそう答える。仕事はそんなになかったとはいえ一人でやっていては多少時間のかかるものだったが彼が手伝ってくれたおかげで予定よりもだいぶ早く終わった。

「では、気をつけて帰るのだな。私は私を待つ友の所へ行かねばならん。また困ったことがあれば気軽に声をかけてくれればよい」

そう言っつて魔王は豪快に笑いながら去っていった。

「帰ろうか」

去りゆく魔王の後ろ姿を見送り俺はそう呟いた。

後2話位で召喚させたい(後書き)

新キャラ?なんとなく出しただけですよ?

だけどおかしい、今回で今予定している次話のところまで進めるつもりだったんだ・・・何があった

さあ……やりたいことはやった……!! (前書き)

基本的に書き始めたら1日で1話書いているから勢いがなくなった  
からおしまいでござる

「さあ！ーやりたいことはやった！ー！！！」

「最近のゲームの設定ってすごいな」

俺は雄吾から借りたゲームをPCにインストールし、しばらくやってからの感想がそれだった。

別に俺はこういう物の類を嫌っているわけではない、でなければラ  
+ などやるわけもなかった。ましてはあそこまでハマるわけもなかった。

どこまでいったのかは察してくれ、俺の黒歴史ゆえに語りたくはない。

さて、話は変わるが人間褒められることと怒られることと無視されることとどれが一番つらいか分かるだろうか？

答えは無視されることらしい。

今俺がやっているゲームはそんな全ての人から無視され続けた青年が心優しき（爆笑）御主人様達（ただしDS）に拾われ、教育・・・じゃなくて調教もとい玩具として扱われる非人道的極まりない物語だった。

主人公は拾ってくれた御主人様達のDS心を満たすために散々無茶なことやらされるわけだけど、それは主人公にとって辛いものではなく当たり前のものにならなくていくわけだよ。

例えどんな生活をしていようとほかの生活を知らなければそれが当たり前、人間はいかに自分の主観のみで生きているかとか俺はもう泣かずにはいられなかったよ。

それにいくら当たり前の日常とは言え鞭で打たれば痛い、その痛みに耐えるために主人公はDMに目覚めたり、何かしらの罰を与

えられなければ主人公にとって一日が始まらないくらいな物になってくんだよ。

罰とはいってもこれは主人公にとっては御主人様からの愛情表現みたいなものだし、御主人様達にとってはドS心を満たすための玩具。もう、ほんとに涙が止まらない。

そんな救いようのない展開だったが、俺はこのゲームを持って学んだ。

人は一人では生きてはいけない、それは親がいなければ生まれてこれないし、育ててくれる者もない。たとえどんなひどい扱いを受けようが育ててくれる者がいなければ、生きることすらできない。生きていられるだけで幸せそう思う人もいれば生まれてこなければよかっただなんて思っている人もいる。

もし、後者のように考えている人がいるのなら少しでもいいから考えてほしい。

――あなたは今まで生きてきた中で幸せを感じることがありましたか？ と。

もしあなたが生まれてこなければその幸せを感じることもすらできなかったのだと、あなたの現状が他人から見れば幸せに思える立場にいるのかもしれないのだと。

もちろんあなた自身のことを他人が理解できるはずもない、だからこそ言わせてほしい、あなたも他人を理解できないのだと。

そんな風に終わってくればよかったな。って本当に思います、はい。

いや、そんな綺麗にこのゲームが終わるなんてことはなく、絶賛プレイ中です。でも俺は今すぐにでも閉じようかと思えます。俺のPCに映るのは主人公と犬と蛇のCG・・・一枚絵だ。

ああ、先に言うておくが俺は18歳以上だ。この一言で今俺が何を見ているのか大体分かるだろうから、それを察して数行を飛ばしてほしい。

「あれ？おかしいな？俺が借りたのはいわゆる萌えゲーだったはずだぞ。ディスクに描かれていた絵から違うとは思っていたけどこれは流石にないぞ。あいつらとはやっぱり距離を置くべきだよな？」

俺は後悔した、このゲームをインストールしたことに。そしてプレイしてしまったことに。俺はもう雄吾のことをまともに見れそうにない。

目の前のCGでは少年”が”犬を犯している・・・現実にはこのようなことはないだろうがこれはゲームだ。だが誰得？そして少年の後ろには蛇が突っ込まれている、詳細に語るにはこの場は不適切だと思われるのでこれ以上は割愛しよう。

マジで誰得？ねえ、なんでこんな展開があるの？きつと需要があるからこんなシーンがあるのだよな？疑問は尽きない。

俺は自分の部屋でゲームの感想・・・まあ途中だがあまりの展開に一旦画面をそのままにして一人感想を述べていた。

もちろん部屋には鍵をかけてあるし、音漏れもないようにイヤホンを装着済みだ。

だからこそ油断していた。人はいくら話で聞いていても実際に体験しない限り本当の意味で学んだということにはならない、偶になるようなやつもいるだろうが（主に俺の幼馴染とか）そんな奴は本当に稀だ。

もちろん俺も前者であり、まさかこのような事態に陥るとは思っていなかった。

・・・話しが分かりにくい？簡潔にまとめよう、空が俺の部屋をピッキングで解錠し、部屋に乱入してきた。

「隆盛君？少しお話したいことがあるのだけれども」

もちろんどこに耳があるかもわからないので、猫を被ってだ。

突然の侵入者に固まる俺をよそに、空は素早く扉を閉め、鍵をかける。これで俺の逃げ場はなくなった。扉を開く際に解錠するという一手間をこいつが与えてくれるはずもない。

・・・そろそろこいつ殴ってもいいよね？俺キレてもいいよね？俺よく頑張ったよね。今まで最低限のプライバシー（部屋に侵入しない）を守ってくれていた守ってくれていたからなんとか耐えられたけど侵入されたっことは俺の安楽の地がなくなっただけだ。だよ。だが、俺はこの場を動くわけにはいかない、俺が今動いてしまえば俺が今体で隠しているデスクトップが見えてしまうからだ。

「会いに来てやったぞ隆盛。よろこべ、美少女が何も持たずに無警戒に男の部屋に入ってきたのだ、これは襲うしかないだろう」

俺には（物理的に）俺が襲われ、一方的に蹂躪されていく様しか浮



かびあがりません。

「ん、なんだその顔は。まるでアダルトな本が親に見つかった時の中学生のようだぞ。」

無駄に鋭いな。俺は空の観察眼に感服する。

「ああ、安心しろ。私はその程度では軽蔑などしない。」

そういう空の顔はすごく楽しそうだ。おそらくしばらく俺をからかうネタとして使いつもりだろう。

「い、いやこれちgo」

「なに、見せてみる。」

焦る俺に余裕の表情で近寄ってくる空。俺は焦りと恐怖により混乱状態に陥る。

「ハアツ!!!!セイツ!!!!!!」

混乱状態に陥った俺は証拠隠滅を図るべく、空に向かって殴りかか  
る。だが、平常心を失っている俺にまともな喧嘩ができるはずもな  
い。

まずは最初に渾身の力ぶり一発、ハアツという掛け声とともに風を  
切る音が聞こえてきそうな勢いで空に繰り出されるが、それは余裕  
を持ってかわされる、だが、その程度は読んでいる、セイツ俺は叫  
び勢いのままに蹴りを放つ。

「その焦りよう、よほどのものを隠しているのだな」

空は俺の渾身の2連撃を避けると、無防備な俺の顎に一発パンチを放つ。

それは俺の攻撃とは言え、無駄な力を完全に廃止し、必要最低限の威力しかもたないものだだったが、顎にパンチが当たった瞬間に視界が・・・世界が揺れ俺の意識は闇に沈んだ。

「・・・え？なにこれ」

今にも消えそうな意識の中で空の言葉が聞こえた

「痛っ」

意識を失ってどれくらいたったのだろうか？意識を取り戻した俺の視線の先には空の顔があった。頭にはなにから柔らかい感触、どうやら寝かされているようで空の後ろには天井が見える。

意識ははつきりとはしないが頭を動かし、周囲の確認をする。左、俺の部屋壁が見える。右目の前に何かがあり、何も見えない。・・・おそらくこれは女子の制服だろう、空は確か制服で俺の部屋に訪れた。

ここまで考えが至ったところで急速に俺は自体を理解していく。

俺は空に膝枕をされていた？・・・考えるだけでもぞつとする。恐ろしい後で何を要求されるかわからない。

・・・いやそれだけではない、確実に見られた。画面が・・・PCのデスクトップにフルスクリーンで映し出されていたあの画像が。

俺は急いで体ごと左に回転させ、空の膝上から逃れる。吐き気がするほどに気持ちが悪い、いや感触自体は大変良かったのだが、心が拒否した。

「ああ、いや、なんだすまない、まさか私がお前の彼女をとったせいで獣k「違えよ!？」いや、でもあれはj「そんな単語どこで知ったよ!？」」

空は非常に申し訳なさそうな顔で俺に謝ってきた。謝罪の言葉は受け取るが、説明はいらぬ。必死に言葉を被せる俺。

「でも大丈夫だ。私はお前の幼馴染だから・・・な？お前が正常に戻るまでいつしよにいてやるから、な？」

空は俺が精神病を患っている人と接するかのようには相手を肯定し受け入れるような言葉をかけてくる。がそれは非常に辛い。それに微妙に幼馴染つてところに疑問符付けてないか？いつそのこと無理に受け入れようとせず縁を切れよ。そっちの方が俺は救われるんだから

「それと、私は女生徒に猫耳と尻尾を付けてニャーニャー言わせるプレイとかその類が大好きだ。それでちょっと研究しているときにな」

こいつは俺の心をどこまで抉りたい？彼女自慢？ねえ俺の元カノともそんなプレイしたわけ？まだキスしかしてなかったんだよ俺達、お前は1日で俺を抜き去ったの？

「だが、流石に本物の無いと思う。」

「勘違いだ・・・もう否定したところ無意味だろうが違つんだ。」

俺は蚊の鳴くような声で嗚咽とともにそう呟く。それは誰に届くわ

けもなかったが自分への慰めにはなった。

ああ、明日も学校だ。雄吾にはどんな復讐をすればいいば俺の心の傷に見合う心的外傷トラウマを植え付けられるだろうか。

さあー！やりたいことはやったー！！！！（後書き）

5話たっても召喚されない異世界召喚（笑）ファンタジーです。

**力量不足を感じる今日この頃（前書き）**

前々から感じてたけどさ。

相変わらずのツッコミどころしかない物語

やっとあらすじの4分の3がおわったかな？

## 力量不足を感じる今日この頃

「今日もまた憂鬱な一日が始まる」

俺はふと替え歌を思いつき、口ずさむ。元曲は某ボーカロイドのネギ好きのあの人のあの曲だ。

朝目が覚めて 真っ先に思い浮かぶ空のこと 思い切り殴って 跪かせたい ただ謝ってほしくて

白の制服 眩しい笑顔 そしてその裏側 今日もおれは返り討ち！！

世界 消えてなくなれー 死んでくれなんて 絶対に言えない それに 空と 目も合わせたくない

空に恋なんてできない おれは だって彼女を 寝とられた。

さて、こんな音程もリズムも全く合っていない、人に聞かれたらベツドにもだえるようなことは置いといて学校行きますか。

（学校）

俺はいかに雄吾に社会的制裁を加えようかと机に突っ伏しならどん底のテンションで考えていた。

テンションが低い理由は昨日のあれだ。空に勘違いされた・・・の

は別にどうでもいい。むしろこれで距離をとってくればいかよくなる誇りも受け入れよう。だが、あれを見られたというのは精神的にショックがでかい、でかすぎる。

「コンピューターの内部的破壊・・・外部的破壊・・・ウイルス・・・データ流出・・・クククどれが良いだろうな」

想像しただけでも心が躍る、俺の苦しみとはベクトルが違うが同じような喪失感はあるはずだ。

以前に空にひと泡吹かせようと色々学んでみたが、やつの子のセキユリティが硬すぎた。もう少しで逆探知されかねなかった。

「隆盛君少しいい？」

俺が近い未来を夢想し、ニタニタと机に向けて怪しい笑いを受けていると空が話しかけてきた。俺は空の顔を見ないで言葉を返す。

「何でしょうか、生徒会長？」

「昨日、隆盛君から受け取った書類のことだけど」

・・・ああそついえは鞆の中から消えていたな。帰り際に持っていたのだろうか。どん底状態を作りだした元凶と関わりたくもないが、立場というものもある。断るわけにもいかないだろう。

「すみません、少し体調が悪くて後にしてもらえますか？」

理由がなければ作ればいいじゃない、断るわけにはいかない？なんだいそれは。今まで散々耐えてきたんだ。



俺はそういつて断る。若干空の顔が引きつったが、一瞬後になぜか聖母のごとき頬笑みを受けべる。それはまさに俺が精神病者でそれを介護する人のごとき微笑み。すべてを受け入れるかのような温かさ？だ

「大丈夫？もし辛いようなら保健室で休んだ方がいいですよ」

保健室で休む・・・それは授業を休むという代償を払い、こいつから逃れられる。俺はその欲望に負け、弱々しい声で言葉を発した。

「そうですね、すみませんが少し休んできます。先生に伝えておいてください」

俺はそう言つて力なく立ちあがる、歩く際に少しふらつくが周りを意識していればぶつかることもないだろう。

・・・だが、今の俺の体調を一瞬で回復する方法が俺にはある。病は気からという言葉がある様にある程度のことには気の持ちようでなんとかなるものだ。

——人は正の感情と不の感情どちらの方が持ちやすいか強いかと例えば俺は断然後者だと考える。そして俺にはその不の感情をぶつける相手がいる。

「すまない。雄吾君。保健室まで付き合ってくれないか」

弱々しそうな笑み、それでいて内に秘めるは悪魔のごとし非情さ・・・俺は雄吾に物理的な暴力は振るわない。ただ心をへし折り、その折れた心をさらにへし折り粉々にするだけだ。

「あ、ああ。すまん政一、ちょっといつてくる」

雄吾はこれから起こることを全く予知せずにも通りの表情でこちらに向かつてくる。

俺が教室に戻ってきたのは昼休みになってからだった。余談だが雄吾は放課後に魔王に保護されたそうだ。何があつたのかは語らないがおそらく残りの人生トラウマを抱えながら生きていくことになつただらう。

そして放課後……のさらに生徒会の仕事を終えた後。

今日は珍しく……本当に珍しく生徒会に所属してから約半年今まで数えられるほどにしかなかった本当に珍しい現象が起こつた。珍しいを使いすぎたり色々分がおかしかったりもするがそれほどのことだったのだ。

今日は、空が生徒会の仕事をまじめにやった。ほかのやつら?……全員奥の部屋で慰め合つてたよ。外から鍵をかけて脱出不可能にして餓死させたいのと思つたのは俺だけじゃないはず。

「本当にすまない、私はお前がそこまで悩んで……いや墜ちているとは思ってなかったんだ」

そして、仕事を終えた俺は空と一緒に下校している。本当は拒否り

たかつたのだが、それを許してくれなかった。具体的にいうと腕を組まれた。

羨ましい？ふざけんな俺にとっては水銀スイッチつきの爆弾、もしくは二ト口抱えているようなもんなんだよ。それにここまで読んでくれている方々は俺のことを羨ましいとは思わないはずだ。信じてるぜみんな。

メタ発言？気にすんな。

そしてこやつは無自覚で人の心をえぐってくる。

「ならもう俺に関わらないくださいます、かなり本気でお願いします」

今まで散々俺を苛めてきたこいつに遠慮など不要、気にすんな何ていってみる余計ひどくなるわ。

「そうか、今まで私のことを疎ましく思っていたのだな」

「うんとっても、むしろそう思わないやつは聖人君子以外の何者でもねえ」

空は俺の言葉に落ち込んだようなしぐさを見せ尋ねてくる、俺はそれにとつてもいい笑顔でうなづく。こいつに対しての良心？そんなもの既に擦り切れてなくなつたわ

「私たち・・・やり直せないのか」

「やり直したくないです」

空はより一層悲しそうな声で尋ねる、その眼はまるで捨てられた子犬のようだ・・・だが俺は本能というべきところで何か違和感を感じ

じた。

俺には相手の嘘を見抜いたりする力はない、空の目を見ても演技をしているようには思えない、正に捨てられた子犬の目そのものだ。だが、だが考えてみる？こいつは俺がいなくなっただけでそんな思いをするだろうか？確かにこいつと俺は幼馴染だ。ほかにそう呼べる者はいない。

しかし、裏を返せばそれだけの関係だ。それがあつたからこそ俺は今までの理不尽に耐えてきたし耐えられてきた。

こいつの周りにはいわゆるイエスマンしかない・・・まあこいつは間違つたことはいつてないしそれは仕方ないことだ。例外があるとすれば俺に対する理不尽だけだ。

俺もできるだけこいつの意識から外れるようにイエスマンを演じてきた。常にこいつ死なねえかなとか死ね！！とかは思ってきたがそれを悟らたということは無かった。

――俺がそこまで考えたところで不意にいつもの空の声が聞こえた。

「残念・・・いやむしろ喜ばしいことだ。私の周りには常に私に好意を持つ者と関わらないものしかいなかったからな。」

空の言葉の前半を聞いた瞬間に狂喜乱舞し後半を聞いてた瞬間に絶望した。

「隆盛お前が幼馴染で、腐れ縁なことを嬉しく思うよ。」

「俺は思わん、むしろ俺の平凡に過ごす予定だった人生返せ」

いちいち返すあたり、もはや諦めていえるのだろうか？

自分自身のこれからに絶望していると空が俺に向かって手を差し出してくる。

「これからもよろしく頼むよ、幼馴染。」

俺はそれを無言で弾く。

「それと黙k「お願いもうやめて!?!?」の趣味が治るまではいやがろうとも一緒にいてやる。私のせいだろうからな・・・いや私に惚れさせるというのも面白そうだ」

「そんなアブノーマルな趣味ねえよ!!!そしてすべての元凶のお前に惚れることは絶対がない、もうどこかいつてくさいお願いします!!!」

俺がそう叫んだ瞬間に奇跡が起こった。

「――それは非現実な出来事。ファンタジー」

何の変哲もない道路が急に発光した、いや光っているのは地面ではなくその地面がある空間・・・空の足元だ。空の足元を中心に光が渦を巻く。

俺は直感的に理解した・・・テンプレートだ。ネット小説などによくある異世界召喚物のそれだと。いや、実際には違うと俺の常識が言っているが、こいつから逃れられるならありえないことだろうと信じてやる!!!

むりやり状況を脳に理解させた俺の行動は早かった。突然の地面の発光に驚きその場を退避しようとする空の背中を押し、光の中心へとおいやり体勢を崩させる。

「これはテンプレートだ!!!巻き込まれ型ファンタジー小説によくありそうな異世界召喚系のあれだ!!!」

俺は光の中心で地面に手をつき体制を整えようとする空に叫ぶ。

「ならばお前も道連れだ！！！！」

「巻き込むなあ！！！！」

俺は空を侮っていた、一瞬で体勢を整えた空は俺に向かって跳躍！俺を道連れにしようとする。だが光の渦は対象者・・・空を逃がしたくないようだ。光の渦から光で形作られた腕が空をとらえようとする。

それはまさに俺を助けようとする意志のように俺は感じた。もちろん妄想。

俺はそれに勇気づけられ、空の手を弾く。

「なッ！？」

まさか弾かれるとは思ってなかったのだろう、驚愕の表情を受けべた空は次の瞬間に光の腕に捕えられた。

「俺にかまわず先に行け！！！！」

俺は自然とそう叫んでいた。理由は何となくだ。

俺がそう叫んだ瞬間に空は笑った・・・いや嗤った。

「お前のいうことが本当だったら私は絶対にお前にこっちに来させてやる！それまでにその獣k「違えから！！！！」好きを治しておけ」

空は俺の言葉に返すようにそう叫び、次の瞬間に消えた・・・文字通り消えた。

「俺は絶対に行かねえけどな」

空が消えた地面を見つめ、おれは決意を込めそう呟いた。

力量不足を感じる今日この頃（後書き）

主人公が救済された1話





みるか。

俺は懐から携帯を取り出し、番号を押そうとしたところで指を止める。

まずはやるべきことがあった。

「勝ったア！！！！俺は運命に打ち勝った！！！！！！神よ！！俺は貴様を超えた！！！！貴様の用意した運命なんて打ち破り俺はここに一人でいる！！！！！！！！！！」

何をやっているかという一人カラオケボックスに入って叫んでいる。普通に外だろうと家だろうと叫べば変な目で見られるがカラオケならば大丈夫だろう。

それにここで時間を潰すということにも意味がある。いや、そんな理由などどうでもいい。ただひたすらに喜ぼう、解放されたことを……。

「あ……マシタ」

数時間後俺は叫びすぎたな、と心の中で反省しカラオケ店を後にした。そしてその足で空の家へと向かう。

「そ・はかえつて……せんか？」

まさか、こんなところで声がかれたのが役に立つとは思わなかった。空の母親は何を勘違いしたのか俺の声が枯れているのが空を探して叫び続けたからだと勝手に解釈してくれた。

事情の説明としては空が目を離れたすきに一瞬で目の前から消えたということにした。地面が発光したただなんて到底説明できないが、いきなり消えたのなら神隠しにあったとかそんな一瞬で説明でき

る便利な言葉があるからだ。非化学な妄想なのは変わりないけど

どうでもいいことだが、空の母親もかなり美人です、説明はめんどいから省くとしても一児の母親・・・s「何かいいましたか？」  
・・・なんでもないです」

「とても信じられない話しかけど隆盛君は嘘をつく子じゃないものね、警察には連絡したの？」

「・・・」

俺は首を横に振る、喋らないのは喉が辛いからだ。人というのは盲目な生き物で一度信じたものはなかなか疑わないものだ。勝手に勘違いしてくれてスムーズにい話が進むのは嬉しいことだ。

・・・俺が悪いわけじゃないんだ、俺は決してだましてなんかいない。それに今の俺にはこの人を落ちつけるだけの喉のライフも残っていない。

「でも、空のことだし今日中には帰ってくると思うわ、明日になっても返ってこなかったら警察に連絡するわ、隆盛君も疲れたでしょう？帰ってゆっくりと寝なさい」

おばさんの言葉に俺は視線を俯かせ納得がいかなそうにならず。自分ではどうしようもないのだ。いくら探したとしても消えた人間が突然現れるなんてことはほぼありえない。

「し・れい・・・す」

かすれた声で俺は退出の意を伝え、空の家を後にする。

「ア　ゲホツゲホツ！？八八八ゲホツ！？！？」  
俺は空の家から帰るなりベッドにダイブそして笑う・・・が喉に激しくダメージを負う、こんなのは俺のキャラじゃないし、いくら目の前から空が消えたとはいえ本当に異世界に召喚されたなんてファンタジーなことが起きているとは流石に信じ切ってはいない。だがそれでも信じたいのだ。俺は解放されたのだと。

翌日、空が学校に来ないということでも多少騒がしくも会ったが、特に何かあるわけでもなく過ぎた  
顔がゆるんでしまうのををこらえるのに必死だったというのはいうまでもないことだろう。

問題は翌日・・・空が消えてから二日目、空の失踪が発覚して初日だった。

「ねえ、空様私たちをおいてどこに行っちゃったのかな？」

「お姉さまが私たちをおいてどこかへ行ってしまっなんてありえないわ、きっとやむにやまれぬ事情があるのよ。だから私たちは信じて待ちましよう。」

学園の生徒の大半は空が失踪したことの話題で盛り上がっている、空の影響力はここまで大きいものだったのかと不思議に思うが、外見と外面だけはやたらにいいのでそれも仕方ないかとも思う。  
かくいう俺も空と幼馴染でなく、接点のない関係ならば空に憧れて

いただろう。おれもその大多数の人たちになりたかったな、今となつてはどうでもいいことだが、ふとそう思う。いや、既に俺はその大多数の人になつたのだ。

・・・なつたはずだったが、それはまだ数カ月ほど先のことになりそうである。

「なんで空様についていながら空様がどっかいつちやつたのよ！！！！」

「なんで空様から目を離れたのよ！！！！なんで空様が消えちゃつたのよ！！！！あんたが消えればよかつたのに！！！！！！！！」

今現在俺の目の前で叫ぶ女生徒が数名、うざい。

「・・・」めんなさい

俺は全く悪くないが、謝罪を告げる。流石の俺でも彼女らの気持ちがあく分らないほど他人に理解がないわけでもない。

彼女らは現実という名の一方的な理不尽のはけ口が欲しいだけなのだ。そしてその対象がその時空の近くにいた俺だっただけという話理解はできるがこの上なくうざい。

もし反論が許されるならば問いたい、俺と全く同じ状況下において、絶対に空を助けさせたという保証を持つてこれたのか？と

99%ではだめだ1%でも失敗の可能性があるのならば俺は全面的に悪いだろうが、絶対出ないならば俺を責める権利はこいつらにはない。

・・・誰だ空の背中を押して光の渦の中に追いやつただるとかいつたの。それさえなければ助けさせたかもしれませぬ、絶対にやらないけど。

だが、反論は許さない、先ほど言った通り絶対に空を助けだせたと  
いう証明することのできない証明ができない限り俺は心からの謝罪  
は絶対にしない・・・空の家族以外には。

とまあ、心の中で叫ぶのはいい加減にしておくとして、俺はいつま  
で目の前で泣き叫ぶこの女生徒たちを相手にしていればいいのだろ  
う？

慰めてそのまま彼女にしちまえ？生憎と今は彼女寝とられたばかり  
で傷心中だ、あまりかかわりたくはない。

「落ちついてください、生徒会長はきつと帰ってきますよ。皆さん  
をおいてあの生徒会長がどこかへ消えるなんてあり得るわけないじ  
やないですか、ほらそろそろ授業が始まりますよ。生徒会長が返っ  
てきた時に失望させないように勉強に励んでください。」

俺としては帰ってきてほしくない・・・むしろ空の最後の言葉が心  
に引っかかる、空ならやりかねないと。

地面が光つたら要注意するようにしておこう、そもそも地面が光る  
なんて非科学的なことが起こった時点で要注意だけど。

その日は学校中の生徒・・・その大半が女子からの的外れの暴言を  
吐かれた以外は特に何事もなく終わった。

俺が女性と付き合うことは絶対にないだろうと未来を予見できる日  
だった。

オンナッテコワイネ

「ええ、皆さまご存知の通り・・・というよりも先日の学校の騒ぎ  
の原因ともなった現生徒会長 神宮司空さんが謎の失踪を遂げたこ

とについてですが・・・」

さらに翌日、緊急の全校集会が開かれた、内容はもちろん空のこと。警察も動くそうなので空を見つけようと自分勝手に暴走したり、学業をおろそかにしないようにとの何ともありきたりに感じてしまう内容だった。

校長先生の話を生徒全員が聞き流し、続いて最後に空を見た俺の話し・・・先ほどまで教師以外だれも目を向けていなかった壇上に俺が登った瞬間に殺気だった視線が何百も向けられる。

皆の眼は一樣に赤い、存分に泣いてきたのだろう、昨日よりはすっきりした顔のものが多いが、翌日になりやっと現実を受け入れたというものも少なからずいた。

「副生徒会長の斎藤隆盛です・・・」

俺も警察に話した通りのあたりさわりのないような非現実の話し・・・

・急に空が消えたことを話し、壇上から降りる。

学園中が空が消えたことに騒ぐ中、俺はいつも通りの日常、いつもよりも穏やかな日常を過ごす。

・・・相変わらず生徒会の仕事は俺一人だ、ほかのやつらは暴走気味に空を探すべく町を彷徨っている。

「あいつら仕事しろ・・・」

さて、次回（の主演）どうしようか（前書き）

それと今回も皆のヒロイン）笑）空が出ます。



さて、次回（の主役）どうしようか

カタカタカタ

俺はPCを打ちながらふと思う、

「あいつらいても作業効率変わんなくね？」

あいつらはまともに仕事をしてこなかった。いまさらやったところでたいして役に立たない。

いや、教えるべきこともあるのでむしろ時間がかかるかもしれない、俺たちの任期はもうそこまで長いとは言えない・・・よしあいつらいらね。

明日からも無駄な空の搜索を行ってもらおう・・・いや無駄じゃないな。生徒会がそれを率先してやっているおかげで暴走するバカどもも現れていないわけだし。

そしてそのおかげで俺はここで一人、気楽にできる。

コンコン

「どうぞー」

俺が明日からの予定を頭で組み立てていると、生徒会室のドアがノックされた。俺は一瞬にして顔を引き締める。

「私だ」

「お前だったのか」

「また騙s「それ以上は色々危ないから禁止」何を恐れる必要があるというのだね？」

ノックの主・・・魔王が生徒会室に入ってくる。

「何の用ですか？」

「なに、我が友の様子が少々周りと違っていたからな・・・いらぬおせっかいというやつだ。」

魔王の言葉に俺は魔王を見つめ返したいた目をそらす。

「私は話が友が悲しんでいれば、共にその悲しみを共有し、喜んでいればともに喜ぼう。そして話が友は今喜んでいいる・・・責めていいるわけではない、むしろその逆だ。今苦しんでいるのだから？その喜びを共有できるものがいなくてな。」

「力哉さん！！」

俺は嬉しさのあまり、魔王に抱きつく。

「私も所詮は人・・・だから我が友の全てを許すわけにもいかぬ・・・だから私はこう言おう、よく今まで耐えたな。」

魔王は俺の頭を無骨な手でなでる、男が男に頭をなでられる・・・それも大の男がだ。見ていて気持ちのいいものではないかもしれないが今の俺には関係ない。

この人が魔王なんて呼ばれているなんて信じられないだ。

「俺は空が消えてくれてうれいんです、いままでずっとあいつのせいで苦汁をなめ続けてきた。それがいなくなって嬉しいんです。」

気づけば俺は今まで誰にも語ったことのない心情を話していた。

魔王はそれを静かに聞いていてくれた。前日のカラオケのせいで声

がかすれていたのは御愛嬌だ。

「ありがとうございます、力哉さんが話を聞いてくれたおかげですっきりしました」

「うむ、気にするな。私の好きでやったことだ。それと話が友もコンピューター同好会へ来ぬか？もうすぐで生徒会も人気を終えるだろう、その時間を私らとともに過ごしてみないか？」

俺はこの人についていきたい・・・そう思う。俺は断じてホモではないがこの人についていきたいと思う。この気持ちは崇拜に似ているのかもしれない。

この人は俺を助けてくれた。誰にも打ち明けられない悩みを聞き、俺に光を与えてくれた。

「はい！！！」

俺は迷うことなく、頷いていた。コンピューター同好会のことを俺はよく知らない。この人たちの学校での行動はよく知っているが（悪い意味で目立つため）どんなことをしているのかは知らない。屈強な男がコスプレをして学校を歩いたり、勇者ごっこをして学校で遊んだり、なんかよくわからないものを学校に持ち込んできたりetc etc など問題行動を起しているが学生たちに”直接的には”迷惑はかけていない。

今までできなかったバカをやるのも楽しそうだな。そう思う。あまり長い間一緒にいることはないだろうがそれでも楽しそうだ。そうと決まれば、さっさと生徒会の仕事終わらせて、引き継ぎも早めに終わらせますか。

「ここは・・・どこだ？」

空は戸惑っていた、光の渦にのまれ、その直前に聞いたテンプレート・・・異世界召喚。景色は変わらず光に遮られ周囲の確認すらできないが、何かがずれたような感覚がした。

「――異世界召喚、空も、その類の話は知っている、何も知らない異世界の人を呼び出し魔王を倒す便利な道具にする・・・そして魔王を倒し用済みとなった勇者は人間に処分される。なんとも都合のいい道具だろう。何も知らない勇者は人間を守るために必死に戦い最終的にはその守ろうとした人間に殺される。」

そんなありえない夢物語（とはいっても結末を知らなければだが）を馬鹿正直に信じるわけでもないが全く信じないということもできなかった。

なぜなら地面が突然光ったのだから、そして光に飲まれた中で確かに聞こえた「世界を助けて」という謎の声、そして・・・。

そこまで考えていると光が徐々に薄くなり周囲の確認ができるようになった。空は光が消えていくとともに周囲を見渡す。

周りには十数名のいかにも魔法使いという格好をした顔まで隠れる

ようなフードつきのマントを被っている者たちが立っている。その中において一人だけ、違う格好をしている少女がいた。服装はいかにも貴族ですとでもいうかのように煌びやかなのだが、それ以上に素材が良かった。

肩のあたりまで伸びている薄い水色の髪に、慈愛に満ちた眼差し、顔立ちも整っていないながらもどこか幼い子もつ純粹さを醸し出している。

胸は大きいと言えないまでも決して小さくは無く、空好みの女の子だ。

空は自然と舌なめずりをした。空の足は自然と少女の方へと動いていた。

「動くな!!!」

空の周りを取り囲む魔術師たちは、迷うことなくその少女の方へと動き出した空に静止の声をかける。

ガッ!!

突然怒鳴られた空は、体を竦ませ、転んでしまう。転ぶ方向はもちろんその少女の方向、位置的にももちろんそのまま行けば抱きつく形になるような絶好位置<sup>ベストプレイス</sup>

「キヤアッ」

少女は倒れてきた空を避けることができずに空ともども転んでしま

「んっ!？」

そして運悪く、空と少女の唇が重なる。空はこの機を逃すまいと少女の口の中に舌を入れ・・・省略

「貴様ア!!!王女様になにをする!!!!!!!」

そしてその場は混沌と化した。

数時間後・・・空は赤い絨毯が敷かれ、部屋の装飾には黄金がふんだんに使われ、最奥には人が一人座るには大きすぎる赤い椅子・・・玉座のある部屋、つまりは玉座の間にいた。

部屋の周りには空に向けて隠そうともしない殺気を向ける兵士たち、空はそれを気にした風でもなく、王らしき人に向けて跪いていた。その王らしき者の隣には先ほど空と濃厚な女同士のキスをした王女が紅潮した顔でぼーっとしたどこか熱を込めた目で空を見つめていた。

(あの王女は、相当な温室育ちか、フッフ)

空は先ほどのキスを交わした時の反応から王女が、そうであると見破った。

先ほどの初心な反応を思い出し、空は知らずに舌なめずりをした

「〜であるからした〜」

王の言葉を軽く聞き流しながらも、重要そうなことだけは聞き逃さず空は考えていた。今のこと、そしてこれからのことを。

（あの王女を落とすには1日もあれば十分だ、問題はこの城の中に何人の私好みの女の子がいるかだ。そして私がここを出るまでに何人を落とせるか・・・）

空は魔王のことなど考えていなかった。いや、自身が負けるなどとは微塵も思っていなかった。流石に今のままでは勝てるとは思っていないが確実に魔王を倒せるだけの力は手に入れられると確信していた。

さらに話しを進めること1時間ほど、王の一人語りが終わりに、最後の仕上げとなった。

「貴殿は、勇者としての運命を受け入れる覚悟があるか？」

「はい」

「貴殿は、勇者としてその身を人のために尽くすと誓うか？」

「はい」

「貴殿は過酷な旅を制し魔王を倒す覚悟があるか？」

「はい」

「よろしい、ならば認めよう、貴殿はたった今から勇者となった。貴殿はたった今から我らの希望となったのだ。くれぐれもそのこと

を忘れず浅はかなまねはせぬように」

「はい、この命に懸けまして」

空は、勇者となることを受け入れた、それ以外に道は無かった、現状では誰かの庇護を受けるしか生きる術がなかった。最悪受け入れなければここで殺されていたかも知れない。

だが、空はそんなことを微塵も考えていなかった。そこまで考えていたかはわからないが、空はどちらにせよ勇者となることを受け入れるつもりでいた。

「ですが、いくつかのお願いがあります。よろしいでしょうか？」

「うむ、申してみよ」

王は、空が勇者を受け入れてくれたこと興奮しているのか、気分よく答えた。

「誠に申し訳ありませんが、私がいた世界では戦いなどない平和な世界でした。ですのでここではしばらくは戦いの訓練を受けたいのです。」

「うむ、それは当然じゃ、貴殿にはまずここで魔法についても学んでもらわねばならぬ。」

「それともう一つ、これはたいへん厚かましいものなのですがよろしいでしょうか？」

「余が承諾できるかは分からないが、申してみよ」



「私が勇者となったたつた今から私が手にいれた”モノ”は私のものと認め干渉をしないでいただきたい」

「どうということじゃ？」

王は空のいったことをうまく理解できなかつ、そう尋ねる。ここに隆盛がいればどうということか瞬時に理解できたであろう・・・絶対に王に対し助言はしないが。

「私が例えば冒険の最中”など”に手に入れた”モノ”などは、取り上げないでいただきたいということです。それとこれは承認してください。瞬間からお願いしたい」

「ふむ・・・」

王は、私が手に入れたものは私のもの、それをとるな、そう言うことだろうと判断した。

だが、この者が魔物の手から土地はどうなるのか？そう思った矢先、空は狙ったかのように次の言葉を話した。

「ですが、私が魔物の手から奪還した土地などに対してはその限りではありません、土地に関しては私はいりません。」

この世界は魔物側と人間側で領土がわかれている。空は魔物側の王、魔王を倒すことが使命となったが、いきなり魔王と戦えるなどということはありえない。

魔物の領地を削っていき、最後に魔王を倒す。つまり空が魔物を倒し、魔物を追い出した土地は誰のものでもなくなるということ。

「いいじゃろう、余も貴殿の手に入れた物に関しては何も言わん、

それにしてもたった今からとはずいぶんせつかちじやな」

「私でもそう思いますが性分ですので、それと今の言葉、承認と受け取ってよろしいですね？」

「無論、神と魔法に誓って」

こうして、空が地球から消え去った日、空は異世界で勇者となった。

さて、次回（の主役）どうしようか（後書き）

没ネタ

上の隆盛と魔王の会話

「はい！！！」

俺は迷うことなく、頷いていた。

「かかった」

魔王は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた

「え、何かいいましたか？」

「何も言っておらんぞ」

てかこの没ネタのためだけにかいた。

それと空がこけたのはもちろんわざとです

もう、卒業（ゴール）してもいいよね（前書き）

何事もなく物語を終わらせたい隆盛からの切実なサブタイでした。

もう、卒業（ゴール）してもいいよね

「良くもおめおめとここにこれたものだな、副生徒会長殿？」

目の前に立つ、学生服を身にまとった、学生・・・低身長、学力はそこそこ、顔は・・・お世辞にも良いとは言えない学生が俺に敵意むき出しで睨みつけてくる。  
こいつは放っておけばいいだろう。

「ああ、今日から時々ここに遊びに来させてもらうことになった、斉藤隆盛だ、みんなYOROSIKUな」

「歓迎するよ、隆盛君」

松林雄吾が俺を見て若干涙目になりながら歓迎してくれる。・・・  
保健室で些かやりすぎたか。

「べ、別にあんたなんかに来てほしいと思ってたわけじゃないんだからね、うれしいけど」ぼそっ

と、コンピュータ同好会の川城カワシユウ拳コブン・・・なぜけんになかった。  
それと男がツンデレはやめてほしい、ツーカーアルツンデレは俺的に受け付けないな。

「デユハハ、これで斉藤氏も我らの同志というわけですね、デユクシ」

と鈴木政一、相変わらずそこはかたなくイラつく言葉をつける奴だ。

「よく来てくれた、私は歓迎する。こ（こ）（こ）に君の敵はいない、私の友は皆いい奴だ、共にいる期間は1年もないが良い思い出を作ってくれ」

と、若槻力哉・・・通称魔王。そして俺の尊敬するお方。ちなみに今日は白のワンピース、目に毒です。

これでコンピューター同好会は全員だ、えっ数が少ない？気にするな、個性的なキャラとか書けないから作者に縮小食らったんだよ！！！！

「さて、自己紹介も済んだことだ、なにか歓迎会をしようではないか」

「歓迎会か・・・じゃあついでにあいつの追悼会も兼ねるか、結局やってなかったし」

お通夜状態は勘弁してくれよ。というかいやがらせか・・・ええと名前なんだっけ？

「気にしなくともよい、名前など所詮は子を識別するための記号。故に名前自体には意味がない。本人がわかっていればそれで良いのだ」

あの、それって親かかものっそい抗議受けそうなんですけど？それと本人からも承認なく呼べば怒られませんか？いやでも魔王様の言葉だ、名前などに意味は無いのだろう。

力哉様ばんざーい、魔王様ばんざーい！！！！

「じゃあ、やにぶな。」

「なんだよそれ！？ふざけんな！！！！というかどこからそれがでてきた俺にどんな関連性があるんだよ！！！」

「いや、ほんとにランダムで。なんとなく文字列出力させて目にとまったから」

「メタんな！！別に危険でも何でもないけどメタんな！！！」

先ほどから・・・いや最初からずっと俺に突っかかってくるこの背の低いやつは 谷川たにかわ 量貨りょうか・・・りょうかときいて漢字は違っても某凡将を思い浮かべた人は、一緒に柿ピーでも食べましょう。

「知ってんならちゃんと呼べよ！？最初は知らないとか言ってた癖によお！！！」

ちなみに、こいつは生徒会を嫌っている、理由は簡単空に告って振られたからだ、何も知らないでいられたんだからいいと思うんだけどな、やっぱ人間知らない方がいいってことも多いし、関わらない方がいいってことも多い。何も知らないからこそ嫉妬で俺たちのこと嫌ってんだろうし。

現実を押ししてたところで信じないだろうな・・・一種宗教の如き信者だし、空の。嫌っていながらも崇拜するなんという矛盾か。

まあ、空の百合趣味は知っているから何を持って崇拜できるのか全く分からない。アイドルみたいなものなのだろうか、手が届かないからこそ憧れる。そういえば俺はアイドルとか憧れたことないな・・・空という身近に猫を被るやつがいたからだろうか？彼女らの日常生活とかを想像するとすごく怖い。

「じゃあこれからよろしくな、雄吾、拳、やにぶ、政一、力哉様。」

「「「「「おう」デョフシ」べ、別にあなたな」ry」「「「「」

こうして、俺はコンピューター同好会へはいった。仕事はほかの生徒会のやつらにも任せられないし、任せたくないからこちらの部屋でやるでしょう。生徒会の任期終了まであと2カ月、2ヶ月後には存分に遊べるようにしっかりと仕事しますか。

空の召喚された世界、王宮の庭

「ハアツ!!!」

キーン!!!

「まだまだ、甘い!!!」

空と一人の鎧をまとっている男性が剣の打ち合いをしている、正確に言えば男が空に健の稽古をつけているところだ。

まあ、そんなことは置いておいて、時間を進めようか。

「空様はいつ旅に出ていかれてしまうのです?」



しばしの稽古の後、体を休めるために芝生に倒れている空に一人の少女が近づいていく。薄い水色が髪 of 少女、名前はフルネームとかは省略してユーネだ。

「そうだな、だいたい3カ月もすればここを出ていくだろう。」

空は真剣な目でユーネを見つめた。ユーネは顔を真っ赤にして空から目をそむけた。

「目をそむけないで真剣に聞いてほしい、私はここを旅立つ時にユーネにもついてきてほしいと思っている。危険な旅だということは分かっている、君が王女で皆が君のことを大切に思っていることも知っている、だけど私はユーネと一緒に旅に出たい。」

「ついていきます!! 私は空様とならどこまでもついていきます!!」

・・・だめだこの国の王女、こいつに国政任せたら滅ぶぞ。空のいる国には現在王の子供はユーネしかいない・・・だがこんな己の欲求に素直な者に王は勤まるだろうか? 答えは否、側近がしっかりしていれば大丈夫かもしれないが、この国の王は今すぐにでも新たな子供を作るべきかもしれない。

この後も空は順調にいろんな女性に手を出し順調に墮としていくのだが、これはまたいずれまた機会があれば。

これまた空と同じ世界の某所

「ジユジユ様！」

「なあに〜」

「例の召喚の魔法陣の件ですが、順調にいけばあと2カ月もあれば陣を敷くための準備も完了いたします！！！」

石で作られた壁に囲われた町からやや離れたところで、一人の少女と兵士が会話をしていた。少女の方はめんどくさそうに、兵士の方はかなり必死に話しかけている。

「それと町の外は危険です！！一刻も早く町の中へお戻りください！！！！」

「ええ〜、せっかくここまで来たのに〜」

少女は兵士の言葉に不服そうに返す。だが、兵士は引き下がらない。苦労人だな、こいつ。

「ジユジユ様！！！！お願いします、今我らにはジユジユ様しか頼れるお方がいないのです！！！！」

「全くしょうがないな〜」

兵士の必死の懇願が聞いたのか、それとも頼りになるのは私だけだと聞き、気分がよくなっているのかは分からないが、少女はニヤニヤしながら町の方へと歩き出す。

「ほら、早く帰るわよ」

少女は兵士にそう告げると、兵士をおいてさっさと行ってしまふ。だがこの兵士は幸せだろう、なぜなら隆盛とこれから旅に出るであろう空に振り回される人に比べれば、この少女はかなり扱いやすいのだから……。

「それで、例の魔法陣の発動はいつごろになるのでしょうか？」

「うーんと、大体3ヶ月後くらいになると思うよ。」

兵士は足早に去ってしまった少女に大きな声で問いかけるが、少女の小さな声では兵士の元までは届かなかった。

「無視ですか……そうですか、チクシヨウ」

少女の声を聞き取れなかった兵士はしばらく町の中でいじけていたとかいなかったとか。

「何故だろうか？背筋に寒気が走った」

「フラグって知ってるか？」

「風邪なのだろう、早く帰り。体を休めるがいい。帰るのが辛いのであれば私がここで看病しよう」

上が雄吾、下が我らが魔王、力哉様だ。ちなみにロツカーからナース服を取り出しております。ああ、俺の目が腐りそうだよ。

いくら魔王教の俺とは言えやはりまだ耐えられないようだ、ということかなぜこいつらは耐えられるのだろうか？

「スマン、今日は帰って寝るとする、それと雄吾よフラグとは破壊クラッシュするためにあるものだ」

「は、早く帰りなさいよ！！俺たちに風邪をうつさないでくれ！！！それと今日は寒いから俺の上着かしてやるよ。」

バサツという音を立てて上着を投げてよこす拳・・・学校で指定の物があったはずだが・・・まあいいか、迷惑掛けているわけでもないし、俺も助かる。

「ありがと、じゃ俺は帰るよ」

俺は何か嫌な予感を感じ、家路を急いだ・・・何もなかった。

無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい（前書き）

諸注意

話しの都合上というわけではないですが若干主人公の強さにチート補正を入れさせていただきます。お許しください。

## 無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい

大体一ヶ月後

「ええ、これにて生徒会の引き継ぎを終え、新生徒会が発足するわけですが、ここで新生徒会の皆様に重要なお知らせをしなければなりません、今回生徒会の会長、副会長、書記など全員が立候補してくれたおかげで大変スムーズにここまでこれたのですが、生徒会を漫画やアニメの中と勘違いしないようにしてください、なので権力など一切ありません。あるのは雑用だけです。」

俺が新生徒会のメンバーに向けてそう言うと、体育館が笑いの渦で包まれた、新生徒会のメンバーも会長以外は笑っている、会長だけはorz状態になっている。所詮雑用だけだし周りが支えてくれれば大丈夫だろう。生徒会の仕事なんてそんなもんだ。

「それと、仕事は主に週に一回だけですが、一人が一週間毎日やっても終われる量です、だからといって一人に押し付けず全員でやっていってください、俺の代時は実際にそうでしたので、そんなことが起きないように願うばかりです。」

俺はそこで一度言葉を止めて、元生徒会メンバーの方を見る。

「仕事といっても大変なものはありませんし、遅くまで残らされることはそうは無いので、”適度”に仲良くやっていってください。」

俺は適度という言葉を強調した、理由はきつとわかってきているだろう。

放課後、俺は元生徒会メンバーに体育館裏に呼び出された。  
もう、我慢しなくてもいいよね？男女平等だよな？むしろ最近の女性の方が強いよね？

ただどまだ男尊女卑なんて勘違いしている女がいてそう叫んでる、  
って友達も言ってたよ。いつになったら気づいてくれるんだろう、  
新聞とかテレビだけじゃなくてインターネットの方がもっと重要だ  
と思うんだ。もっと日本人は政治とかいろんなことを積極的に知ろ  
うとするべきなんだ！！って若干中二病患っている友達が言ってた。

・・・と現実逃避現実逃避。今俺は元生徒会メンバー（全員女）  
に囲まれている、空が全然見つかからないのと先刻の出来事で苛立ち  
が頂点に達したようだ、  
沸点の低い奴らだ、目は血走り、どこを見ているかよくわからない、  
空様空様とうわごとのように眩きながらどこにあったのか全く不明  
の角材を手に持っている。

「そらさままアアアー！！！！！」

「怖っ！？どこぞのホラー映画よりもずっと怖っ！？!?」

生徒会メンバーAが角材を思い切り振りかぶり俺めがけて振り下ろ  
す！！俺はそれを半歩引いて体をそらし避ける。

流石に地面に当たった衝撃が女子の細腕には辛かったのか、女子Aは  
握力を一時的になくし、角材を落とす。  
俺はそのチャンスを逃さない。

「てめえら少しは仕事しろや！！！！！」

男子たるもの女の子に手を挙げてはいけません？世の中の理不尽の目の前ではそんなもの叫んだところで泣き寝入りせざるを得なくなるだけです。

俺は後先考えず角材を振りおろし、前のめりになった女子Aのふとももに思いつきりひざ蹴りを食らわせる。

「アゲツ！？」

女子Aは悲鳴をあげてその場に倒れ、苦痛に顔をゆがませながら、地面をのたうちまわる。これで残るは4人。

いくら相手が女とはいえ、4人しかも角材という武器を持っている、こちらに丸太があれば一掃できるが生憎と無手……だがその分武器に振り回されることはない。

「くっ！？」

女子Aを倒すとすぐにB、C、D、Eの攻撃が迫る、一撃でも食らったらアウトだ、角材つて堅いし、角ばってるし、頭に当たったら一発KOだし、そのあと集団でリンチくらいそうだし。

……つまりは隙を作らないために一発も食らってはいけないということだ。なおかつ相手を倒す。

よし、今までの恨み存分にはらさせてもらう、顔は勘弁してやるよ、ばれたら怖いからな。

幸い……とっていいのかわからないが、相手は正気を失っている、複雑な攻撃、フェイントだとか連携はしてこないだろう、各々が勝手に動くだけで攻撃を直線的だ。

逆に角材とかで柔軟動きされたらすごく怖いけどね。



さて、上の条件だけ書けば俺にいいことづくめなのかもしれない、だが、俺にとつては不幸なことだ、だってこいつら正気を失ってなければこんなことにならないかつたんだぞ!!!!

「おっと」

俺の目の前を角材が通り過ぎる、その威力はまさに一撃必殺、しかしその威力ゆえに隙は大きい、その隙をつきなんとか（日ごろの恨みを込め）反撃を仕掛けるがほかの3人にも注意を払わなくてはいけないためなかなかそのチャンスは訪れない。

一人でも減らせれば攻撃の余裕は生まれる。

一撃、二撃・・・何度もひたすらに攻撃を避け俺はチャンスをまっ  
た。

カーン！

そしてそのチャンスは訪れた、角材同士がぶつかり合う乾いた音が響く、CとEが同時に俺に攻撃を仕掛け、角材同士を衝突させたのだ、当然衝撃に耐えられなかったCとEは木材を落とす。

俺はすかさず、Eの眼鏡を奪い取り遠くは投げる、ついでにCとEの角材も。

そして訪れる今度はB続いてDの攻撃、俺はそれをよけ、武器を持たないCとEの太ももにひざ蹴りを食らわせる。残すはあと2人。

その後は何事もなく、スムーズに敵を無力化しことなきを得た。

結論、<sup>ジャンキー</sup>空中毒者怖い、この世を<sup>せかい</sup>さつてなお、俺を追い詰めるとは流石としか言いようがない。ついでに<sup>ジャンキー</sup>中毒者どもがこいつらだけであることを切に願う。



扉をあけると、魔王様が、ゴスロリな服装を着て仁王立ちをしていた。

あまりの神々しさに血を吐いた。

無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

なお、心優しいの方々には主人公許せん！などとお怒りの方もいらつしやるでしょう。誠に申し訳ありません。

なお、基本的に主人公は暴力は振るいません、今はだいぶハイになっっているだけなんです、本当はいい子なんです・・・

バイト先で男女二人組とかで来る人たちをみて毎回思う、爆発しろ

「これを与えよう」

あまりの神々しさに直視できず膝をつくおれに魔王は、すつと木刀を取り出し、俺に受け取るように言う。

「これは？」

「私の渾身の作だ、今の友は自分を見失っている、自覚のないうちにな。心を鍛えよ、これで毎朝素振りをするのだ。」

「ありがとうございます!!!」

俺は迷わずに受け取る。

「ついでに木刀の真中を見るがいい」

俺はそう言われ、木刀をみる。普通の木刀よりも長めだ。真中らへんに切れ込みのようなものが見えた。

「木刀の両端をみて引っ張ってみろ、双剣になる仕様だ、使わぬだろうがな」

おお、すげえ、というかどうやって作ったんだ？材質は樫だけど、そんな簡単に作れるものじゃないんじゃないのか？

「それと今日の同好会は、ここではない、大体自転車で10分くらいのところにあるファミレスだ。ついてくるがいい。皆も待ってい

る」

俺はそう言って部屋から出ていく魔王の背中を追う。

すごく・・・おおきいですノノ

今、俺の目の前には得体のしれない飲み物が置いてある、一番下がコラ、その上がレモンソダ、その上がメロンソダ、その上がダイエツトコラ以下略  
全部が数cmずつ入っており、混ぜることなく見事に層を作っている。

「これが僕の実力だ」

やにぶ、すごいな。果てしなく無駄だけど素直にすごいと思える。  
というかどうやったらそんなもんでできるんだよ。

「わるいまたせた」

「遅いですぞ、隆盛氏」

「もう、いつまで待たせる」拳氏はしゃべらないでくませぬか？デ  
ユクシ」「

お前もこの喋り方が気に食わないのか、よかつたよ。同士がいて、  
ここが異常だからな正常（笑）である俺は異端なんだよ。

「またせた、ではあ、始めるとしよう。私も飲み物をもらってくる、  
隆盛は何が良い？」

「コーンポタージュで」

「そこでその選択肢なんて、流石は元副生徒会長！！そこに痺れな  
いし憧れない！！」

それなら言うなよ、雄吾、それと元副生徒会長関係ねえ。

「空気読め」

ぼそりと呟くやにぶ、本名忘れた。

「またせた」

魔王はドリンクバーから汲んで来た、右手のコーヒーを手に持った  
まま、左手のコーンポタージュをテーブルに置く。

俺はそれを取り、掲げる。

「……乾杯」「……」

掛け声とともに、俺たちはコップを合わせる、それとレインボージ  
ュース（仮名）はじゃんけんにより政一が飲むことになった・・・  
まあんな混沌とした飲み物を飲んだ政一は開始早々トイレにこもっ  
たのは言うまでもないだろう。

「量貨の野郎、炭酸だけじゃなくてドリンクバーに会った奴片っ端から入れてたからな・・・無茶しやがって」

とかいいながら、ネタ的においしいぞ！！と心の中でいつているかのように、ぐつと親指を立てる雄吾。

「なかなか美味いぞお」

一口飲んだだけで政一がトイレに引きこもることになった謎の飲み物をもつたいたいという理由で飲む魔王。どんだけ強靱な胃袋してんだ。

一方俺はちびちびとコンポタージュを啜っている。美味いんだがこれ選んだのは失敗だったな。普通のやつにすればよかったな。

「ど」

「お」

雄吾とやにぶは謎の掛け声してるし。雄吾は御猪口を持つ時みたいな手の形で口の前で手を傾けながらおという。

それに大してやにぶは同じ動作でおとかえす。意味がわからん。

「ダハハハハハハ！！！！」

そして同時に笑いだす、全く持って意味がわからない。

「おい、隆盛氏、これみてどう思うっ？」



「はいはい、ワロスワロス」

雄吾は何本も束ねた割りばしを俺に見える、すごく・・・おおきいですノノノなんて言うと思ったか既にやったんだよ。

「ノリが悪いな、だから俺はこんなやつが入るの嫌だったんだ」

「すまん、既にそのネタはやったから」

「フザケンナアアアア!!!」

~~~~~厨房~~~~~

「またあいつら来たよ。」

「あいつらドリンクバーしか頼まねえからな、そのくせ何時間も居座るし。」

「迷惑ですね」

「よし、新入り。あいつらの注文取りに行け、呼ばれてないけどいつてこい」

「ええ！私ですか!？」

「首にすつぞ、職権乱用で俺も首になるがそれでも首にすつぞ」

「分かりました」

彼らの知らないところでこんな会話がされていたりした。

「なあ、みんなこれ頼んでみないか？」

それは天性の勘というべきかはたまたただの偶然か気まぐれか、雄吾はメニュー表に描かれていた料理を指差す。

「は？」

「なあ！雄吾それは本気か?!?!？」

「かまわん、私は一向に構わん」

雄吾の提案にそれぞれの反応を返す、ちなみに上から拳、俺、魔王だ。

雄吾の提案するのはカップル限定!!みたいな特注でつくったのかと疑えるでかさのコップに入ったストローがハート型で口をつける部分が二つに分かれているような、あのジューズだ。  
ちなみにカップル限定ではない。普通に頼める、ただし空気に頼むことは普通しない。

「いつもドリンクバーばっかだからさ、たまにはなんか注文しようと思って目に入ったのがこれだった。」

「私は隆盛と飲もう、中身はミルクだ、それで構わぬな？」

魔王と特濃ミルクを飲む・・・ハッ!?俺はノーマルだ。変な妄想なんかしない。

「普通トロピカルジュースとか変な名前の奴しかないのになんでミルクがあるんだろ、まあいいや、拳一緒に飲もうぜ」

「ハアッ、全くしょうがないわね」

拳は呆れながらも拒否する様な態度は見せない。

「・・・俺一人!?、野菜ジュース」

政一がトイレから戻ってこない以上仕方のないことだろう、だが男同士よりもマシだろう?やにぶ。

「全くしょうがないわね」

「お客様〜ご注文はお決まりでしょうか？」

「俺達まだ呼んでないんですけど？」

確かにたった今メニューを決めたところだ。俺は辺りをぐるりと見渡す。客が多いとは言えないが少ないともいえない。こんな状況ですべての客席を見ることが出来るだろうか?いや不可能だ。

「まあ良いじゃないか。すいません、こちらのドキッ これを一緒に飲めればラブラブになれるかも!?恋は暑いぜをのミルクとトロピカルと野菜ジュースを一つずつ」

「ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも！？恋は暑いぜのミルクをお一つ、ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも！？恋は暑いぜのトロピカルをお一つ、以下略野菜ジュースお一つのご注文は以上でよろしいでしょうか」

「それと、君のスマイルも欲しいな」

雄吾はいきなり女定員を口説きにかかる！！

「申し訳ございません、当店ではスマイルは取り扱ってございません、どうぞマクナルドの方でお願いいたします」

軽くスル！？こういう手合いになれているのか？

「(´・`・´)フラレタ」

「ぢまあ」

とりあえず玉砕した雄吾を笑っておく。

「隆盛よ、そういう時はもっと笑ってネタにしてやるものだ、フウハッハッハッハッハ」

「ご注文は以上でよろしいですね？それと店内ではお静かにお願いいたします」

そういつて女定員は奥へと下がっていった、ネームプレートを見る限りアルバイトしかも新人と書いてあった、店員や古参アルバイトの実力を見てみたいと思ってしまうた。

「ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのミルクをお一つ、ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのトロピカルを一つドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜの野菜ジュースを一つお願いします」

「バカな!? あいつらは全員男だったぞ!?!」

「くっ、これは明日からカップル限定にすべきだな、っーか普通力ツプルしか頼まねえだろ、ネタでもこんなの頼みたくねえよ」

「まで、今三つといたな、ということ。もうこの店やめたい」

「大丈夫ですよ、きっと一人で飲みきってくれるはずですよ!?!」

厨房は大混乱

「こっとなったら皆さん耐性をつけましょう!?! 実は私こんなもの持っているんです!?!」

女店員（新人）はそういつて鞆から男たちの絡む薄い本を取り出す。

「逆転の発想!?! そうか、我々に耐性がないのであれば耐性を作ればいい!?! よくやった時給を10円あげてやるっ」

「ありがとうございます!?!」

厨房はカオスに包まれた。

・・・・一杯1500円で高くね？それが俺たちが店を出る際に思ったことだった。

物語の始まりのようで始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

今さらですがこの物語にはご都合主義、チート等がふんだんに使用  
されております。

前回まで一般出会ったはずの人物が物語の都合上いきなりチート化  
することもありません。

本当に今さらですが。

物語の始まりのようで始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

奇縁と一度で巡り合えば、再び奇縁とめぐり合う可能性が高くなる。それを俺はラノベとアニメで知った、あくまで架空の世界なのだから現実にはそれは当てはまらないと思っていたがどうやらそうでもないようだ。

それを体感したのは前回から2ヶ月後のことだった。

そう、それは突然だ。始まりはいつだって突然だ。

その突然に対し咄嗟に反応できたのは一度自分が対象ではなかったとはいえ、しっかりと体感したからだろう。

それは、俺がいつものように双剣状態にした木刀を腰にさし、学校へと向かっている途中のことだった。

空の時と同じように突然地面が光り出したのだ。

「チツ!? 念のために常に頭の片隅に可能性を考えつつも、それは絶対に起こってほしくないうえにもし起こったとしても何の抵抗もできない可能性も高く、仮に抵抗できたとしても回避できる可能性が極端に低そうだったからできるだけ考えないようにしていたというのに!?!?!」

俺は一息で上の台詞を言いながらバックステップを3歩踏み、光の円陣から逃れさらに3回バックステップ踏んで距離を取り、木刀（双剣状態）を抜く。

「我が、魔王様より賜ったこの双剣、名を断空・・・空（との縁）を断つこの二振りの剣の力、貴様で見極めさせてもらおうか」



俺は双剣を構えながら、光の円陣から現れる無数の光で構築された手（以下光手）と相対する。

「こいよ、遊んでやる」

俺の言葉を皮切りにというわけでもなく、光手はノンストップで俺に向かってきた。

俺はそれを確認すると偶々道端に転がっていた石ころを光手に向かつてける。

石ころは吸い込まれるように光手の一本に当たると当たった光手が音もなく消えた。

「どうやらその腕は何かに当たれば消滅するようだな。」

例えるならばこいつらのライフは1といったところか。だがその1が無数にいるのであれば膨大な体力を持つ相手と同じだ。いやむしろこちらに全体攻撃の術がない以上それ以上に厄介なのかもしれない。

こちらは一本一本倒さなくてはいけない、そしておそらく一本にでも掴まればたちまちほかの光手達に掴まれ、引きずり込まれるだろう。こちらは常に一本一本に気をつけつつも、全体にも気をつけねばならない。一方で相手はどれか一本でも相手を掴めればいい、そしておそらくだがこいつらは生命体ではない、つまり恐怖も疲労もなくバカ正直に突っ込んでくる。

「――いいだろう、どこの誰かは知らないがてめえの送り込んできた光手一本残らず消し去ってやるよ!!!。」

おそらくだが、これにつかまれば俺も空のいる異世界に召喚されることだろう。そして今俺の手にあるのは空（との縁）を断つ剣。こ

れほどこの場に合う武器はないだろう。

「かかってこいよ、神だか悪魔だが知らねえが、俺は運命に屈しない、この世界で生きて見せるぞ!!!」

観客は犬と蛇一匹ずつ、このめぐりあわせに悪意以外の何者も感じないが今はいい。ただ尻の穴が自然とキュツとしまった。

俺は絶対にてめえのいるところにはいかねえからな!!!空ア!!!

そこからの戦いはどちらも一方的なものだった。

隆盛は、双剣を自在に振りまわし、馬鹿正直に真正面から攻めてくる光手をすべて消し去っていく。

その戦いの様は正に一騎当千、鬼神、戦神、そう呼ばれてもおかしくないほどに、圧倒的な戦いを繰り広げていた。

隆盛の双剣の届く範囲およそ周囲1m強、そこに結界が敷かれているかのようにそこに侵入した光手は尽く消え去っていった。

一方で光手の方も一方的だった。

隆盛を究極の質だとするならば、光手は究極の量!!!

隆盛に襲いかかる光手達は尽く消し去られるが、光の円陣より消し去られた数が次の瞬間には現れる。

おそらくだが、この光手達に意志というものがあれば、隆盛はすでにつかまっていただろう、彼らにできることは愚直に対象をとらえ

るべく進むだけなのだから。

傍から現状だけを見れば隆盛が有利だ。

その証拠に彼は、戦いを始めてより一步も後退をしてない。いや、むしろわずかながらとはいえ前進すらしている。

だが、それはあくまでも外から見た状況でしかない。

（クソツ！このままじゃマズイ！！）

隆盛は焦っていた。戦闘を開始して10分、隆盛はよく持った。だが生物には体力があり、当然体力の限界がある。

終わりの見えない戦い、最初は威勢を武器に、その不安を隠しきることができたが10分もたてばその威勢も弱まってくる。

「ひょっとしたら俺が捕まるまでずっとこいつらは現れ続けるんじゃないのか？」

疲弊し始めてきた隆盛は思考もややネガティブよりになり始めてきていた。

だが、それでも彼を動かし続ける思い、空と会いたくない、関わりたくない。そんな思いが彼の持つ彼自身を動かすもつとも純粹で強い思い。

これだけは決して折れることはないだろう。

だが、どんなに強い思いを持っていても体には限界がある。彼の肉体は徐々に疲弊し、動きに精彩を欠きつつあった。

「このままともに戦っていても勝ち目はない、なら……！」

俺は大きくバックステップを踏み、その間に双剣を裏手に持ち変える。

パシッパシッ

と音が聞こえ、しつかりと裏手に持ったことを確認する。

先ほどの場から後退し光の円陣から離れてしまったのは残念だが、仕方のないことだ。俺の気力と体力がもつうちに出せるすべての力を使い、光の円陣を壊さねば俺に勝ち目はないのだから。

「これから見せる技は、お前のような意志もなにもないただの道具に使うのはもつたいたないがこちらも余裕がないのでな。お代はあんたがここから立ち去ってくれるってことで手を打つよ」

俺の言葉を聞くことができなのか、少しくらいは空気を読んで待ってくれてもいいと思うのだが相手は待ってくれなかった。

「そんなに死に急ぎたいのならば、望み通り消してやるよ」

俺は大きく息を吸い込み、溜めを作る。大技をいきなり出せるほど俺は達人ではないからな。

「喰らえ、回転 舞六連!!」

迫りくる光手達に一瞬六斬の一撃必殺の技が襲う。残念ながら相手はきつた瞬間に消滅してしまうのでズバッ！などと何かを切る音は聞こえないが。

一瞬にして隆盛の前方3mほどに光手がいなくなるが、またすぐに召喚されてくる。

・・・双剣で攻撃範囲が短い、そこは武器チートということにしておいてくれ。空・・・つまり空気を断ったんだ。真空波だとかそんな感じで。

俺は前方に光手がなくなったことを確認すると、すぐさま体を翻し走る。

回 剣舞六連を使い続ければ俺は光の円陣までたどり着き、破壊することができるだろう。だがそれを行うのに後何回必要だ？

大ざっぱにみて俺と光の円陣の距離は10m、回転剣 六連で切り開ける量はおよそ3mそして、おそらく進めるのは1〜2mまでだ。つまり後最低5回はやらないといけないわけだが、俺の体力がもたない。

タッタッタ

俺は全力で十数m走り、思いっきりブロック塀に向かって跳ぶ。乱心した？僕は正常さ。

俺飛んだその足でブロック塀を蹴り再び跳ぶ、向かう先は反対側のブロック塀!!!

「ハアツ!!!」

渾身の力で塀を蹴り、反対側のブロック塀へそしてまたそのブロック塀を蹴り、跳躍する。

カチリ

俺は空中で双剣を本来あるべき姿、一本の木刀に戻す。こちらには



「万物貫く英雄の一投！！！！！！」

俺の放った木刀は一筋の光となり、光手達を今も召喚し続ける光の円陣へと飛んで行った。

物語の始まりのようでも始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

もし思いつけば、隆盛と同好会の日々を書く!!!

補足：ヘクトール

ギリシャ神話の英雄、fateのアーチャーが好きすぎる人はきつと知ってる。

作者的にはローアイアスの投擲武器に対して無敵という概念を作ったものすごい人だと思っている。アイアスでしか防ぐことができなかった投槍をするものすごいお方。参考資料アニタwiki  
槍の名前とかがわからなかったので名前を使用。槍だから英雄の投槍にしたかったけど木刀が槍はおかしいので泣く泣く諦めた。

ちなみに作者はfateをあまりしらないので色々ツツコミどころがありますでしょうが、スル お願いいたします。



僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短

今日はいきなり涼しくなりましたね、皆さまお体にお気を付けください。

物語に11話!!!エピソードかなんか終わらせる感じで1話!!!  
!!!なんかいけそうな気がする。

僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短

俺の放ったヘクトールが音もなく光手を消し、光の円陣へと向かっていく。

「な・・にい!?!」

光手達は本体の身の危険を感じたか理由は不明だが、残った光手達を光の円陣に集め幾層にもなる光手の盾を織りなした。

その様は正に花卉、7つとはいかないが、5つの光の花弁を形成した。

「どうしてお前がそれを知っているかは知らないが、皮肉にもお互いの技が神話上で対決した技の劣化コピーだ。神話上では負けているが貴様のそれは5枚、たった5枚で俺の木刀を防げると思うなよ!!--!」

キイイイイン!!

光手達の織り成す、不完全な5つの花卉の盾と、現代人の放つ神話上の技を模した一撃。その2つは金属同士がぶつかり合ったような激しい音を立てて激突した。

パリン!パリン!

隆盛の一撃はいともたやすく二つの花卉を破壊し、3枚目に激突する。

キイイイイイン!!!

ピキッ!!

再び激しい音を立てながらも、パリン！！と音を立てて3枚目も破壊する。

「俺の勝ちだよ、所詮貴様らは意志のないただの作られた物、意志ある人間には・・・いや畜生にすら劣る！！！」

隆盛は気づかなかつた、3枚目の花弁が割れた後に小さく響いた音に、隆盛の放つ木刀に小さな罅が入ったことに。

パリン！！

4枚目の花弁が壊れる音が響く。

————いける！！！！

俺は知らず知らずのうちにガッツポーズをとる。俺は勝利を確信していた。だから、次に聞こえた音が信じられなかった。

キイイイイイン！！！！

再び花弁と接触した木刀はすさまじい音を奏でる。

ピキッピキキ！！

「えっ」

信じられなかった、今聞こえたのは木刀に罅が入る音だった。よく見れば木刀の先端はところどころ欠け・・・いや先端だけではない、全体に欠損が見られた。

例えどんな名工が手掛けたところで所詮は木刀、ましてや伝説の樹を使ったただななてこともないただの櫛の木刀だ、ヘクトールの威力

に今まで耐えられただけでも奇跡といってもいいだろう、ましてやアイアスもどきとの激突を繰り返している。

「うおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は気づけば走りだしていた。逃げるのではなく、激突の中心地、光の円陣へとだ。

走っている途中俺は道路にとあるものに落ちていているのを見つける。トンファーだ。

それを拾い上げ、再び光の円陣へと走り出す。

木刀は既にボロボロだ、だが最後の花弁も後もう少しで壊れるという所まで来ている。俺は最後の花弁に引導を渡すためトンファーを持った右手を振りかぶる！！

「トンファーー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は叫ぶ、空が為すすべなく（微妙に抵抗してきたが俺という協力者がいたため比較的すぐに）連れていかれたあの光の円陣を壊すために。既にボロボロな体に鞭をうち、力を振り絞るために。

「キー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は木刀の底を思いつきり蹴る。パリン！！ピキピキ！！最後の花弁と木刀は同時に壊れる。円殺轟鉤？なんだいそれは。そんな技できるわけないじゃないか。

「エビバディッセイ！ー！ー！ー！」

振り上げたトンファーを光の円陣の中心部に突きたてる。

ドゴオ!!!

トンファーは道路に突き刺さり、それと同時に光の円陣の光も徐々に薄らいでいく。光手達はもう出てこない。俺の勝利だ。

俺は、よろよると道路わきに移動し、倒れる。道路の真ん中で倒れて車に轢かれるなんて馬鹿な真似はしない。そもそもこの通りは人通りは多くないとはいえ10分間も人や車が来ないというのは些かおかしい気がするし、戦いのさなか何度も大きな音がしたというのに何故人が来なかったのだろうか？

・・・俺は深く考えるのをやめた。

「ワン!!!」

俺と光手の戦い唯一のギャラリである犬と蛇が近寄ってくる。なぜか犬の背中に蛇が乗っているという世にも奇妙な絵面だが、いましたがファンタジーと戦って打ち倒したあとだ、大して気にも留めなかった。

「ワンワン!!!」

死闘後の火照った体には、夏が過ぎ肌寒くなってきた今の季節の風は心地よい。犬は俺に駆け寄り、勝利を祝うように顔を舐めてくる。懐かれた？嬉しいことだ。蛇は蛇でなぜか俺をじーっと見てくる。俺は少し引きつりながら笑ってみせる。

引きつる理由は二つある、一つ目は当然のことながら相手が蛇だから。蛇にじっと見つめられて心から笑えるやつは蛇好きなやつぐらিদらう。俺は好きでも嫌いでもないから笑えない。

もう一つの理由？そうだな、あれは3カ月ほど前のこと・・・君たちの時間では20日ほど前のことだ。

あれは、俺が友人からPCゲームを借りてそれをプレイしているときのことだった。今はもうこの世にいない空が突如俺の部屋に乱入してきたのだ。

もちろん鍵はかけてあったが、世の中にはピッキングという技術がある。その後はお察しくださいだ。

キーーーーー

「なッ!?まだ消滅していなかったのか!?!?」

先ほどまでのぶつかり合いとは違う耳鳴りのような音が響く。なぜかその音が痛々しそうに聞こえた。音の出所は光の円陣で中心にトンファーぶっさしたから、痛覚があるなら当然痛いんだろうけどね。いや、この場合ファンタジー的に考えるなら魔力供給ができなくなつて暴走しているのか?もうファンタジーだろう触手だろうがなんだろうがなんでもござれだ。ただし獣k(ryだけは勘弁な!!

俺が満身創痍で動けずに現実逃避をしていると、光の円陣はいたちの最後っp・・・最後の輝きを見せる、すさまじい光を放ち一瞬後に現れるは数百本の光手達。

俺・・・と犬と蛇は為すすべなく、円陣へと吸い込まれた。

なあ、神様?俺何か悪いことしたかな、それとも前世でかなり悪いことしたのかな?教えてくれよ。文字数稼ぎのために色々語るけど

さ俺親不幸も特にしてないし、周りにあわせて今まで胃に負担をかけながら頑張ってきたんだよ？

それと父さんは今まで一度も出番ないけどちゃんというよ、海外出張とかそんなこともなくただ出番がなかっただけでとくに仲が悪いとかそんなこともなかったんだぞ。

妹は父さんのこと嫌ってるけどあれは遺伝子が近いから仕方のないことなんだよ、クサイとか言われるのも仕方ないことらしいんだよ。いちいち落ち込まなくていいんだよ、そりゃ心情的には実の娘に嫌われりゃ落ち込むだろうけどさ。

ゴメン父さん母さん、恩返しができなくてとりあえず俺を生んでくれてありがとう、あなた方には文句はないけどさ違う家に生まれたかったよ。ここじゃなくてもっと遠く・・・でもなくてもいいから空と幼馴染じゃない未来がある所にさ。

あなた方は空のこと大好きでしたね、チクシヨウ俺の周りに完全な味方いないじゃねえかよ。俺の味方は魔王様だけだ。あのお方ならばきつと世界の壁も越えてくれるはずだ、いや希望を持つのはやめよう。ありえないことを信じて気づ付くのは自分なんだ。

さあ、こんにちはくそつたれな異世界、俺を呼ぶのはまだいい、いやくないけどまだ許してやろう。だが空を呼んで俺も呼ぶというのはどれほど俺に恨みがあるんだい？

もし狙ってやったのだとしたら力を手に入れたら滅ぼしてやるからな、もし狙ってないのだとしても、力があれば滅ぼしてやるからな。力が手に入らなかつたら・・・素直に諦めよう。

あれ？俺ってこの世界自体は意外と未練なくね？ちよつとへこんだ。とりあえず異世界へは犬と蛇とともにってどんな組み合わせだよ。

僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短  
トンファーキックがやりたかったがためだけにトンファーを出しま  
した。  
そこに後悔はありません。



主人公は、義兄弟の契りを結ぶそうな人と出会ったようです。(前書き)

隆盛「チート寄越せ」

仲鈍「おらよ！……！」

主人公は、義兄弟の契りを結べそうな人と出会ったようです。

目を開けたら、目の前にケルベロスがいた、いや俺が何を言っているのかわからないと思う、俺だつてわからない。さらに俺の混乱を助長させるかの如くケルベロスの後ろには八岐大蛇ヤマタノオロチがいた。

普通に混乱するだろう、目を覚ましたら目の前には3つ首の真つ黒な巨大な犬がいれば、さらにその後ろに8つ首の巨大な蛇がいれば誰だつて混乱するに違いない。

ちなみにだが俺が目を覚ましたのはつい先ほど、顔に何か滑つたなにやらざらざらした感触のものが顔にあてられたからだ。

起きてから分かったけどそれはケルベロスの舌、ああ味見ですか。いつそひと思いに寝てる間に殺つてくれよ。などと目の前の光景から現実逃避しつつ俺は周囲を見渡す。

人がだいたい30mくらい離れた場所で武器を持って武装している状態で俺たちを囲んでいた。何が何だかわからない。

「ちよつとあんた行つてきなさいよ!!」

「ちよ、ジユジユ様が召喚したんですから召喚主であるジユジユ様が行ってくださいよ!!」

「はあっ!?!あたしが死んだらここ終わりじゃん。この主戦力はあたしでしょ!?!あたしが死んだら皆死ぬのよ!!分かつてんの!?!」

「そもそも目の前の怪物どもがいる時点でなんとか事を治めないと

詰みますから！！！！」

身長が大体150cmぐらいの赤いローブに身を包み手には杖を持つ黒髪ツインテールの女の子（推定年齢17〜8歳）と、女の子より一頭身分くらい身長の高い若い若い兵士が言い争っている。周りの人たちは自分達に被害が及ばないように事態を静観している。

よくわからないが、あの女の子と言いつ争っている兵士（おそらく女の子と同年代）とは親近感がわいた。

「バウツ」

目の前のケルベロスが俺が目覚めたことを喜んでいるかのように吠え、俺を舐める。敵意は感じなかったが恐怖は感じるのとおりあえず為されるがままな俺。後ろの八岐大蛇は突然発光したかと思うと縮んで俺の元に寄ってきた。

ちなみにケルベロスの大きさがだいたい15m八岐大蛇が20mくらいだった。

（全く人間とは失礼なやつらよの、妾はあ奴らなど歯牙にもかけぬというのに）

突然頭の中で声が響いた。

（クツクツク、驚いておる驚いておる。まあ妾もいきなり魔界からここへ来た時は少々驚いたがの）

謎の声は愉快そうに笑いながら俺に話しかける。一体誰がしゃべっているのだ、いやそもそもテレパシーなんていう超能力俺は一切使えないぞ。

(妾はここにおるぞ、お主のお腹の上にな)

俺はその声に従い腹をみる・・・なんてまねはしない。なぜなら先ほど小さくなつた八岐大蛇(なぜか頭が8頭から1頭が変わつた)が寝ている俺の腹の上に来ていたからだ。

状況証拠的には見ずとも分かる、だが俺は信じたくない。だが見なければ話が進まない。俺は悟りを開いたかのごとく無の境地で声の主を見る。

蛇でした、まごうことなき蛇でした。

(ククク、呆けた顔をしておるぞ、愉快じゃが話しが進まぬ)

「すみません」

とりあえず謝っておく。

(ついでに言っておくが考えさえしてくればこちらで勝手に読むぞえ)

俺のプライバシーエ。心を読まれるとか怖くて一緒にいられツかよ。ある意味空よりも・・・性質が悪くないような気がする。意外と耐えられるかもしれない。

(気にする出ない、妾としても好き好んでのぞき見るのはことはせん、からかう時を除いてな)

(なんとまあ性格のいいことで)

(ククク、他者と話すなど数百年は無かつたからの、妾が楽しみた

いのじゃ)

俺は頭の中でそう話すとそう返事が返ってきた。”妾は”じゃなくて”妾が”ですか。完全に俺をおもちゃにでもするつもりですね。

(ところでここどこですか?)

(おお、そうじゃった、異世界人よ。歓迎するぞえ)

意味がわからない、なんとなくはわかったし予想師はしていたけど理解はしたくない。

(今から説明してやろう、存分にリアクションを取って構わんぞ)

オーケー、理解した。俺と一緒に召喚された蛇と犬が目の前の怪物に化けたということを理解した。ちなみに2匹とも雌らしい。

なぜ、この2匹が怪物となってしまったか。それはこの世界の人間には知られていないが魔界と天界と呼ばれる世界もあるらしい。今回の場合天界は一切関係ないから置いておくそうだ。

まず、俺が光手を生み出してた召喚陣を壊した、それにより発生したエラーが大変だったらしい。今俺がここにいるのもかなり奇跡に近い確率で普通なら存在を消されていたやらなんとやら。全く想像がつかない話した。

それで運よく(とっていいかは果てしなく疑問だが)、こちらの世界にこれたわけなのだが問題が起きた、俺と一緒に連れてこられ

た蛇と犬である、なんか仕組みはよくわからないけどこちらに呼ばれる際にエラーの影響で存在が消されたからそれを保つために比較的存在が近いもの・・・蛇だから八岐大蛇だろjk、犬だからケルベロスだろjkという発想の元魔界にいたこいつらがこいつらの存在を上書きし呼ばれたらしい。

よくわからない話した、無理に理解する必要もない。ただ現実を受け入れて目の前に八岐大蛇とケルベロスがいるということだけを理解・・・できるか!!!!!!

俺が心で叫んだころ、少女と兵士の言い争いも終わったようで、死を覚悟し、もし死んだらあいつに化けて出てやるという思いを前面に出しながら若い兵士が近寄ってきた。

ふと、その若い兵士と目が合う、瞬間俺は全てを悟り、腹の上の蛇を丁寧に地面に下ろし立ちあがる。

向こうも理解したのだろう、俺たちは自然と歩を進めた。そしてお互いが目の前まで来るとどちらとも何も言わずに腕を突きだし肘を曲げ拳を合わせる。拳が触れ合った瞬間2人に確固たる絆ができた。

「お前も・・・なのか？」

「ああ、そうだ」

兵士が不安そうに尋ねてきたので俺は力強く頷く、そして抱き合う。

「よく今まで耐えてきた、理不尽に」

「お前は解放されたのか？理不尽から」

「いや、まだまだ、世界の壁を越えても解放されなかった」

俺たちは傷を舐めあつた、同じ境遇の者同士心で繋がった。

「俺たちは、魂の兄弟ソウルブラザー！！！！」

俺たちは宣言した、現在進行形で訪れている理不尽に抗ってみせると。

それを見ていた周りの人たちはものすごい勢いで引いたらしい。

「とりあえず、兄弟を呼び出した理由とかも説明しつつ、君のこれからについて話しあつていこうか」

「ああ、そうだな」

疲れた様子のソウルブラザーに気を使い俺は同意した。どうせ召喚系のファンタジーなんて魔王を倒してくれとかだろ。いきなり呼び出したおうえで魔王を倒せてか？ふざけんな。

だがまず生きていくうえでこつちの世界の常識を知らないといけない。

いきなりあちらの都合で呼びだされて、不利な条件の元生きていくなんて理不尽もいところだが、途中から変えていけばいいさ。つかそもそも俺はなんの特殊な能力もないわけだ。あちらの良心に期待するでしょう。

でも、後ろの2匹どうしよう・・・大蛇さん曰く、ケルベロスはなぜかかなり俺に懐いているらしいし、本当にどうしよう。





主人公は、義兄弟の契りを結べそうな人と出会ったようです。(後書き)

隆盛「誰か俺に人間の女の子紹介してくれ」

仲鈍 つ 漢女おとめ

隆盛「女の子じゃねえ!？」

異世界一日目・・・誰か俺に平穩をくれ(前書き)

隆盛「タグにほのぼのってあるんだから、チートっていらないだろ？」

仲鈍「異世界で魔王がいて勇者がいる、チートなしで生きていけると思うか？」

隆盛「ならばなぜ?!?!？」

異世界一日目・・・誰か俺に平穩をくれ

(気に食わんのう)

「「え?」「」

俺とソウルブラザーは声を八もらせる。どうやら今回は俺だけではなくソウルブラザーにまで念話?もう念話でいいや。を飛ばしたよ  
うだ。

(気に食わんというたのじゃ、妾達をこんなところに呼び出し、そのことを謝ることすらなく拳句利用しようなどとはの)

「・・・」

ソウルブラザーはその言葉に何も返さない、何故返さないかなんとなく理由がわかる、ぶつちやけこいつこの町に未練がねえ!!!  
200mほど離れた場所には城壁に囲まれた町らしきものが見える、おそらくだが八岐大蛇とケルベロスなら単騎でもすぐに落とせる。そしてソウルブラザーは恨んでもいないが思い入れもない。強いて言えば理不尽な存在がいるからマイナス寄りだろう。

「それは申し訳ありませんでした、ですが謝罪の言葉は私ではなくあなた様を召喚した者、あちらの魔法使いからでなくては意味が薄いように思います、私どもも同罪でしょうがまずはあちらの主犯に謝罪を入れさせた方がよろしいでしょうか?」

若い兵士は口元を醜く歪めて嗤う。おお、友よ、嬉しいか。理不尽な存在が憎いのだろう。だが周りにとってはそいつの方が重要なた

めに何も反論できずにしたところで悪者にされるのは自分。一泡吹かせることができそうで嬉しいのだろう。要するに俺と同じ臆病ものなのだ、孤立することを恐れ、泣き寝入りをしていた俺と。

「ここはまず俺たちを召喚した主犯に謝らせましょう」

俺は大蛇に言う、そういえばケルベロスは喋ることができないのだろうか？一度も会話に入ってきてはいない。

(あやつは念話を使うことは出来ぬ、妾は意志疎通ができる故通訳してやるう。さて、人間よそちのいう主犯とやらを妾の前まで連れてまいれ)

「はは！……！」

ソウルブラザーはいい返事を返した後に先ほどまで自分がいたところへと、正確には先ほどまで言い争っていた少女の元へと走って行く。

「ちょっと、なんでこっちきてんのよ！……あんたの役目はあいつの生贄になることでしょ！……！」

「あのお方はお前を御所望なんだとよ！……いつもいつもおれをこき使いやがって、俺の怒りを思い知れ！……！」

「まさかあんた私を売ったの！……？！……ふざけないでよ！……！」

「うるせえ！……！！……！」

ソウルブラザーと少女は叫びながら取っ組み合いを始める、傍から見れば子供の喧嘩のようにしか見えなくとも本人たちは（生き延びるために）必死なのだ。

「あれ？俺たちなんでここにいるんですって？」

2人の取っ組み合いを眺めて10分、周りの人たちも事態を静観している、もちろん俺たちも。ちなみにソウルブラザーが優勢だ。といっても少女の方はもはや相手を殺す気、ソウルブラザーは捕縛目的なので中々決着はつかない。

流石に鍛えている兵士相手におそらく鍛えていないであろう少女が10分も耐えるというのはおかしい・・・魔法か？俺たちを召喚したというのなら魔法を使ってもおかしくはない、むしろ魔法と呼べるような不可思議な物を使えなくてはおかしい。それがどれほど強力なのかは分からないが、少女でも鍛えている兵士と戦えるだけの力を得ることができるといえるのは確かだろう。

（お主が何を心配しようとか妾が解決してやるから安心せい。この場での問題ごとく容易きことよ）

「貴様の首をわが友の友情の証として差し出すウーーーーー!!!!!!」

「魔法も使えない男が私に齒向かうんじゃないわよおー！ー！ー！！！！」

ゴッ！！と鈍い音が二つ聞こえてきた。おそらく拳と顔の骨が当たった音だろう。女の子相手に顔はだめだよ、どんな理由があるうとも基本的にこつちが悪くなっちゃうんだから、狙うんだったら見えないところをお勧めする。

2人は道化<sup>ビエロ</sup>だった、八岐大蛇という化け物を楽しませるためだけに踊らされた道化<sup>ビエロ</sup>だった。

あれ？八岐大蛇が言ったのは召喚主を連れて来いっていっただけで首までは言つてなかったよな？2人の最後の1撃を放つ際の咆哮を聞いて心の内でのみそう突っ込みを入れた。

「・・・あれは放っておこう」

(妾も十分楽しめた故、あれらにもう用は無いの)

ドサツという音とともに同時に地面に崩れ落ちた2人を見て、そう口にする八岐大蛇(もう大蛇さんでいいや)から返事が返ってきた。一人ごとだったんだがな。

「グルルルル」

ケルベロスは寝言ののだろうか、唸っている、その声を聞きたびに俺を囲む人たちがビビり逃げ出そうとするが、気力で持ちこたえている。おそらく背を見せたら一瞬で殺られるとでもおもっているのだろう、俺だってその恐怖と戦いながらこの場に立っているんだ

から分かるよ。俺の後ろには大蛇さんとケルベロスがいるんですから、殺されたりすることは無いって理解はしているが本能的恐怖からは逃げられません。

例えて言うなら、魔王からは逃れない、かな。

(さて、主は名を何といったかの?)

(隆盛です、けっしてたかもりでももりたかでもありません、隆盛です)

(ならば、隆盛よ、妾の言を代役せよ、主の言葉でも構わぬ、意味さえ通ずればの、声は妾が届けさせてやろう、全員にな)

(了解です、というより俺に拒否権なんてありませんね、わかります。)

俺と大蛇さんの念話を終える、俺は一度周囲を見渡し、深呼吸をして気を引き締め、脳に直接送られてくる言葉を瞬時に自分の言葉に置き換え口を開く。

「私達はあなた方が呼んだあなた方の認知している世界の外から来た住人だ、あなた方の言う魔界という場所からね。呼ばれてきたのだからあなた方が望んだといっても差支えは無いだろう。我らの意思を抜かせばの話だけどね」

俺が一旦そこで区切ると辺りがざわつき始めた。俺たちは魔王を倒すためではなく、ここの戦線を維持するために呼ばれた。こちら辺の事情などは大蛇さんから聞いたからなんとなくは理解している、言ってしまうえば戦力不足、人手不足、この町を守るだけで精いっぱいそれがここの現状だ。

だから、今巷を賑わせている勇者を召喚したという話しにあやかり、同じような召喚を行い、戦力にする、最悪戦力にならなくても神輿として士気を上げるのに役立つぐらいのことはできる。

当然、この町の上の人たちは役立たずだろうとも神輿として扱おうということを考えていただろうが、下の人たちは圧倒的な個人の力を持つ物が現れると思っていた。

・・・いや現れたよ？ただし俺以外の2頭だがな！！ついでに言うて魔界って言うのも御伽話の中だけの存在だと思われてるらしいよ。つておい俺まで魔界出身的なことになってないか？

「騒ぐな、五月蠅い。貴様らはただ黙って聞いていればいい。」

騒ぐ群衆を威嚇して黙らせる・・・いつの間にか起きたケルベロスと大蛇さんが。どう見ても俺は虎の威を借る狐ですね、どうしてこうなった。

「彼女らは俺の配下です・・・え？」

俺は焦る、頭に入ってきた言葉ではなぜか俺が後ろ二人をまとめているというような事になってきているからだ。

(そちらの方が面白そうだな、安心せい主の安全は保障するぞえ、ケルベロスも言うておるぞ、例え世界を敵に回してでも主を守るとな)

(重っ！？なんかケルベロスの覚悟重！?!?)

(恋する乙m)いわせねーよ！？俺の精神上の安寧のために言わせねーよ！?)・・・狂ってもらったほうが面白いが、まあよい、徐



々に狂う様を楽しむとしよう)

俺はその言葉をきいて体中に稲妻が走った。ドSだ、絶対にドSだ。  
・・心を鍛えよう。そう決意した。

俺の言葉に再びざわつくのを感じる、そりゃそうだ、俺みたいな明らかに人間にしか見えないやつが化け物2体従えてるって言ったんだ、あいつは人間の皮を文字通りかぶった化け物だとか聞こえてくる。実際に想像するとかかなりグロイ。

それに、暗に俺は後ろの2体よりも強いっていつているようなものだ、どれくらい2体が強いのかは知らないが確実に俺が一人いたって敵わないがそんなことを相手は知るはずもない。

そこをついたハツタリだ。ちなみにケルベロス一体で町一個なんて余裕で落とせるそうです。マジ化け物。大蛇さん？国一個余裕だそうですね、もう訳わからん。

「俺はあなた方に協力するつもりはない、なぜなら協力するメリットも少ないからだ。衣食住など自分達で確保できる。むしろあなた方を制裁として滅ぼしても構わないくらいだ。」

その言葉に今度は逃げ惑い始める・・・がムリ！！背を向けたまま固まる群衆！！その様は正に！カエル！！蛇に睨まれた蛙のごとし！！！！

実際に睨んでいるのは蛇だが、全力で逃げようとしているのを止めるってもう非現実的すぎて慣れてきた、最初から非現実だったからな、具体的には一部を除いて完璧超人の空と幼馴染だったこととか・・・愚痴を言っても始まらないか、さあ通訳を開始しよう。

「・・・といつても我らもあくまでも鬼でもない、ただの8つ頭のある蛇と3つ頭のある犬とそれを従える者だ。我らを呼んだという

この偉業褒めてやろう、褒美としてこの町を守ってやろう、食料さえくれればな。」

八八、現代人である俺がいきなり町の外で生活してまともな生きていけるはずがない。だからこそのこちらがかなり譲歩しているように見せかけて俺が生きていけるようにするための案を与えてやる。町とかに住みたくないそうなんですよ、大蛇さんとケルベロス。

「食料とはどれくらい必要なのでしょうか？」

顔を真つ青にしながら、杖をついてやっと歩けるといった具合の髪の毛が・・・なおじいさんが本当に勇気を振り絞ったのだろう、前に出てきた。おそらく長老か何かだろう。

「10人分で良い、十人分の食料だけで安全が買えるんだ安いもんだらう」

「ですが、まだ私もはあなた方の力のほどをしりません」

最後の方が蚊の鳴くような完全に一人言をいうような声量とになっていた。

ドドドドドドド

・・・こういうのをご都合主義というのだろうか、タイミング良く町に大量の魔物が押し寄せてきた。その光景はまさに黒い波！！到底数を数え切ることなど不可能に思えるような圧倒的な量！！

生憎と俺たちを呼びだす儀式のために町の方は手薄になっているのだらう。

大蛇さんによって動くことのできない体を必死に動かそうと頑張っている人たちがいる。

「ちようどいい、全く持ってちようどいいな、今から我らの力を見せてやるう、やれ！ケルベロス！！」

俺のその言葉（正確には大蛇さんの言葉）とともにケルベロスは3つの口を開き、口の中に炎を作り出す。

少しの間その光景を見ているとぐにやりとケルベロスの辺りに景色がゆがんだ。

瞬間に俺は悟った、俺の周りは本当に化け物だらけなのだ。そして俺に平凡を超越せ。



犬、蛇、人間 今のところのヒロイン候補（前書き）

いづれ追加予定

いづれ人間削除予定

## 犬、蛇、人間 今のところのヒロイン候補

なぜか犬と蛇とともに異世界召喚される

なぜか犬がケルベロス、蛇が八岐大蛇になっていた。しかも俺の味方らしい。

なぜか武装している人間に囲まれている俺達

なぜか交渉することとなった、内容はお前らの身の安全保障してやるから飯よこせ。

なぜかタイミングよく魔物が襲ってくる。

俺、ケルベロスにそいつらを蹴散らすように命令（お願い）する。

3つの口から炎を吐きだす。 いまここ

我が世の春が来た!!! 願望

「ヒイヒイッ!？」

今だ固まっている人々は悲鳴を上げながらもその場を動けずにいる、アンモニアの臭いはしない、外だからなのか、それとも漏らしていないのかは分からない、前者であることを願う。



だが俺に拒否権は無い、そろそろ自由選択というものが欲しいです。

「それで、あちらで倒れている者たちは回収してもよろしいでしょうか？」

(構わぬぞ)

「どござ」

「それとこの拘束魔法を解いてくださると大変助かるのですが」

(指パッチンせい、そのタイミングでといてやろう)

どれだけ俺を大きく見せたいんだ、だれでもいい等身大の俺を見てくれ、空の幼馴染とか化け物2体を従えるなんてそんな風に見ないで俺自身を見てくれ、お願いだから。

・・・あれ、それじゃあ俺自身を見てくれていたのってコンピューター同好会のやつら抜かすと・・・俺は全力でその考えを投げ捨てた。

何ともおぞましい考えをしてしまったものだ、俺には同好会のやつらがい・・・ねえよ。ここ別世界だろいるわけねえじゃん。

そういえば、魔王さんに渡された木刀壊しちゃったな、ああ、唯一の元の世界とのつながりが。

(大蛇さん)

(なんじゃ？断るが言っただけ申してみい)

(元の世界に)



(駄目じゃ、)

「バウ」

大蛇さんと話しているとケルベロスの右の頭が俺を啜えた。

(こやつもお主に懐いておるからの、離れたくないそうじゃ。妾たちは主の世界に行くことは叶わぬゆえにそう簡単に戻してやるわけにはいかぬのじゃ)

ゾクツ!? その時俺の背筋に寒いものが通り過ぎた、俺の貞操がふと心配になった。なんとかなるだろ、いや、してみせる。ただもしもの時のためにこう願おう、せめて擬人化がありますように。

だが、俺の脳内で像を結ぶのは雄吾から借りたあのゲームのワンシーン、そして俺のトラウマ。犬と蛇とおれの・・・

(そうか、そう言う類のものが望みであったか、よかったのうケルベロス。)

「ちげえよ!?!?!?」

つい、声に出して反論してしまう。俺はまだ指パッチンをしていないのでまだ固まっている人たちは何事かと思いつながらもちちらを振り向けずにいる。

「あの、そろそろ・・・」

パチン

俺は長老に言われ、我に返り指パッチンを行う。その瞬間に固まっていた人々は地面に倒れる。ちなみに俺は初めてパッチンといい音を出すことができた。いつもはこんなきれいにはいかない。

どうでもいいけどケルベロス（の右の顔）に啜えられているので格好は付かない。

ああ、ブレザーが俺の自重で悲鳴をあげている。どうでもいいけど服これ一着しかないじゃん・・・じゃあどうでもよくないな、死活問題だ。

俺がほぼ全裸で過ごす羽目になりかない。

「それでは我らはこれより住処を作るので退散させていただきます」

ドナ ナ ドーナ、俺を啜えてゝ 哀れな俺、連れ去られてゆくよゝ

にルを入れた人は負け。

「一週間後再びこちらに来る、それまでに食料を用意しておけ！！それと服もだ！！！」

一週間後にまたここに戻ってくると電波・・・じゃなくて念話を受診したので俺の欲求も含めて比較的フレンドリーに叫ぶ。

「ガウ！！！」

だが、その後にケルベロスが続いたことで見事なまでにいい笑顔で森難題を押し付ける外道のような印象を与えてしまった。

ヒイイ！？や、やべえぞ！？世界の終わりだ！！などと叫ぶ者がいたせいで混乱が助長され見事なまでに悪役へと墜ちました。

髪の毛焼いちゃったからかな？あいつら全身の毛という毛がなくな

ねばいいの」。

(おお、そうじゃ。これから妾達と共に暮らすゆえにいちいち大蛇さんやらケルベロス等と呼ぶのは堅苦しい、故に妾達を愛称で呼ぶことを許そう、いわゆるにっくねーむというやつじゃ)

(・・・御断りs)

「くう〜ん」

俺を啜えずに余っている右と真ん中の顔が寂しそうな泣き声を上げる。

(お主酷い奴じゃのう、おんめい獣女がこんなにも悲しそうな顔をしているというのに)

ああ、いつから漢字の読みはここまで自由になったのだろうか。

(ケルとおーちゃんとお呼びしてもいいでしょうか)

「ワン！……」

ケルベロスことケルは嬉しそうに吠える、了承でいいんだよね？

(構わぬぞえ、主から提案してきたもの故いまさら撤回などさせぬぞ？こちらはそれで良い言ったのじゃから)

いやいや構ってよ、なんで日本の神話に出てくるようなやつをちゃん付けでよぶことになるんだよ。つーか以外に気になってません？

ちよつと鼻歌？聞こえますよ。

「ケル、運んでもらっていて本当に申し訳ないんだけど、地味に首絞まつてるから一回おろしてくれと助かります。」

「ガウ」

俺がそうお願いすると、ケルはゆっくりと俺を地面に下ろしてくれた。とりあえず唾液で襟が濡れて気持ちわるいから脱ごう。

辺りを見渡すと、自然一色今までテレビや修学旅行など学校行事以外で見たことがなかったような光景が広がっている。いや、ここまですごい自然の景色は修学旅行でいった緑あふれるあそこは届かない、テレビの中だけだ。

文明の利器あるのかな？期待・・・これから森に住むんだから使えないか。使えそうにないな。

「おーちゃん、この世界にギルドってあります？」

心で思うだけで、答えが返ってくるというのはなにか寂しかったので口を開き尋ねる。

（・・・ある、だがギルドとは組合を指す、隆盛の望むものは何のギルドかいわぬは感心せぬな）

（間はなんだったんですか？）

（分からぬかったから主の心を読んだのじゃ）

相手に伝えたいこと聞きたいことは簡略せずにしっかりと！！そう

心に刻み込む。

(依頼することは可能じゃろうが、暗殺相手になにも非がない場合は受理してもらえぬはずじゃ、むしろ危険人物としてマークされるぞえ、先ほどいた者共の記憶などはすべて読んだ故分からぬことがあれば妾に聞くがよい)

「うわ、それなんてチート」

便利だけど、そう心に付け足す。異世界に来て1日目だが、これで俺がすべきことは決まった。

まず、金ためないとな。あいつが危険人物としてマークされないはずがない、その時に備えて俺は金を貯めよう、依頼料として払うために。

あいつがこの世界にいないのであれば、まったくの無意味だが俺の勘が告げている。奴は絶対にこの世界にいます。

## なんかごついかにもなHENTAIキャラ出したい

森についたら最初にすることは家を作ること提案した・・・え、ここまでどうやってきたか？どうやらケルベロスも体の大きさを変えることができるみたいで、馬くらいのサイズになって乗せてもらったよ。

俺の制服は犠牲になったのだ。着れるけど

(いかに妾といえど暮らすには食住を満たさねばならん、あそこに見える森自体を家を認めることもできぬこともないのじゃが、隆盛にはきつかるう。)

ちなみにですが、おーちゃん俺の体にまわりついていきます、このまま絞殺されるんじゃないかと冷や冷やしている。そんな俺を心配そうに見てくれるケル、もしケルが人間の女の子だったら・・・だがケルベロスだ。

(方法としては二つあるがどちらがよい？一つは家を作る、もう一つは転移魔法を使い家をこちらに呼び寄せる。どちらもメリットとデメリットはある故隆盛に任せる)

作る方のメリット、それは自分好みに作ることができ、後々の増築もしやすい、デメリットは、誰も家一戸を作る技術など持ち合わせていないこと。

転移のメリット、それは一瞬で家が手に入る、デメリットはおそらく、どこかから持ってくるので不要な者(誤字ではない)が突いてくる可能性があること・・・か？それに犯罪だしどんな家になるか

わからない。

現実的に考えて一択しかなかったな。

「転移で持ってきてください」

生憎と俺は正義の心を持って自分で作るなんてことを言うことはできなかった、ないものから絞り出すことはできない。それに抵抗する俺たちを無理やり連れてきたのだ、多少のことならやらせてもらおう。

（妾達の本来のサイズが入るものを用意したい故に相応に目立つ物になりかねぬが構わぬか？）

「例えばどんな？」

（そうじゃの、魔王城や、人間の城といったところかの）

「目立つってレベルじゃねぞ！?!?!」

（安心せい、隆盛の心配する不要な者などケルベロスが食してくれ  
る）

「がっ！！！」

おーちゃんの言葉に力強く返すケル、せめて俺の見ていないところで食べてくれることを祈ろう

（隆盛が嫌ならば妾達も基本的には今のようじ姿を小さくし暮らす  
ことも可能なのじゃが・・・）

おお、できるならぜひそうしてください、あなた方があのサイズですといつ気づかずに轢かれるか踏みつぶされるかわかりません。俺じゃ何も言わずにおーちゃんと言いだむ理由を語るのを待つ。当然のこと俺は、大抵のことならば構わんむしろ小さい姿でと言うつもりだ。

(身体能力が上がりすぎてしまうのじゃよ)

「・・・What? どういうこと」

いや、言っている意味は分かる、だがその意味がわからない。

(ふむ、そうじゃな。例えば妾が10000の内1の力で隆盛に飛び付いたとしよう。その瞬間に妾は弾丸のごとき速さを得、隆盛を貫くじやろう。ふと気を抜けば主など呼吸をするかのごとく殺してしまふやもしれぬ、まあ、今の主の状況妾がほんの少しでも力を謝れば、たちまち胴体が寸断じゃ。ケルベロスも同じようなものじゃな。)

「あぶねえ!? おかしいだろ。絶対俺ここにいちゃいけないだろ!!! 人外だとかそんなもん通り越して次元が違うから!!! それでもここを出ていったらおれは確実に死ぬからうつかりで殺されかねない死の恐怖を常日頃から感じつつ一緒に暮らせていただくわけですけど!!!」

(安心せい、妾達も気をつける)

「そこ、冗談じゃとか言つてくださいよ・・・それと人間に化けたりとかできないんでしょうか? 流石に人との関わりを断ち動物たちと暮らすような世捨て人ではないので」



（まあ可能じゃが、断る。人間の身に化けるなど自らの力を落としいざという際に力を発揮できぬやもしれぬ。むしろそのような状況を望まぬでもないが今は主を守らねばならぬゆえ希望はかなえられぬ）

俺の要望は俺のことを考えられた理由で断られた・・・命はあっても心が死んじや意味がないんだよ、俺はケルをなでながらそう思う。ケルは気持ち良さそうに目を細める。そこでふと思った。

「ケルは人間に化けたりできないんですか？」

（隆盛、確かに主の思っている通りこの世界には主の思う魔法の類のものがある、しかしそれはなんでもできるというわけではないぞ、できなくもないがそこらの説明は森についてから説明する故、しばし待つのじゃ）

「わかりました」

人生何があるかわからない、ひよっとしたら俺が獣k・・・に目覚めてしまうかもしれない。いっそそうなれば幸せなのだろうが正気を保っている今の俺がその時のことを想像すると辛い。

俺は確かに動物が好きだ、特に飼い主によくなついてくれる犬が好きだ。だがそれはあくまでもペットとしての話し。恋人（恋獣？）としてではない。ペットとしてなのだ。

俺が好きなのは人間の女の子・・・だよ、な？そのは・・・ず？断言できなけど、そっち系統に目覚めたりはしていない。

（休憩はもう十分じゃろう、そろそろ出発するぞ）

「がっつ」

ケルはそう返事をする。元の大きさに戻った、おいまで、馬の大きさのまま俺で俺が乗るんじゃないのか？なぜ先ほどまで小さくなっていた、俺への説明のためだけかよ。

「あーっ」

俺は今度はケルの真ん中の口にくわえられ、そのまま上空へと放り投げられる。

「あーっってええええええーっ！？」

「がっつ」

ぼすっ そんな音を立てて俺はケルの背中へと落とされた。ケルの背中に生えている毛は俺の想像のチクチクとして剛毛というにふさわしい硬さを誇っていると思っていたら柔らかく痛くは無かった。

（そこならば隆盛もいいじゃろう、ゆくぞ）

「がっつ」

そうしてケルは歩き出し、おーちゃんは地面をはいずりだした。

（それと、答えをきいていなかったのう、住む家については隆盛はどうしたい、どちらにせよ隆盛には命の危険がありふれておるのじや。妾もめんどくさがらずに要望にこたえよう）

「ああ、じゃあ申し訳ありませんが小さい姿でいてもらってもいいですか？流石に威圧感で寿命が縮みそうです。それと家は転移で盗んできてください。」

（くくつ、了解じゃ。主のことじゃから自分で作るなどと抜かすと思っていたのじゃが、見直したぞ）

「流石にいきなりこんなところにいきなり連れてこられてこれだけ非現実なことを目にしていれば今までの常識なんて薄れますよ、それにできないことを抜かすほど馬鹿ではないつもりです」

俺は今より常識と良識を良識を排除しよう、今までとは全く違う世界かどうかはわからないが、郷に入っては郷に従え。俺自身の理性が拒絶しない範囲でおれはこの世界に染まることにした。

なんかごういかにもなHENTAIキャラ出したい(後書き)

自分のことしか考えていないな、この主人公

主人公<<<森の魔物<<<越えられない壁<<<ケル<<<超え(ry<<

たぶん強さ順こんなん。

生かされないけど

主人公<<<森の魔物<<<越えられない壁<<<ケル<<<超え(ry<<<

(ここが今日から妾達の住処となるカンダラの森じゃ、ここには多くの魔物が住んでいるそうじゃ・・・もし仮に奴らが食料を運ばずとも暮らしていけるの)

・・・の割には森が静かです、鳥の鳴き声すら一切聞こえません。

今俺は大自然に囲まれている、360度見渡す限り木に囲まれている。マイナスイオンを感じる気がする。だが何かが違う、風に気が揺れる音しか聞こえない、生き物の気配がしないのだ。

(まあ、妾達の存在に気付き逃げたのじゃろう。それでも森の外に逃げなかったのは賢明じゃの、逃げれば殺しておったわ)

「グルル」

おーちゃんはさも愉快そうにケルは獲物を見つけた狩猟犬のごとき低い唸り声を俺は普通の動物達と心休まる人と気を味わうことすら許されないのかという絶望をとそれぞれの反応をした。

(まずは住処の確保じゃの、妾がやっておく故隆盛とケルベロスが食料を頼む、)

「がうー!!」

「大人しくケルにすべてを任せます」

「クウーン」

俺がそう言うとケルは俺に甘えるように足にすり寄り、ちなみに今は普通の犬くらいの大きさだ。だが頭が三つだ。

（妾も少々大きな魔法を使う故、ある程度はもとの大きさに戻らせてもらう、場所は後に念話で案内する。では、それまで二人つきり楽しめ、ケルベロス、隆盛も狩りの様子をしっかりと見るのじゃぞ。）

「ああ、じゃあまたあとで」

（うむ）

「がっ」

そうして俺はおーちゃんと別れ、上手程度の大きさになったケルにまたがる・・・なんてことをしたのは間違いだった。

俺は自然界の動物（魔物）達を甘く見ていた。彼らは基本的には臆病なのだ、なにか異質な物を感じ取ればすぐさま逃げる、この場合異質なものとは強い力をもった外から来た者・・・ケルとおーちゃんだ、

2人に共通してあるもの、それは隠しても隠しきれない存在感・・・とまあぐだぐだ述べてみたわけだが簡単にいえば結構離れていても逃げるのだ、獲物たちが。

逃げる獲物を捕まえるには獲物以上に速く走ればいい。

だから俺は置いてけぼりだ、ケルに乗っていたら死ぬ、風圧で死ぬ。目に映らないような速度で動いている物体に風避けもなにもない状態で足と腕の力だけで振り落とされないように踏ん張ることなど不可能！

所々服が破れていたりきりきり音ができてるのは身を持ってそれを体験したからだ、ここは森の中当然多くの木々がある、そこを疾走、枝とかに切られまくった。

それといくらケルベロスがいるせいで追い払われたといっても魔物にだって己の住処自分が狙われていないと分かれば元通り森で獲物を散策したり、巣に戻る。

・・・さて、俺の生存競争開始と行きますか。

これはもとの世界のような競技や遊びの世界ではない、だということに俺はクラウチングスタートの構えを取った。

俺の後方10mの茂みに二つの視線、俺を狙っている、狙っているといつてもいい男の如くアレを狙っているわけではない。

俺が後ろの気配に気づいたのは偶然だった、偶然にも遠くからケルの雄たけびが聞こえ一瞬だけ姿を見せたのだ。

俺の中の何かが警鐘を鳴らす、逃げる今すぐ逃げるお前じゃ勝てない、当たり前だ、俺が自然界の獣に勝てるわけがない、俺はただの凡人なんだ。

空中に飛び上がったり真名解放まがいなことやったけど俺はただの凡人だ、ただ幼馴染がちょっとバケモノ染みてその牧沿いを食らっていただけのただの凡人なんだ。だからこそ俺はクラウチングスタートを切る。

逃げる者を負う獣の習性故か俺が走りだした後すぐに茂みに隠れていた者も姿を現す。

ーそれは熊だった、なんか涎をやたらとたらして爪がやたらと長くいようとがっていることと体長およそ3m近い巨体であることを除いて俺の知識で知る熊の形をしていた。



「た、遅しい」

俺は一瞬その熊に見惚れた、そして一瞬、本当に一瞬だけだが俺が四つん這いになりその熊に・・・自主規制。

「・・・って誰だ俺の横で俺の声でささやくのは!?!?」

何者かの気配がし俺は横を向くと、そこには15cmほどの陳腐なアニメとかで出てきそうないかにも解説役として味方になりそうな人形のような姿をした何かがあった。

(そ奴は夢童子・・・相手の精神に干渉し相手のいやがる妄想を見せる趣味の悪い奴じゃ、ちなみに主を追いかけておるのは・・・飯は熊鍋かの)

「俺が熊の飯になりそうですけど!?!」

横にうざったい顔をしている夢童子を無視して俺は走る、俺が飯とまらないために。幸いにも足はそれほど速くないようで距離が開かないものの縮まりもしない。

この勝負・・・互角!?!なはずもない、何せ体力が違う。だからこそ俺は一刻も早い救援を求む。

「グガアアアア!?!?!」

熊は俺をおいたてるように吠える。俺は獲物、圧倒的弱者。その声を聞いただけで恐慌状態に陥るなどという豆腐メンタルは持ち合わせてはいない。だてに俺の1ピー年間の理不尽な経験なめんなよ。とは言っただものの命の危険にさらされていることに変わりはない、

おまけに生きたいという想いよりも死にたくないという恐怖が先行していることは確かだ。

「はっ！はっ！はっ！」

誰か助けてくれ！！そう叫ぶも周りに誰もいないのだから誰も助け  
てくれるはずがない。

「ふっ、元気そうだなあ、隆盛」

「その声は！？」

「死ねえ！！！！！！！！！！！」

「ギョグル！？」

俺は俺の顔の横を並走する夢童子を殴る。その拳は明確な殺意を込めただけあって、夢童子は吹き飛ばす。

胸糞悪いものを見せやがって、俺は追い打ちをかけるか迷ったが追  
われていることを思い出し諦めるはずもなく追い打ちをかけるべく  
夢童子が吹き飛んだ方向へと進路変更をする。

「がっ！！！」

「ガッ！？？」

ドサッ、後ろの方で喉を裂かれ一瞬だけ断末魔を上げるような声が

聞こえたが一切無視だ。だがしばらくは飯が熊の肉になりそうだ。

（夢童子自体に対した戦闘力は無いが、素人が勝てる相手ではないぞ）

「D A M A R E じゃなくて男にはやらなくてはいけない時があるんです。例えばトラウマを見せられたり天敵を見せられたときなんかは」

（天敵ならば普通逃げるじゃろう）

「俺にとってあいつは天敵ですが立ち向かわなくてはきつとこの世界にいないはずのあいつの影を消すために必要なんです。」

そこまで言ったところで俺の視界は急に暗闇に包まれた。次いで膝の力が抜け、体を支えるべき力を失い、前方方向へと倒れる。

（ふむ、そうか。ケルベロス殺れ。手遅れにならんうちにな）

「がっ！！」

ケルの声が聞こえ、隣を何かが通り過ぎた後すぐに真っ暗になった視界が元に戻った。元に戻った視界に飛び込んだのは木の幹だった。そりゃあもう視界の大半を覆い尽くすほどの至近距離だ。

（夢童子は相手に幻覚を見せたり視界や動きを奪う。説明するのが遅れたの）

「遅く、なんか！！！！ない！！！！」

俺は目前に迫る気を避けるべく無理やり体をひねり頭の激突を避ける、だが腕は頭の激突を回避することを優先した結果避けることができずに激突する。痛みには顔をしかめるが、問題はその後。頭から倒れることを避ける方法だ。

「うん、むり」

クスツと穏やかな笑みを浮かべながら俺は頭に鈍い衝撃を受け、気を失った。

とある王宮兵士の愚痴語り(前書き)

新たなる犠牲者・・・

## とある王宮兵士の愚痴語り

うす、俺おっちゃんの名前はゴドウエル＝マクスタ、やる気のあった元王宮直属騎士団所属のエリートだ。

お告げで今俺がいるこの場所でこの時間にテキトーに自己紹介したりなんかしろってお告げが来たからここにいる。周りに誰もいないから一人で空気に向かってしゃべってるやつだが、誰かに見られれば確実に精神病か何か疑われるだろうな。いつそ疑われてもいいんだがな。

自分でもなに夢で言われたことをマジでやってんだがわからんが、偶には奇行に走ってみたって時もあるもんさ。

・・・ああ、なんか話さないと、つってもおっちゃん会話スキル低いからまず無難におっちゃんのことにはなさせてもらおうか。

おっちゃんの身長は大体183cmスリーサイズは測ってないからわからん。ちなみに年は23だ。彼女募集中。生まれはフツ大陸・・・この世界ウーにある3つの大陸の内の一つだ。

つっても人間が住んでんのはこのうちの3つのうち2つだけ何かな。おまけに俺達人間の住んでいるもう一つの大陸は魔物と戦争真つただ中だし。

ま、それを終わらせるために3カ月ほど前に異世界から勇者様を召喚したわけだし、俺はその当時やる気に満ちあふれている王宮直属騎士団 黒薔薇騎士団に勤めていたわけだし。あの頃はまだ見ぬ希望に夢をさせていたわけだ。

俺が希望を失ったのは3か月前・・・勇者様が召喚されてからそう日が立たないうちだった。召喚された勇者様の名前は空・・・神宮

司空、女だ。それもとびつきりの美人だった。だがあいつは全力で百合趣味だった。その厄介さは容姿などを上回って有り余るほどだった。

まず召喚されて2日目で俺らの心のアイドルだった王女様が、口説き落とされた。召喚したのは王女様だし俺たちはせいぜい世間知らずの王女様が召喚されてきた勇者様に懐いた程度にしか考えていなかった。少々行き過ぎていたけどな。

それでも、普段から王女として振舞うことを強制されている王女様なら仕方ないかとも思っていた。それにいつもよりも笑顔が輝かしかったから俺たちはそれを喜んでいて、喜んでいたんだ……。

異変に気付いたのはだいたい一週間後、侍女たちが勇者様についての雑談を交わしているのが偶々聞こえてきた時だった。その声はやけに黄色いもので、少し気になった俺はその場で立ち止まり辺りをうかがいながら気配を殺し盗み聞きした。

そして知ったのは驚愕の真実……勇者様、いや奴は城の中でも特に美人or可愛い奴を手籠めにしているという真実を。

その話を思い出すたびに俺は深いため息をつく、今まで俺は恋愛には興味を持たず自分自身が強くなることとその他諸々にしか興味を持ってなかった、ああでもアイドル趣味的な物はあったから王女様ファンクラブに入ってる、1カ月と3週間ほど前に退会したがな。

流石にこれ以上続けていると自分がみじめ過ぎると感じたよ、決して叶わない恋をする自分に酔うだとかそんなわけじゃないけど、自分の中の何かが惨めだと感じた。

別に俺は王女様が幸せならそれでいいんだ、元王宮直属の兵士としても、元一ファンクラブ会員としてもあの人には幸せでいてほしいとは思う。だけど何かが違うんだ、確かに王女様は幸せなんだろうがなにか納得できないんだ。

あ、そうそうこの国の名前はヴェリア・・・まあ覚えなくてもいいことだ。だから俺の少し前までの肩書きはヴェリア王国直属黒薔薇騎士団所属ゴドウェル・マクスタだ。

黒薔薇騎士団つうのはさつきから何度も言ってる通りだ、もう一つ白百合騎士団つーのもある。違いは黒薔薇が男性のみで構成され、白百合が女性のみで構成されてる。ことくらいだ。だからまあ、この3ヶ月間で見事勇者様の毒牙にかかっているんだよ、やってらねえよ、ほんと。

なんか知らんが白百合騎士団で美女揃いなんだよな、こっちはむさい男ばつかでなんか知らんが隊長とか副隊長とか実力ある人はやたらイケメンだし。世の中不公平だとは思うが異を唱えたところで何も変わりはない、むしろ状況が悪くなる、イケメンや美女が正義の世の中なんだよねえ。

まあこれだけだったら俺は今まで通りやる気のある王宮直属騎士団の一隊員として多少やる気が落ちつつもがんばる予定だったんだ。俺がやる気を失い騎士団の肩書きまで失った理由をこれから話そう、おっちゃんの愚痴だから聞いてくれる奴だけ聞いてくれ。どうせ空気に向かって話すだけだけだな。

結果だけ言うならば栄転した、とえばいいか・・・男の俺にとっては絶望しかないがな。まあ、勇者のお仲間なら名誉だけならば最上位クラスだろうな。

何故俺が勇者のお仲間などという大任に選ばれたのかは理由はあるとせばあるのだが、そこまで強くは無い。

・・・俺の家は昔貴族だったらしい、いきなり語り始めてスマン、こつでもしない限りひたすら愚痴になりそうだったから無理やり始めさせてもらった。

貴族だったらしいのだが俺が生まれたころには既に貴族の位なんて



なかった、俺の曾ジジイの代で何やらヘマをしたらしく剥奪されたんだとさ。簡単に言ってしまうえば昔は金を持っていましたが今では日々の生活を送るのがやっとの生活までランクが落ちましたよってことだ。

それで、生活が急に苦しくなった我が家だが、俺のジジイが死に物狂いで働き、なんとか人並みの生活ができるまでに持ち直したらしい、曾ジジイはショックで寝込んでばかりと逝ったらしい。んでジジイの娘である俺の母だが、俺の親父と結婚して俺を生んで、生活が困り始めたからまとまった金を手に入れるために親父と一緒に危険な仕事にいつて、そこで死んだというわけだ。

この時俺の年齢実に3歳、親のことなどほとんど覚えていないまま俺はジジイに預けられた。

そして預けられた翌日からジジイが強くなるのじゃだとかふざけたことをいい、ひたすらに扱かれた。おそらくジジイは俺に親の死を乗り越えてほしかったのだろ、だが俺は当時3歳だ。親の死を理解できるはずがないし、成長していくにつれて小さなころの記憶は失ってゆく。10歳になるころには親の記憶など全く残っていないかった。

つまりはジジイのしたこと気遣いはまるで無駄。扱かれ損だ。でもまあ、そのおかげで俺は今それなりにいい暮らしができていたから文句は無い。ただ数少ない趣味が剣と魔法の特訓と王女様ファンクラブやその他ファンクラブというのはやるせない。

・・・ああ、そうだ。ジジイが事あるごとに御家再興の悲願を語っていたからそれも入れといてやるか、趣味じゃなくて目標だな。ジジイがよくそれを語っていたせいで俺は勇者のお仲間に入れられたわけだな。魔王を討伐し帰ってくれば再び貴族として再興させてやるだとかな。

俺にとつてはそれがどれだけのものかよくわからんがジジイを釣るには十分だ、これまで育ててくれた大恩あるジジイに恩返しすべき

かどうか迷っているとジジイが聞いた瞬間に快く返事をしやがった。あとでボディーブローを決めておいた。

しかも返事をした相手がこの国で一番偉い国王の前だったのでいまさら撤回はできない。それにやりたいというやつもないというのが困りものだ。

さて、ここで俺以外の勇者御一行を紹介しよう、まずは異世界からの来訪者無類の女たらしの女好き 職業女たらs・・・勇者 神宮 司 空 続いてこの国の王女様俺の元心のアイドルそして空の毒牙にかかった最初の犠牲者 王女ユーネ 続いて黒薔薇騎士団と双壁をなすもう一つの騎士団白百合騎士団最強とも歌われる深紅の戦士 城薔薇騎士団副隊長ルサルカちなみにまだ20歳らしい。マジ天才・・・と俺の4人だ。補足するならば俺以外の2名はすでに攻略されているということか。そのせいで誰も名誉あるこの人につきたがる人が少ないんだ。いても勇者様と王女様とルサルカ様が弾くしな。全員が女のパーティーというのも男が情けないと思われそうなのでせめて一人はということでは俺に白羽の矢が立った。選んだのは勇者様。

あの人の情報網でなぜか俺が王女様ファンクラブをやめたことを突き止め、それだけの理由で俺が選ばれた。その後に対面で対面したんだがそんな時に異世界の話を聞かせてもらったんだがその話に出てきた幼馴染、そいつも相当苦労してんだろうな、いや、どんな目に合ったかとかは知らんが、同情した。こんなやつコンプレックスの近くにいたら劣等感感じまくりだろう。ああ、これから俺がその苦労を味わうんだらうなって理解したよ。

俺の旅に必需品はアイマスクと耳栓になるだろうな。失くしてもいいようにとかでいくつか予備持っていくか。

ここまでおっちゃんの愚痴に付き合ってくれてありがたな、じゃあ

行ってくるよ。ああ、そうだ。何も無い空間に話しかけるよりはなにかあったほうが気分的に楽だろう。王都出る前にどこかで人形買っ  
ていこうか……

就職活動・・・スタートorz(前書き)

主人公は堕ちず、生を全うできるのか・・・

## 就職活動・・・スタートorz

「おーちゃんど〜」

「がっつ〜」

「の魔法教室〜（わんわんお）」

「までい！？話しについていけない、つかケルはがう以外に発音できたのか！？！？でももうわんわんおは二度とするな！！！」

・・・どうも、開幕いきなりの急展開についていけないながらもツッコミを頑張りました。ついでにおーちゃんの肉声は初めて聞きました、どうやって発声してんだろ？

（ふむ、好奇心から妾らしからぬノリをやってみたが、妾らしくないの）

すぐに念話に戻りました、それと魔法の知識は興味ありますが、一般常識教えてくださいよ。

「あなた方との出会いはそりゃあもうインパクトが強かったですからね、違和感ばりばりですよ」

（ほほう、し〜）

「ストー〜ップ！！全然関係ないですからね、あなたの思っているそれはいっさい関係ないですからね！！いい加減そのネタから離れてくださいね！！！」

(妾としては隆盛がどのような趣味であろうとも構わぬのじゃがな、男女間の性交など種を絶やさぬための行為にすぎると妾は思う、故に種を、己が遺伝子を後の世に残したいと思わぬのならばこの出来ぬ関係であろうともよいと思うのじゃがな)

・・・あれえー、どうしてこんな話になってんの？あくまでネタですよね？本気になんてしてませんよね？俺が獣に欲情したり男に欲情するだなんて。どうしてそう本気と受け取っているような発言してるのですかね？

(安心せい、子が欲しければ妾の力と妾の知り合いに頼んで生まれせてやる、どのような異形だろうとも主らが愛をそそぐ限り妾が守りとおそう)

全俺がそれを想像して泣いた、もちろん悪い意味で。

いやまてよ、もし俺とケルの子ができれば、それは皆が妄想してやまない獣人っ子ではないのか？

(・・・突っ込んでいいかえ？)

「はい？」

どこに突っ込む要素があったのだろうか？

(駄目じゃな、こやつかんぜんに手遅れじゃ。妾の思う以上に狂うのが早かったの。)

「がう／＼／／」

(これ、お前は照れてるでない)

俺の言葉を聞いて、ケルは照れた、犬だから分かりづらいはずけどすぐにけど分かった。すぐくわかりやすかった。

「……………?!?!?!」

そうか、今気付いた。俺は……妄想してしまったのだ、ケルと俺の禁断の恋を……恋じゃなくても3大欲求の一つである欲望の一つをケルに向けてしまったのだと。

(自分の娘を犯すという間違いには気付かないのかえ?)

……俺はもう駄目かもしれない。いや、かもじゃなくて完全に駄目だな。ああ、一週間後にはソウルブラザーに会えるんだ。人間に会えるんだ。

俺は希望を胸にこの一週間を耐えてゆく、たとえそれが現実から目をそむけるだけの逃避だとしても。

うす、前回ぶり、おっちゃんだよおっちゃん、元やる気のあった王宮騎士だ……ゴドウエルだ。

俺は今ポニータと呼ばれる馬型の魔物に乗っている。魔物と言ってもあくまでそれは人間が定めた広義的な意味で当てはまるだけで非常におとなしい魔物で、こちらから危害を加えたりしない限りこちらに危害を加えることもない、上手く躡れば今の通り馬車だって引いてくれる。

馬車を引いているポニータの数は2頭、馬に乗っているのは俺一人後に3人は馬車の中でよろしくやっっている。

・・・そうだな、丁度いいし今日は魔法について軽く紹介しよう。何故ちようどいいかは後で言うから待っていてくれ。

魔法というのは・・・そうだな、自然的なことを不自然に起こすといえればいいか？わからん。万能だけど万能ではない・・・まあそんな感じ。

不自然なことを不自然に起こすことはできないから何も無いところから金属を出したり何かを作りだすことはできない、例えば水系統の魔法を使う場合は待機中の水分やら水素と酸素化合させて水を作りだしてそれを操る、無から何かを作りだすことはできないってことだ。

・・・ああ、説明とか苦手なんだよな、そうだ、ほかにも例を出すのが一番だな。

火だ！火を例に出そう。火が燃えるために必要な物はなんだ？酸化反応を促す 熱 酸素と結びつく 可燃物 酸化反応をおこす 酸素 の3つの要素だ。

魔法で火を生み出せるのは酸化反応を促すために必要な熱とかその他諸々の代替えを果たしてくれるからというわけだ。だから魔力供給が止まれば火は維持できなくなり消える、魔力で維持されていた日だけはな。

基本的に魔法はそんな感じで物質は生み出せないが、一時的にその



代替品になつてくれたりする。

ほかにも例外的な使い方として、相手に精神干渉したりとそういう使い方もできるんだが、それにはそれ専門の魔方陣を汲んだりしないといけないから、使える人は少ない。勇者様と王女様は使えるけどな。

・・・ここまでおっちゃんの話しに付き合ってくれてありがとうな、おっちゃんの浅学じゃここ等が限界だ、どこぞの誰かがもっと詳しくやってくれりゃあいいんだが、おっとこれは禁句か。

それで、おっちゃんがこんな話をはじめたわけだつな、馬車の中で勇者様と王女様達が入っているこれだけでいえば分かるか。最初に語っていたようなもんだが、どうでもいい。防音の魔方陣を王女様がくんでるから音は漏れないが馬車が時々揺れるんだよねえ。

「なあ、どうすればいいのかな？ひーちゃん」

俺は手に持った人形・・・ひーちゃんに話しかけた。笑いたきゃ笑え23にもなつて人形に話しかける俺を・・・それとありがとな、俺の独り言に付き合ってくれて。おかげで時間を潰せたよ早く終わるといいな。後ろで起きてる出来事がよ。

（魔法についてはこんなところでもいいかの？ケルベロスのあの炎も魔法の一種じゃ。妾達の体の大きさを変えるというのは後で説明した例外の魔法じゃな。）

「人化の魔法を是非！！」

「がっ！！！！」

俺は人化の魔法を使ってももらえるように、ケルは・・・わからん。

（人化の術は確かに使えるが・・・妾は使うつもりはない、ケルもあまり無茶を言うでない、人化の術は体を作りかえるようなもの、今妾らが使っているのはあくまでも元の体がベースじゃが、人化の術はそうではない。力は著しく落ちるし習得にも時間がかかる、全くメリットは無い）

「くうくん」

（やめぬか、おそらく習得して使いこなせるようになるまで10年はかかる。それまでには隆盛も想う相手を見つけておろう。つまりはそんなことをしても無駄なのじゃ。それと隆盛よこんなにこの娘はお前に尽くそうとしてくれているのじゃ、男冥利に尽きるというものじゃろっ）

そうか、ケルの人化は無理か・・・残念だ。いや嬉しいことだ、俺の理性が持たないからいいことなんだ。俺は人間の女の子と・・・やばいトラウマを思い出す。女の子と付き合いたいけど女の子と付き合うことにトラウマを抱えている、なにこの矛盾。

それでも、俺は人間の女の子が、妥協しなくて人型の女の子が良いです。

「ああ、うん。ありがとなケル、でも無理はしなくていいから」

俺は優しくケルの毛をなでる。ケルは気持ち良さそうに目を細め、なぜかおーちゃんが俺の体に巻きついてくる。

(妾も隆盛のことは気にいつておるぞ、主との子ならば産んでもい  
いくらいじゃ。普通は出来ぬがな)

「じゃあ人化してください」

(それとこれとは話が別じゃ。偽りの姿で落としたところで主は八  
岐大蛇である妾をみないであろう)

俺がいくら人化を迫ってもおーちゃんは頷いてくれなかった。俺は  
魔法使いになろう、その上の賢者を目指そう。

そうすればきつと心は正常なままの人間でいられるはずだから・・・

(ケルベロスと性交をし、その果てに自分の娘を犯すところまで妄  
想したやつが何を言うのじゃ)

・・・まっとうな人間になろう、うん

ある日 森の中（これから）住む家を 壊された

やあみんな、僕は町一番の嫌われ者イクスだよ。

一回の過ちを犯しただけで、町一番の嫌われ者になってしまっただけの善良な一般兵士さ。自分でも過ちだと理解しているけど、反省は無い。自分は何らおかしいことをしたとは思っていないからね。

やったことを事実だけをあえて悪く言うと、弱った女の子に全力で殴りかかった・・・勝敗は引き分けだね。

主観を交えていえば、腐れ縁の理不尽でワガママ幼馴染に一矢報いたって感じかな。

結局何が悪いと言えば、あいつが悪い、100%あいつが悪いのだ。あいつが俺に関わらなければ、あいつが俺の幼馴染でなく、僕があいつにとって気心がある程度知れており、理不尽をぶつけることができる（等と果てしない勘違いをしている）相手になければ起きなかったことだ。

生まれた星の元が悪い、などとは認めない。あいつが悪い。

話しは変わるが僕の住んでいる街はテオドラ大陸にあるスクネという街だ。ここはフツ大陸とは違い魔物と戦争をしているところなんだ。もともとフツにも魔物はいるし町や村も襲われているけど頻度も被害もかなり少ない。

だけどここは文字通り戦争とっていくくらいの頻度で魔物が襲ってくる。町を出れば高確率で魔物に遭遇するし、ほぼ100%襲われる。例外もいるけど滅多にいないからこそ例外だからね。

正直に言う、この町は限界だ、後2回でも大規模で魔物が襲ってくれば壊滅するだろう。

いつ襲ってくるかわからない魔物達、攻勢に出ることのできない防戦一方の戦い、限界なんだ。皆疲れ切ってしまったている。

今はまだ、フツ大陸の方で勇者様を召喚したという報告があったか

ら、活気があるがそれでも厳しい。だから町のみんなはあいつに頼って勇者召喚のまねごとをした。

現れたのがソウルブラザーだった。あいつとは面識もなにもなかったが魂でわかった、ソウルブラザー。

熱き魂ソウルブラザー。・・・後ろ2体の化け物？いたかな、いなかったんだ。あれは幻覚なんだ。皆疲れてたんだよ。やっぱ限界なんだよ。

「逃げよう。俺は死にたくない。スマンなソウルブラザー。俺はもつと平和で豊かな街に行く。理不尽の解放を求めて」

「へえー、あたしを信じられないっていうの？トーシエのくせに生意気よ」

「・・・」

スツ そつと立ち上がる音

ガシッ！！ 腕を掴まれる音

ドサツ！！ そしてそのまま地面に倒される音

「ゴフッ!?なぜ・・・貴様が、ここにいる」

「流石のあたしでもまさかあんなのを召喚できるとは思ってなかったわ。さすがあたし」

スツ そつと立ち上がる音

ガシッ！！ 腕を掴まれる音

ドサツ！！ そしてそのまま地面に倒される音

・・・殴り合い？魔力が回復しきっているこいつに勝てるわけがない。

よし、なんだか知らないが魔力について語らねばならない気がする。とりあえず隣存在を無視して話そう。

魔力とは魔法を使う際に使用する生物全てが持つエネルギーだ。どこから捻出しているのかは解明されていない。

そしてその魔力は個人によって保有量がかなり違う、正に才能の世界。

魔力は基本的には飛び道具みたいなものである魔法を使うがどういう理屈かは知らないが体にまえば身体能力が上がったりもする。つまり魔力＝強さみたいな等式が出来上がっているのだ。

そして俺の隣にいる奴は天才俺は凡人それだけだ。それだけであつてほしい。だから間違つてもこいつと僕が幼馴染なんて事実はある得ないんだ。

「それで、逃げるってどういうこと？」

「こんなところにいられるか！！俺は逃げるぞ！！っていうこと」

「めっちゃ死亡フラグじゃん」

「僕は死にたくない」

「あたしの召喚魔法が信じられないっていうの？」

僕の隣にいる奴、は僕の幼馴染の魔法使い、ジュジュは子供のよう  
に頬を膨らませる。みる人が見れば何やらよくわからないことを叫  
びそうな可愛さだが、僕はそうとは思わない。

「あれを見て信じられるような太い精神なんてない、むしろあれに  
恭順して庇護を求めたいね」

「ふん、あれは私が召喚したんだからあれは私の命令に逆らえない  
のよ」

ジュジュは子供が意地を張っているみたいに強情さをにじませて言  
う。だけど僕はそんな設定は知らない。

「俺、無事に街につけたらそこで彼女作って結婚するんだ。それじ  
ゃ、俺荷造りするから」

「ふ、ふざけんじやないわよー！！！」

ボコスカバキ 僕は死んだ、スイーツ（笑）

「おーちゃん、これ全然質素じゃないよ？」

（何を言うか、大きさ的には小さいじやろう）

「でも全然質素じゃねえよ」

「わん」

「ほら、ケルも言ってますよ」

「ケルベロスの言葉が分かるようになったか、よいことじゃ」

「いえ、全然」

今俺の目の前には一戸建ての家がある。大きさ的にも形的にもおかしなところは無い、強いて言うなら立地条件が森のど真ん中というくらいか。

だが、なぜか目の前の一戸建ての家は黄金色に光り輝いている。

「純金製じゃ」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！！果てしなく無駄遣い！！！！そしてこんなところ恐れ多くて住めないし、目に悪そう！！！！」

金閣寺ってレベルじゃねえぞ！！おーちゃんあなたどれだけ贅の限りつくしたんだよ

（安心せい、あれはただの飾り、置物じゃ。本物はあちらじゃ）

俺はおーちゃんがみている方向に視線を動かす。

普通だ、都心部ではなくて、少し田舎の地方の都会から少し離れたところにあるようなそんな一戸建ての家。



「隆盛の好みそうな家を召喚してみた、これで良いじゃろう」

「もちろんです」

ズシン、ズシンと地鳴りがするような音がどこからか聞こえてきた

(じゃが、問題としては、この程度の作りではこの森の魔物ならば  
いともたやすく壊してしまうところじゃの)

グシャー!!!

俺のマイホームになるはずだった家は目の前で緑色で巨大な何かに  
踏みつぶされた。見上げてれば20mほど視線の先に家を踏みつぶ  
した何かの顎が見えた。

(あ奴はアースドラゴン、空を飛ぶことができず、代わりにひたす  
ら巨大さを求めた哀れな知恵無き竜よ)

「ウオオオオーーーーー、俺の家が!!!俺の家がああーーーーー  
|!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(気にするでない、家ならば妾がいくらでも召喚しよう。それと隆  
盛、飯はどうするのじゃ？妾とケルベロスの分はすでに準備してあ  
る、後は主の分だけじゃ)

ンーンンーン!!!となぜか崩れた家のほうからまるで猿ぐつわを  
された人が必死に助けを求めるために叫ぼつとしている声が聞こえ  
た。改めてみれば、崩れた家の中心部だけが结界をはってあるかの  
ごとく不自然な形で木片が乗っていた。

「今日は、いい天気ですね」

( キャッチ& amp・リリースなどせぬぞ、少し散歩してくるのがよいじゃろう。戻ってくるまでには隆盛の分の飯を取ってこよう )

「俺は何も見えていませんし、何も聞いていません。だからキャッチ & amp・リリースなんて何のことは全く分かりませんでした。今日はどうかしばらくは肉じゃなくて野菜が食べたいです」

( うむ、心得た )

おーちゃんは楽しそうな声で返してきた。

( それと隆盛、これも一つの食物連鎖じゃ。気にするでないぞ )

その後が続いた言葉は俺を心配する様な声だった。ならば言わせてくれ、やるなとまでは言えないが攻めて俺に一切気づかれずにやっ  
てくれ、と。

ある日 森の中 (これから) 住む家を 壊された (後書き)

地味にトーシエー回避けてる。

フラグを立てるときだけはトーシエは一人称を僕から俺に変えています。

僕だと何か違和感があるが

下ネタ注意・・・いや下ネタじゃない！！ただの賢者だ！！！！ついでに前書きの

ぶつちやけ の全部読む必要一切ありません

擬人化ケルたん！擬人化ケルたん！擬人化ケルたん！擬人化ケルたん！擬人化ケルたん！  
んううううわああああああああああああああああああああああああああああああ  
ん！！！！

ああああああ・・・ああ・・・あつあつー！あああああああ！！！！擬人化  
ケルたん擬人化ケルたん擬人化ケルたんうううわあああああ！！！！  
ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！スーハー！  
ーハー！いい匂いだなあ・・・くんくん

んはあつ！擬人化ケルたんの黒色の髪をクンカクンカしたいお！ク  
ンカクンカ！あああ！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ  
！カリカリモフモフ：きゅんきゅんきゅい！！

俺の妄想ないの擬人化ケルたんたんかわいかつたよう！！あああ  
あ・・・あああ・・・あつあああああ！！ふあああああんっ！！

擬人化決定だつてよかつたね擬人化ケルたん！あああああああ！か  
わいい！擬人化ケルたん！かわいい！あつあああああ！

200件もお気に入り登録されて嬉し・・・いやああああああ！！！！  
にやあああああああん！！ぎやあああああああ！！

ぐあああああああ！！！！文字なんて現実じゃない！！！！  
あ・・・小説もよく考えたら・・・

ケルたん は 現実 じゃ な い？にやあああああああ！！  
あああああん！！うあああああああああ！！

そんなあああああ！！いやあああああああ！！はあ  
あああああん！！うわあああああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ・・・え！？見

…てる？妄想内の擬人化ケルたんちゃんが僕を見る？

僕の、僕だけの擬人化ケルたんが僕を見てるぞ！擬人化ケルたんが僕を見てるぞ！僕だけの擬人化ケルたんちゃんが僕を見てるぞ！！現実の擬人化ケルたんちゃんが僕に話しかけてるぞ！！よかつた…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！僕には擬人化ケルたんがいる！！やっつたよ魔王様！！ひとりのできるもん！！！！

あ、メイド服の擬人化ケルたあああああああああああ！！！！いやああああああああああああ！！！！

あつあんああつああんああ！！工、エルフ！！イ又耳いいいいいい！！僕っ子おおおおお！！！！

うっつうっつ！！俺の想いよ擬人化ケルたんへ届け！！僕だけの擬人化ケルたんへ届け！！

下ネタ注意・・・いや下ネタじゃない！！ただの賢者だ！！！！ついでに前書きの

「・・・ふう」

心地よい疲労感、急速に体から熱が抜けていくのを感じながら、俺は思考の海に没入する。

生きるとは何なのだろう？

生物の一生を簡潔に表せば、生まれて、成長して大人になって子を産み、育て、死ぬ。そしてその生まれた子も成長して大人になり子を産み、育て、死ぬ。

そのサイクルを世代を経て繰り返し、その繰り返しの中の一つが生だ。

生物としてやることはこの4つでこの4つすべてを満たせば十分に生きたと言える俺は思う。

だけどそれは生物としてであり、個としてではない。

この世に生を受け、成長して子供を産み、育て、そして死ぬ。生物として、種を残す為という点で見れば十分すぎる。

だが、それは本当に生きたとっていいのか？少なくとも知能を持ち、思考をする生物にとっては生きたとっていいのか？

俺は生を謳歌したい。ファンタジーだとか非現実的なものじゃなくて、もっとありふれた人並みの幸せ。彼女作ったり、結婚したり子供を作ったりして、孫の顔を見て散々な甘やかして息子が娘に叱られて・・・

俺は生物として、子を残すために生まれてきたんじゃない、俺は俺として一つの個として生まれてきたんだ、だからこそ俺は生きることを楽しみたい。

そして辛いことも楽しいこともすべて感じる事ができる幸せをかみしめよう、生まれてこなければそれすらも感じる事ができなかつたのだから。

（隆盛よ、主が何をしよう何を思おうと構わぬが、叫ぶのはやめよ。先ほどからケルベロスが主の部屋の前で尻尾を振って、息遣いを荒くしておるぞ）

幸せなんだ、今ここで生きていることが・・・うん。

家を見た瞬間に潰されたあの日から早3日、その後おーちゃんがすぐと同じような家を召喚してくれたのでそこに住み始めた。ちなみにあの日から肉をあまり見たくありません。

（遂に妾の力を使う時が来たか、安心せい。ちゃんと子をなさせてやる）

（安心できませんしやりません！！）

（今ならば主に幻覚を見せ、ケルベロスを主好みの美少女に見えるようにしてやるぞ）

幻覚・・・たかが幻覚されど幻、五感である視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚。この中でも視覚から手に入る情報が最も多いらしい。つまり視覚でだまされれば、脳も騙されたも同じ！！いや、幻覚って視覚よりも脳をだましてるんじゃないか？とかそう思ったりはしていない。

（他の者から見れば見事に獣姦じゃな、）

「がう！！！！」

がちや

部屋の外でケルの吠える声がある。俺は勇気を振り絞り、扉を開く。

「がう！！！！」

今俺の目の前には俺よりも一頭身分くらい背の低い、ちょうど頭が俺の肩の位置位の身長で頭にはイヌ耳が生えていて真っ黒な髪の毛が腰のあたりまで伸びていて以下略

俺の妄想を具現化したような女の子がいたら幸せだといえた。だが現実是非情だ、目の前にはいつもの通り俺の膝あたりの高さまで小さくなった見つ首の真っ黒な犬、ケルベロスことケルがいた。

「謀ったな、この蛇神め！！！」  
ジャン

ケルの頭をなでながら俺は叫ぶ、こうしないと性的な意味で襲われかねなかったからだ。クウーンと鳴きながらケルは気持ち良さそうに目を細める。よし、これでケルは収まったはず。

（なんのことじゃ？妾はまだ答えを聞いておらぬぞ。ならば妾もそれに答える必要はない、それに異種族間での性交のほうが見えて愉快じゃ）

「謝って！？！？純粹に異種族同士で愛し合っている人たちに謝ってください！！！！俺は違いますから俺に謝らなくてもいいですけど」



(なんじやつまらんのう。仕方がないの、お主が自らケルベロスを求めるまで待つとしよう)

(え？ちょ！？おーい)

俺とおーちゃんの念話話一方的に終了させられた。

「・・・散歩行こう」

「がっ！！！」

「俺を(性的な意味で)襲うなよ?」

「がっ?」

こらそこ、可愛く小首をかしげようとするな。3つある時点で可愛くないからな。

ともかくケルは俺の言った意味を上手く理解していないようだ。たぶん物理的な意味でだと思ったのだろう。

「おーちゃん、少しケルと散歩してくる。間違いなんて絶対にならないからな！！！」

(隆盛、主は愛を間違いだというか？確かに愛ゆえに互いが憎み合い悲惨な結末をたどることもある、だがそれでも妾は愛を素晴らしいものだと思うぞ。愛、言葉にすればたったひらがな2文字漢字1文字じゃが、意味としては果てしなく意味は深いものじゃ。妾は主が心から愛することができる者が現れることを願っておるぞ。)

予想外な返しだ。ちなみにケルを散歩に連れて行く理由は俺一人で

はいきなり後半のダンジョンに連れてこられたレベル1の村人並みの生存率の低さだ。つまりエンカウト＝死

( ついでに妾も主の恋人候補に入れてくれても構わんぞ )

( またまた御冗談を )

むしろ冗談であってくれ。正真正銘の人外になんぞもてても俺はそこまで人間やめてない。せめて人型であってくれ。

( 妾は主の子を産みたいと思うくらいには主のことが好きじゃぞ。 )

( からかわないでくださいよ )

本来ならば恥ずかしがり、顔が真っ赤になりながら言うセリフなのだろうが、俺は一切の表情をかえずに言った。

( 本気なのじゃがな、まあよい。飯の前には帰ってくるのじゃぞ )

( 了解です )

そこでおーちゃんとの会話を終えた

「じゃ、行くつか。ケル」

「がう！ー！ー！」

ケルの森に響き渡るような返事を聞き、森中の鳥が一斉に飛び去った。辺りから急速に気配が消えていく。

「……………」

俺は誰にというわけでもなく小さく頷いた。いや、おそらく自分  
だろう。自分自身すら認識できない深層意識の中で自己弁護が終わ  
ったのだろう。

きっとこれなら御約束のトラブルは起きないはず、なぜならそのト  
ラブルを起こす生物すらないのだから……

下ネタ注意・・・いや下ネタじゃない！！ただの賢者だ！！！！ついでに前書きの

ちなみにケルの擬人化は嘘です

隆盛「謝れよ！！！！前書き読んで期待してくださった方々に謝れよ！！！！そして俺に謝れよ！！！！」

ゴドウェルは舞台裏で着々とけれども加速度的にストレスをためています。

「????????」

ケルと散歩を開始しておよそ15分たった時のこと、上空からかうじで何を言っているか聞き取れそうで聞き取れない甲高い声が降ってきた。

声につられて上を見るとそこにはおよそ10mの巨体を誇る巨鳥がいた、太陽を背おい、距離が離れているせいで詳しくは確認できないが嘴には何やら人型の何かを啣えていた。声がしたのでおそらくは生物だ。

先ほどの聞き取れそうで聞き取れない声は嘴に啣えられている者が発したのだろう。

「……そろそろ肉が食いたくなってきたな」

自分でも薄情なのだ和理解している。数日前のケルたちの食事が何かを理解してここ数日肉が食べれなかったのだが、なぜか鳥を見て肉を食いたくなってきた。

それに絶対まともな人間ではないだろうが、助ければ俺の心の癒しになるのでは?という思いもある。人型だったんだ、例えば人間じゃなくても人型なんだ……。

「ケル」

「がう!」

俺のそのたった一言で理解してくれたのだろう、ケルは何度も強調

するが頭が3つある、それ以外は普段は中型犬とさほど変わりのない大きさであり、その大きさから一気に馬並みの大きさへと変化を遂げる。

「よし」

俺は掛け声とともに地面にケルに乗る。乗り方は普通に乗馬している人みたいに上半身を立っていたりはしない。冗談抜きで死ぬ。そこで俺は考えた。ケルの胴体に抱きつく形はどうだろうか？

・・・はいどう見ても犬が好きすぎる人にしか見えません、本当にありがとうございます。

「しばらくはあの鳥に気づかれないように距離を保ってくれ」

産卵の時期は分からないがひよつとしたら今で卵があるかもしれない。俺は聞こえてくる悲鳴を無視してケルの背に乗り鳥の追跡を続けた。

「・・・あ、気絶したか」

途中で声が聞こえなくなったのでそう判断した。

「どんな地形してたよいい」

ここは森の中だ、なぜか目の前に崖がある。もう一度言おうここは森だ。俺は森から出ていない。

「昔にここで何があつたんだよ。」

なんで森の中にこんな一目見ただけで崖だ・・・と思わずつぶやいてしまうほどに崖している崖があるんだよ、高さは目測40mだ。しかもちようどよく下から崖を見上げて真ん中より少しうえらへの位置に横穴がある。ちようどよくではなく掘ったのか？賢い鳥だな。

確かにあれなら外敵から身を守れるだろう、あそこまで登れる4足歩行の生物なんて普通はいないだろうな。ケルだって崖を登るのは無理だろう。

しかも登っている間は狙い撃ちし放題。お得な物件だ。それともう一つ言うならば獲物に逃げられないということだろうな。逃げようとすればほぼ真下に20m墜ちるんだ。ただではすまないだろう。

正に天然の要塞！！おそらく自作だろうから天然じゃないか？人工じゃ人だ。だから鳥工の要塞！！訳分からなくなったから鳥製の要塞でいいか。難攻不落の要塞のようにも思えるが、ついている隙はある。無敵だと誇っているからこそより効果を發揮できる方法でな。

「行くぞ、ケル！！！」

「がう！！！」

ケルは吠えながら四肢を丸め、飛びだす体制を作る、前脚、後脚4

足が倍以上に膨れ上がり、限界ぎりぎりまで膨らませた風船の如く破裂しないかとみているこつちが冷や冷やしてくる

俺は、そつとケルから降りた。お前は何km飛ぶつもりだ。

・・・さて、ロッククライミングの経験なんざないし、道具もないけど挑戦するか。このままケルに乗っているよりもはるかに生存率は高いしな。

俺はそもそも俺まで行く必要はないか？と思いつつながらも力をため続けるケルをしり目に崖に手をかけた。

誰だ、行くその行をカタカナに変換したやつ。・・・まあいい。俺が取る方法は単純だ。相手の予想を遙かに上回る化け物、規格外な奴をぶつければいい。

どんな相手にだって慢心はある、自分自身の中に絶対があるやつはそれを誇る。ケルならばそれごとぶち壊してくれる。

そして自分の中の絶対を崩された奴ほどその後の行動は拙くなる。  
・・・うん、相手が驕っていなくても結果は同じだってわかってる。  
ただ想定外の度合いが大きいってだけなんだ。

「よつと」

俺はごつごつと隆起した硬いあれに手をかける。そしてその瞬間に大地が揺れ、耳が壊れそうなくらいの轟音が襲った。さらに追い打ちの如く弾丸のごとき速さを得た砂が俺の背中を襲う。

発生源である後ろを見ようと、砂からわずかでも体を守るため縮こまる俺に確認する術は無い。むしろ俺が気絶せずに意識を保って



いること自体が奇跡に等しいだろう。

砂弾が終わった頃には俺は地面に倒れていた。俺が冬用のブレザーを着ておらずにYシャツだけだったのならば俺はこの世にいなかっただろう。

生まれてはじめて俺はブレザーに対し防寒以外の効果に感謝した。だがそれでもないよりはよかった程度であり、背中血だらけだ。なければ死んでいたと思えば死んでいたし、このまま放っておいても死ぬだろう。

第一痛みで立ち上がることもすらできずに、小さく呻くことしかできない。

「……どうしてこうなった」

俺は最後にそう呟いて、目を閉じた。

（隆盛が気絶したか、ならば妾が操って遊ぶとしよう。意識のないただの入れ物など操ることなど容易きことよ）

気絶したったら気絶したんだ。俺は何も聞いていない。

「あそこに囚われておるのは……ふむ、木精霊か。隆盛の体を壊さぬように気をつけねばな。なに気にするでないぞ。これは妾のおせっかいじゃ。主が何も知らぬ間に主が好きだといっていた人に近い者じゃ。」

正直、男の声でこの口調は辛い。

「にしても傷だらけじゃの。脆いものよの、加減を間違えればすぐに壊してしまいそうじゃ。」

隆盛に乗り移った八岐大蛇ことおーちゃんは、その怪我で崖をよじ登る。

おそらく痛覚は機能していないのだろう、他人の体故か遮断しているのかは定かではないが、確実に隆盛の寿命は縮まることだろう。

「許せよ、隆盛。主の望むこれからの平穩のためには犠牲は必要なのじゃ」

無論隆盛の事を思つての行動とは言え勝手に（隆盛自身の）寿命を削られている隆盛にとってはたまったものではない。

彼女は隆盛の体のことを案じているし心のことも案じている。だが寿命は案じていなかった

ケルベロスことケルはいまだに上昇を続けていた。すでに地上から1 kmは離れようとしていた。重力仕事しろ。

彼女（？）が再び地上に戻る際にはすさまじい速度となり地表に激突するだろう。

頑張れ隆盛！！生き残れ隆盛！！隆盛は翌日に太陽を拝むことができるのか！！！！！！



隆盛、イクス、ゴドウェル「3人そろって『Team 理不尽の集い』だ！

サブタイ一切関係ありません。

隆盛、イクス、ゴドウェル「3人そろって『Team 理不尽の集い』だ！

「よいせつと」

おーちゃんに支配され、操られている隆盛は崖を登りついに横穴の入り口に手をかけた。

だが、その手は血まみれであり、え、こいつ大丈夫なん？と今後もちゃんと機能するかと不安になるほどにズタボロだった。

「あとで特別な魔法を組んでやるとしようかの、まずは目の前の鳥を片付けてからじゃがの」

「パイ！！！！パイ！！！！」

おーちゃんがこの横穴の主である巨鳥をにらむと巨鳥は文字通りパイパイとなく。これは怯えているのではない、威嚇しているのだ。

その姿の巨大さと鳴き声のギャップによりギャグにしか思えないが現実だ。

「その大きさを入れるためにここまで広く住処を作った努力は認めよう、恨むのならば己が運命を呪うがいい、妾とあってしまった己が運命をな」

もう一度言おう、翼を広げた時の幅がおよそ10mの巨鳥がびいびいと鳴いているのである、雛などはいない。奥に人型の生物が一体気絶しているだけだ。

「早くこの体を治してやらねばならぬのでな、そこで気絶してるふ

りをしている木妖精の少女も助けてやるゆえ安心して気絶したふりを続けているがよい」

現在進行形で体を傷つけている物の台詞とは思えぬほどその言葉には温かみがあった。

隆盛の顔の色は既に顔を通り越し、青色になってきているが、のっとなっているおーちゃんには関係ない。やろつと思えば死体すら……むしる余計な意識がない分死後硬直という点さえ除けば死体のほうが操りやすい。

流石に魔法により簡易的にはあるが止血は行っているが、砂弾による傷、いまして崖を素手で登ってきたことによりズタボロとなつて腕。魔法というよくわからないものがなければここが森の中で病院や救急セットがないことを含めてなど完全に手遅れだ。

「と、話してる時間が惜しいの。死ねい」

(え、わたしばれてる？ばれてます！？どうしましょうひょっとしてこのまま私ピーされちゃうんじゃない。ピーされてピーしてピー以下さらに妄想省略 きゅう)そして気絶した。

おーちゃんは興味のないものへ命令するかのよう言い放ち、ズタボロの腕を巨鳥に向けてふるう。

普通ならばここで隆盛の腕は折れるなりするのだろうが、今回は違った。隆盛の腕はグシャツ音を立てながら巨鳥の頭を裂き、心臓の位置まで巨鳥を裂いた。

流石にこのあたりで隆盛の腕がありえない方向に曲がった。

「さて、そろそろこの体も死を迎えようとしておるし治さぬとまずいな」

そう呟き、さらにその後によくわからない言葉を紡ぐと隆盛の体が発光した。

「しかと見ておれよ、これが魔法というやつじゃ。この光は主の体の傷ついた部分を直してくれておる。気絶しておる相手になにを言うておるのじゃろうな妾は。」

隆盛の体は光に包まれ、傷ついた部分を癒やしていく。

主にかすり傷や、打撲などダメージの軽いものは徐々に消えていくが、背中の傷や腕のダメージの重い部分はほとんど治らない。

彼の体は漫画やアニメに出てくるの宇宙人などではない、かすり傷や打撲程度ならばいいが、ズタボロになった腕などはそう簡単には治らない。

おーちゃんの力を持ってしても、治らないだろうと医者に見捨てられるレベルの者が1カ月で完治する程度なのだ。これを程度とっていいわけがないが、腕が生えてくるだとかそんな化け物にくらいべれば程度でいいだろう。

ちなみにむりやりだが治そうとすれば直すことはできるが、体がその負荷に耐えきれず普通は内から爆発する、という結果が出ている。

なので隆盛の体ははまだ動かしてはいけない領域を抜け出していないのだが、おーちゃんは構わず動かし、その足で気絶している木妖精の元へ向かう。

体に気を使ってやれよ、寿命に気を使ってやれよ。確実に隆盛の将来を削っているぞ。

「大丈夫かい？お嬢さん」

誰だお前は、隆盛を知る人物ならば意識しないうちにこの言葉を口にするだろう。

「・・・」

「チツ、起きぬか。ならば隆盛の記憶にあつた憧れのシュチエーシヨン第16位の目覚めのキスとやらを」

おーちゃんはそう呟くと、気絶している木妖精の顔に徐々に顔を近づけていく。この横穴は大人の都合により大変暗くなっているので相手の顔などは分からない。

なのでひよつとしたらこの木妖精が話しの展開的には美少女の確率が高いのだがひよつとしたら・・・かもしれない。

だが、おーちゃんはそんなことはお構いなしだ。むしろ美少女ではない方がいいとすら思っていた。

正確に言うならば、10人が10人もしくは9人振り向くような美少女でないほうがいいと思っていた。

隆盛はそんな飛び抜けた美少女と付き合いたいという想いを持っていない。まあ幼馴染にそんな飛び抜けた美少女がいたわけだし、そいつのせいで色々苦労してきたのだから当然である。

隆盛が望むのは10人中3、4人振り向く（もちろんいい意味で）ような容姿の女の子と付き合いたいと思っていた。現実的にそんな出会いはあるわけではないのでせめてブスでなければいいという想いが大きい理想はそんな感じだ。



隆盛の顔が徐々に気絶している木妖精の少女の顔に近づいていく。

隆盛の顔は真っ赤になったりはしない、そもそも血が足りないし、隆盛を操っているおーちゃんはこの程度で顔を赤らめるような乙女ではない。むしろ一片でも乙女らしいところがあるのか疑問である。

「~~~~~!!!!!!」

隆盛の顔があと数センチ近づけばという所で、木妖精の少女は目を覚ました。そして残念なことに隆盛の耳では少女の声を聞き取ることはできなかつた。

それは人間では解することのできない領域の声だった。

(チツ、まずは人型であつても人でないものと関係を持たせてからケルベロスにも、と思っていたのじゃがな。既成事実であろうとも隆盛ならば責任はしっかり取ってくれるじやろう。しかし妾とあるうものが失念しておつた。木妖精の言葉を人間が聞くことなどできぬということを)

さらに付け加えるならばおーちゃんの考えには誤算があつた、日本は一夫一妻せいだ。一夫多妻制などではない、また、隆盛は複数の女性ではなく一人の女性を愛したいと思っていた。

誰だそこ、隆盛のことを純情なチェリーボーイだとかいつたの。

「御目覚めかな？お嬢さん。」

混乱する少女をよそにおーちゃんは少女の手の甲にキスをする。木妖精が人間の言葉を解する事は可能なようで、恥ずかしさのあまりか隆盛の手を振り払い外に向かって走り出す。

ここは崖に穴を掘り作られた場所だ。外に出れば当然のことながら

重力に従い落ちる。

「すまぬな、隆盛。今再び主の体を酷使用するぞ」

横穴から落ちる少女を見て、隆盛に詫びるようにおーちゃんは呟いた。

隆盛、イクス、ゴドウエル「3人そろって『Team 理不尽の集い』だ！」

イクス、ゴドウエル「俺の出番マダーーーー」

イクス「・・・」

ゴドウエル「・・・」

ガシッ 熱い抱擁

やったね隆ちゃんハーレム増えるよ!!! (前書き)

隆盛は次回から特殊能力に目覚めるようです (予定)

やったね隆ちゃんハーレム増えるよ!!!

「大丈夫かい？ハニー」

誰だお前は。

隆盛に憑依したおーちゃんは、落ちる木妖精の先回りをし、下で受け止める。

「よかったよ、こんなにも可愛らしい子が俺の目の前で気づ付くなんて耐えられないからね」

いやほんと誰だよお前。これ以上隆盛というキャラを壊すな。

「~~~~」

木妖精は声にならない声を上げ、顔を真っ赤に染める。もとより聞き取れないので違いはよくわからないが、心なし高めな気がする。

「怖かっただろう？もう大丈夫だ。安心して御休み。」

そう言われ、木妖精は安心したかのように目を閉じ、すぐに寝息が聞こえ始めた。普段の彼女ならば人間を見た時点で逃げだすなり警戒心を全開にするのだが、命の恩人で口説かれたとあってはその警戒心はどこかへ行ったようだ。

別の警戒心が出てきそうではあるが、それは吊り橋効果みたいなやつというところで。

「さて、では脚を治療せねばな」

木妖精が眠ったのを確認した後に、おーちゃんは隆盛の脚を見ながら呟く。

その脚は血だらけだ。

先ほどの飛ばされた彼の行動をたどってみよう。

まずは、木妖精の少女が目を覚まし、隆盛から逃げるために横穴から飛びだし、落ちた。

だがその落ちた先には既に隆盛が先回りをしており、キャッチ。

常識的に考えて、先に落ちた少女を、落ちるのを見届けた隆盛が先回りしてキャッチするのは大きい。第一人間大の落下物を怪我をしている状態で平然と受け止めること自体がおかしいがそちらは置いておくとしよう。

なので、ここで隆盛も落ちたという普通の考えは遙か彼方へと吹き飛ばす、ではどうやったか？

答えは”走った”のだ！！崖をほぼ垂直な崖を下方向に！！！！人間業じゃねえ、まあ体を操ってるの人間じゃないしいか。代償に脚がズタボロになっているわけだし。

「そつえば明日再びあの街に行かねばならんのじゃったな・・・隆盛がただの人間ではなめられるであろうし、改造でもしてやろう

かの

全力でやめて上げてください。

(オウ、ファツキュー!!!)

僕の名前はイクス、簀巻きにされ生贄にされようとしている哀れなやつなんだ。目の前には簀巻きにした張本人、この町最強の実力者ジユジユと町の人々。

逃げ出すことはできない、ただ明日の生贄にされるだけ。

そもそも何の生贄なのか？つい先日この町に化け物が来たんだ、それとソウルブラザー！。

彼らは言ったんだ、町を守ってやるから飯よこせ。俺は逃げる決意を固めた。

ソウルブラザーとはゆっくりと話してみたいが、あの化け物たちは無理だ。それに僕たちはまた会える。あつたのは一瞬だけどそう直感したんだ。

だから僕は逃げる、死にたくないからだ・・・と一人決意をしていたところを奴に聞かれ、拘束。今に至る。

「いいか、お前はこの町の未来はお前にかかっているんだ」

僕の父さんが必死な形相で言う、実の息子に向ける顔じゃない。

「というわけでよろしくね」

と母さんが言う、これもまた実の息子に向ける顔じゃない、笑顔ではあるんだがその裏側は汚そうだ。

「父さん、母さん。僕はあなたたちの息子で幸せでした、それとも明後日までこの命が持っていたらこの町を出るんです……」

「そうか、止めはしない」

「好きにきなさい」

……グレよう。父さんと母さんは止めようとすらせずに僕の思いを肯定してくれた。グレよう。

「なあ、ひーちゃん、俺どうすればいいかな？」

俺、ゴドウェルは、湖の畔で満天の星空の下に寝ころぶ。馬車はほかの3人が使用中だ。風邪をひかないように、凍死しないように対策はしてあるが心が寒い。



癒やしはひーちゃんと

「ブルル」

ポニータと呼ばれる馬車をいつも引つ張ってくれる馬型の魔物だけだ。

「そんな、空様。野外でだなんて／＼」

戻るか、馬車の中に戻るとするか。草の上に寝そべりっ手目を閉じようとしたところで少し離れたところからそんな声が聞こえてきた。

「よいではないかよいではないか」

ノリノリか、勇者様ノリノリだな、それに姫様も。

「ルサルカも可愛がってやろう」

「御姉さま／＼」

・・・もういやだ、この旅、このパーティー。最初のころは姫様もルサルカ様も俺を汚物を見るような目で見てくる。

そんなに同性が良いか、同性愛者どもが。人の趣味にとやかく言うようなことはしないがだが無関係な俺に当たらんであらう。

どこで俺の人生がこんな心が折れそうなイベント盛り沢山なルートに入ったのか。

どこかに俺のこの苦難を分かち合える奴いねえかな？勇者様の言っていた幼馴染とか・・・

俺はそんなことを思いながら勇者様のいる方向に向けて小さく舌打ちをして、馬車の方へと向かっていった。  
久しぶりに星空の下ではない、寝床で寝られる気がする。まだ旅初めが一週間たってねえのにな。  
俺は五感を鈍らせる魔法を自分自身にかけ、馬車の中へと入った。  
理由は察してくれ。

「成功したぞ」

「がっ?」

おーちゃんは死んだように眠っている隆盛の前でケルベロスに成功を報告した。

もちろんこの場合の成功とは隆盛を回復させることなく、改造することだ。

「気になるか?起きてからのお楽しみじゃ。それとお主はもう帰ったらどうじゃ?」

「~~~~~」

おーちゃんは物陰に隠れている木妖精の少女に話しかける。言葉は聞き取れないがおそらく帰らないということと言っているのだろう。そしてその視線は隆盛へと注がれている。少女は隆盛に助けられた

ことにより隆盛に憎からぬ感情を抱いたのだろう。

少女の緑色の肌は、緑色の頬は少し赤みを含んでいる。

隆盛爆発し「……いやしなくてもいいか。」

やったね隆ちゃんハーレム増えるよ!!! (後書き)

なんでさあ、もっと簡単に隆盛はハーレム要員追加させていくつもりだったのに無駄に伸ばしてしまうのだろう。

最初の予定では全体的にもっと短い予定だったのに・・・

魔王「俺の出番まだですか？」（前書き）

一生ないんじゃない？

魔王「俺の出番まだですか？」

目を覚ますと視界は黒と緑一色だった。

黒はケル、緑は全く分からない。ただ分かるのは今の俺の状況を一切理解できないということと、息ができないということだけだ。

「クウーン」

ケルが心配そうな声を出しながら顔を舐める、緑色の人型の物体はなぜかよくわからないが俺の体に抱きついてくる。状況説明プリーズ

視線をそちらの方へ向けて、観察してみる。

緑色の少女・・・体制的に見づらい。まずは状況把握からだ、なぜか視界がやたらと明るいし、微かに自分の目から熱を感じる。

（妾の出番かえ？）

（イエス、お願いします）

（言葉にするにはめんどくさい故記憶を移す。妾がお主の体を使っていた故お主視点じゃ。問題なかつた）

（え、あなた何やってくれやがってんですか）

（起きていると記憶を移される時に辛いぞ？眠るがよい。それと主を改造して目が光る様にして置いたぞ。うまく使いこなせば視力と引き換えにレーザーを撃てる。レーザーが地面に着弾すればそこからさらに爆発を引き起こし、周囲の敵ごと殲滅する。何点は範囲が

広すぎ自らも巻き込むところぐらいじゃ。)

(ちょっとまって!!何に使うの!?!?.....ってあれ、何だ急に眠気が)

(ケルも木妖精の少女も離れるがよい、眠るそうじゃ。それと初回特典サービスで最初の一回だけは視力は落ちぬ、嬉しかろう?)

そう笑顔で言われましても、ていうか何してくれやがりますか。おぼろげな意識の中でそう思っても、誰にも聞こえないし分からない。

「がう!」

「~~~~」

(隆盛にこの子の言葉を解せるようにせねばな...ケルの言葉通じぬしそのままでもよいか?)

隆盛は糸に切れた操り人形の如く起していた上半身が勢いよく倒れる。だが幸いにもそこはベットの上、特に頭を打つという不幸は起きずに倒れた。

・・・よし、俺が気絶した後の事は理解できた。だけどまた現状が

理解できなくなった。とりあえずベッドの上で一週間くらい悶え続けたい。

いつの間にか俺はケルに乗せられており、意識はあるが体は動かない、おそらくおーちゃんに操られているのだろう。

まあ、それだけならいい。本当はよくないが仕方がないということにしておく。

ケルの目の前にはソウルブラザーがいる、その横には最初に要求した食料が置いてある、そういえば名前を聞いていない。それも後でいい。

なぜ俺の目は発光している、懐中電灯のように光を放っているんだ？ソウルブラザーも若干どころじゃないくらいに引いてるし

「ああ、確かに要求した食料を受け取った。なかつたらお前ら全員皆殺してたところだ。」

俺の口から出ているが俺の言葉ではない、おーちゃんが俺を操っているのだ。

それでもさつきから目から光を放っているので得体にしろえないもの  
＝恐怖の対象の図式を完成させている人類には相当な危険人（？）  
物扱いだろう。

だけどそれでも！ソウルブラザーなら！！俺じゃないってわかってくれるはず！！！！

（分かってるよ、ソウルブラザー）

（その声は、ソウルブラザー！？）



奇跡とは起こるからこそ奇跡と呼ぶ、起こらない奇跡などただの願望でしかない。

(あと、僕の名前はイクスっていうんだ、イクスって呼んで)

(そうか、イクス。だがその手首の縄の後はなんだ?)

(少し・・・ね。それと僕は今日君達との交渉が終わったらこの町を出るんだ。もうここにいるのが辛くて仕方がないんだ)

(・・・そうか、寂しいな。だけどそれはお前が決めたことなんだろう?逃げる覚悟を決めたんなら俺は応援するよ)

2人は心を通わせ、2人だけにしかわからない会話をする。男同士で熱血ものでもないから純粹に気持ちわるいとか思ったりはしてはいけない。

(だから、僕はここを出ていくんだ、邪魔をしないでくれ)

(それはどういうことだ?)

(妾らとまともに会話できるのがこやつだけということじゃ、ほかの者は皆怖がって近づけぬがこやつは怖れながらもここに立っておる。何かあった際に残しておくのが普通じゃろう)

(――!?!?)

(主らが会話できるようにしておるのじゃ妾じゃ、奇跡だとも思ってたか?)

( (すいませんでした) )

2人は同時に心の中で頭を下げる。

「確かに要求した食料は頂いた、そちらが約束を果たしたのだ。こちらも果たそう。といったところで信じてもらえぬということは分かっている。」

隆盛がその声を発するとざわめきがあちこちから聞こえてくる。

「だからあらかじめ証拠を用意してきた。我らが来た初日の除いて魔物たちは貴様らの町に近づいてすらこなかっただろ？ 貴様らはこの一週間で町の近くで魔物を見たか？ それを持って証拠としよう」  
ざわめきが大きくなる、おそらく近くに人と確認し合っているのだろ？、そしてその魔物が近付いてこなかったという事実を認識する。どうやって？ と隆盛も聞きたくなくなるがその前に口を動かされ、答える。

隆盛の心を呼んだわけではなく、大きくなるざわめきに答えたのだろ？

「魔物といえど生物だ、自ら死にに来る自殺願望者などいはしない。俺のような圧倒的な力を持つ物がいればよほどのことがない限り近づいてきたりはしない」

へー、と心の中で思う、でもなぜ俺といったし。俺はじゃねえよ。

「もし仮に魔物が襲ってきたとしてもそちらが約束を守っている間は守ろう、それと一つ、お前らが約束を守らなくても俺らは貴様ら

を襲つたりはしない。そちらから手を出さない限りな。」

「それで、食料はこちらでよろしいでしょうか

イクスが言う、俺はそれに無言で頷かされる。

「ああ、これだけあれば十分とおいてやろう。それと再び一週間後……いや面倒だ。一ヶ月後に一カ月分の食料を門の外へ置いておけ。こちらで勝手に回収する」

俺の言葉に遠くからみている人々が安堵する様が見える。その声に俺は少し苛立つ。

何と勝手な奴らだろうか、イクスを生贄にたて自分達は遠くからそれを見ている。なにか問題があれば真つ先にやり玉に挙げ責任を逃れようとするだろう。

俺がここでそれを言ってしまうえばおーちゃんとケルが何か行動を起こしてしまいそうなので何も言えない。こいつらが動いたら最後止められるものはおそろくない。だから

「さて、その人間よ。貴様はなかなか見事だぞ。我らの前に立つなどと思える人間はそうはいない。貴様はあの街を出たいのだろう、応援してやろう。」

俺に出来るのはせいぜいこれくらいだ、頑張れよ。心の中でそう告げる。

(おーちゃん、お願い)

(良いのか？主とは気がある奴なのであるっ？)

(だからこそ、イクスの望むようにしてやりたい)

俺はおーちゃんに懇願する、俺の懇願が通じたのかおーちゃんは頷いてくれる。

(よくわからぬが・・・まあいいじゃろう。では魔王の膝元に)

(全力でやめたげて!?!?)

俺は目から出る光量を上げる。意識してやったことではないが、どうやら感情の高ぶり等によって変化するようだ。

常時光りっぱなしは嫌だから、制御できるようにしよう。心にそう誓う。

(じゃが、普通に送るというのもつまらぬもの、魔除けの魔法をかけてどこか遠くへと飛ばすでしょう)

「ちょ、まっ!?!」

驚きのあまり、つい口から声を出してしまい、次の瞬間イクスが吹き飛んだ。

俺に出来るのは星となったイクスに敬礼することだけだった

魔王「俺の出番まだですか？」（後書き）

ふっ、貴様らなど魔王様がでるまでもないわ！！  
我ら四天王が御相手いたす。

・・・いや、お前ら存在自体してねえから。

何書いてんだらう俺・・・

ウ ドンナ・・・か、やってみようかな？（前書き）

ゴドウエル「ガタツ 勢いよく椅子から立ち上がる音

隆盛「ガタツ 勢いよく椅子から立ち上がる音

イクス「・・・スー 音をたてないように椅子を引く音

ウ　ドンナ・・・か、やってみようかな？

転移などという便利な物は無い、開始の地点と到着の地点を線を結んだ物が移動であり、点と点を線という過程をすつ飛ばして移動するなんて言うことは不可能だ。

と俺は思っている、今回は残念ながらいま語った俺の常識が覆されたということはないが、別の常識が覆された。

俺はイクスが星になったと表現した、そう飛ばされたのだ！！

何が起こったかは単純な話おーちゃんがイクスを尻尾で飛ばしたのだ、威力とか質量とか速さを見ると肉塊どころじゃなくなるだろうがそれは魔法の力？すべてが吹き飛ばす力と変換されイクスは星になった。

着地はどうなのだろうか？

（ゆけい、ケルベロス）

おーちゃんはケルに命令する、だがケルは動かない。行こうとする気が全く感じられない。いやむしろ行きたくないという断固とした意志を持っている気がする。

（こんなこともあろうかと、既に着地の準備はしてある。安心せい。もうここに用は無い、ゆくぞ）

「またいずれ会う時も来るだろう、その時までの楽しみとしていよう」

星になったイクスを見上げ呟く。きつと今頃は上昇を続けているだろう、ならば俺はその道筋を目で照らすだけだ。

「最大出力！ガンライト、200%オン！！！」

目力を込め、ライトを強くする。じりじりと目が焼けるような感覚が訪れる。

（今じゃ！レーザー発射するのじゃ）

「発射ア！！！！」

俺の目から直径にして1.5mほどのレーザーイクスの飛んで行った方向に向かって放たれる。

何も見えない、目の前が真っ白で何も見えない。つーか俺は何をした？

（外したか。運のいい奴じゃ。これで済めば良かったのじゃが、そうもいかぬか。少し出てくる。）

（さっきめっちゃ殺すつもりじゃなかった、ねえ！？）

俺にレーザー発射させたり、自分の意思でやったから乗せられた俺も悪いが、もう少して当たってたそうだし。あぶねえ、俺もう少して人殺しになるところだった。

（生きているからには助けよう、生き残った幸運を祝福してな）

ショック死するだろ、そう思っても俺はそれを口にはしない。そもそも着地時の衝撃で・・・深く考えるな、感じるんだ。

魔法とはなんでもあり、実際はそうではないがそう思わないとやっ



てられない。

「行こうケル」

「がっ！！」

おーちゃんはイクスが吹き飛んだ方向へ、俺たちは森へ帰る。そういえば木妖精とかいうあの子どうすればいいんだ？

そして家に帰り、俺はその少女に抱きつかれた。若干だが人の皮膚よりも硬い気がする。

「~~~~~」

この少女の身長はおよそ140cm俺の肩よりも少し低いぐらいの大分小柄な少女だ。髪は肩まで伸びていて、新緑のように瑞々しく元気を感じさせるような緑だ。

肌の緑は新緑とまではいかないが若々しい緑だ。

さて、諸君に問いたい。肌の色さえ気にしなければ美少女だと断言できる少女がいたとしよう、俺は緑色の肌に見慣れてなどいない、嬉しいだろうか？

答えは嬉しい。女の子に抱きつかれるなんて嬉しいに決まっている。ぜいたくを言うのなら人間と同じ肌の色であって欲しかった。

そして相変わらず何と言っているのか全く分からない、向こうは理解しているようだがこちらは理解できない、なので名前もわからず木妖精の少女のままだ。

「名前、なんて言うのかな？」

「~~~~」

やはり返事は分からない、おーちゃんも翻訳してくれないことを思うと分からないのだろう、現状意思疎通を取ることができない。というか彼女はここにいていいのだろうか？集落とかそういうのはないのか？

そう思い尋ねてみるも

「~~~~~~~~」

分からない、木妖精自体について何か調べてみる必要があるそうだ。おーちゃんが帰ってきたら聞くとするか。

(ふむ、つい力加減を間違えてしもうたわ)

ものすごい勢いで滑るように海を渡る一匹の巨大な大蛇がいた、その大蛇は頭が8つあり正に伝説上の生き物八岐大蛇だ。

そんな巨大な質量を誇る彼女が海を自身が沈まぬスピードで渡ればそれはもう酷いことが起きる、幸いなことに陸地から離れているので大陸に被害を及ぶことはないだろう・・・たぶん。彼女が大陸に近づいた時のことは知らないが港の一つが壊滅してもおかしくは無い。

そんな彼女がなぜ海を渡っているかと言えば先ほど自身が飛ばした人を無事に地面に着地させるためだ。彼女にとってその人物はどうでもいいことなのだが、現在の彼女のお気に入りの人物とは親密な関係のようなので仕方なくこのような真似をしているにすぎない。

そもそも吹き飛ばした本人が吹き飛ばされた場所に先回りしているのだから、飛ばされた人にとっては相当に心臓に悪い。そもそも空の旅をしている時点で心臓に悪いなんてものじゃない。

（やれやれ、妾ともあるうものが力加減を間違えるとは、久々じゃからのう直接相手を吹き飛ばすなどということは）

そう思考しながらも大蛇は進む、別に8つの頭があるからといってそれぞれが別のことを考えているわけではない。基本的には一つのことを同時に考え処理は早くしているだけだ。

（着地時にスピードを落とさせねばな）

いや、空中にいる時点で死んでもおかしくないと思うんだが。

234

「なあ、ひーちゃん。俺勇者パーティーやめるよ、ん、流れ星？同じ境遇の人が欲しい同じ境遇の人が欲しい同じ境遇の人が欲しい」

「ひーちゃんは頑張ってるからきつと願いは叶うよ（裏声）」

「ありがとう、ひーちゃん」

「よしよし（裏声）」

そこには人形をもち、裏声を使いわけ、一人二役で話し人形の手で

自分の頭を撫でる男の姿があった。

皆さん、メリークリスマス(前書き)

リア充には爆発を、非リア充には祝福がありますように

## 皆さん、メリークリスマス

「――それは天使だった、天より舞い降り、背には後光が射している。」

だがそれ「イケメンor美少女、美女というわけでもなく、いわゆるふつ面の青年だ。だが直感で分かった。俺の願いは叶ったのだと。そして俺は理解した、こいつは俺と同じ苦勞人だということを。」

（なんとか間に合ったか、む？何やらおかしいな気配を感じるの。少し調べてみるとするかの）

その2人の男の様子をうかがう大蛇が一匹いたが、彼はそれに気づかない。

ドサツ

およそ地上15mの位置で降ってきた男は一旦静止すると、そのまま落ちた。

「大丈夫か!？」

慌てて俺は落ちてきた青年に駆け寄る。まずは生きているかの確認だ、脈を測り、呼吸を確認する。というかやけに高いな。落ちる高さ

「生きているが・・・少々まずいな。休み場所は・・・もうやだこのパーティー」

生憎と俺の仲間が”使用中”だ。あそこに入る勇氣なんてないから

な、俺は。

入った時点で殺されても文句は言えないしのぞきで殺されましたじや末代までの恥だ。まあ俺が死ねば途絶えるんだけどな。

もし仮に殺されなかったとしてももう王女様達の最優先の行為となつている人命<<<越えられない壁<<<勇者様みたいになつてやがる。

「ブルル」

どうするかね、これ？悩む俺にポニータの声が届く。後付け設定のような名前からしてああ、やっぱりかと思われそんな気がしないでもない事だが、ポニータは火を噴いたり体温をある程度調整できたりする。

何をすればいいかは分からないが、とりあえず暖めておけばいいか。服は脱がせたりはしない。特に濡れているでもないので脱がす意味がない。

落ちてきた青年をポニータに任せした後、俺は再び先ほどの場所に戻る。

「ああ、マジでどうすつかね、旅に連れて行くわけにもいかんがないと俺の胃がやばい気がするし・・・」

俺は一度空を見上げ、視線を元に戻す。巨大な蛇が俺を見ている。

俺はもう一度視線を空に移し、目をこすり、再びもどす。

「死ぬのに未練ねえな・・・この地獄から解放されるなら。だがただやられるのは、な！！！」

俺は腰に携えた剣に手をかけ、蛇に向かって飛び出すと同時に抜刀、切りかかる。

（ほほう、なるほど。勇者御一行というわけか。それに・・・なるほどなるほど。愉快なことじゃ。）

目の前の大蛇は動かない、こちらを値踏みする様な眼で見ているだけだ。だが直感が告げる、このまま進んではいけない、戦ってはいけない、今すぐ逃げろ、と。だが、その考えを脳内から追い出し、切りかかる。

（死に急ぐか？）

大蛇の声が脳内に響いた瞬間、俺は横に飛んでいた。攻撃をする意志もそれと同時にどこかへ消えた。残るのは恐怖、今すぐにも逃げ出したいが、逃げ出した後には死のビジョンしか思い浮かばない。

（ふ、妾は危害を加えるつもりなどない。地面を這いつくばり虫けらをわざわざ潰すような趣味などないのでな。それに・・・これは言う必要はあるまい、精々楽しみにしておろぞ。ふたたび会うその日をの）

地面を這いつくばる毛虫を、わざわざ潰して歩くことはしない、直接そう言われたが悔しくは無い。努力したって勝てない事なんて分かっているぞ。

「なんで俺ってあんな奴らより弱いんだかなあ、世の中理不尽なことばっかだ」



俺は今も馬車の中でお楽しみ中の仲間3人に対し、良い感情を抱いていない。嫉妬という面も少ないながらもあり、その嫉妬の部分で愚痴がこぼれる。

(存分に悩み、若人よ。主と同じ苦労を20年近くも味わってきた者もおるのじゃからの。)

「そんなやつがいんのか・・・じゃあ俺はまだ楽な方なのかねえ？  
会ってみてえな」

(旅をしていれば、会うじやろう。いわゆるイベントとしての)

「おつかねえな、ぜひと戦闘有りのイベントにはなってほしくねえ。んじゃ俺はそろそろ戻るよ、」

(ククウ、足が震えておるぞ。怖いのじやろう？今すぐに逃げ出したのじやろう？構わぬぞ、妾も帰るとしよう)

大蛇はそう言って身をひるがえす。俺はそれをみて心の底から安堵する。それと同時に全身から力が抜け、地面に倒れるように座りこむ。

「あゝやべえ、腰ぬけた。立てねえ。」

「ここって森の中だし魔物にとって格好の獲物だね(裏声)」

「相当やばいな、どうするか。いつそ諦めて寝るか」

「寝ちゃダメー(裏声)」

「俺が死んだら、誰がこのパーティーで家事やるんだろうな？」

馬車に敷いてある絨毯はほぼ毎日洗わされるし、洗濯もできるのは俺と勇者様しかいないけど、勇者様に選択をさせるとは何事だとかみついてきたから俺が洗濯するし、食事の準備だってあいつら何もできないしそのくせ俺に一切の感謝なし。

もう死んであいつら困らせてもいいんじゃないかな？

そんなことを考えながら目を閉じる、翌朝、無事に保護されたが寝起きにあいつらの顔を見るのは辛いな。

「へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、へびコワイ、ソラコワイ、」

俺が保護した青年はうわごとのように二つの言葉のみを繰り返して震えていた。王女様とルサルカ様は気持ちわるいものを見る目で見たし、勇者様はなぜ自分が怖がられているのかを不思議がっていた。俺は勇者様の勘違いに気付いたが、黙っただけだ。勇者様の名前は空なのか・・・すぐに忘れるだろうな、勇者様と呼んでるし。

大蛇と呼んでいいのかわからない代物にあったことは伏せておいた。言わない方がいいだろう。あの大蛇の言っていた苦労人ておそらく勇者様の幼馴染のことだしな。

勇者様がどんな反応するかわからないし、王女様とルサルカ様は不機嫌になるだろうしな。やつあたりはごめん。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5712x/>

---

俺にかまわず先に行け！！・・・俺？追いかけるわけねえだろ

2011年12月24日02時28分発行